

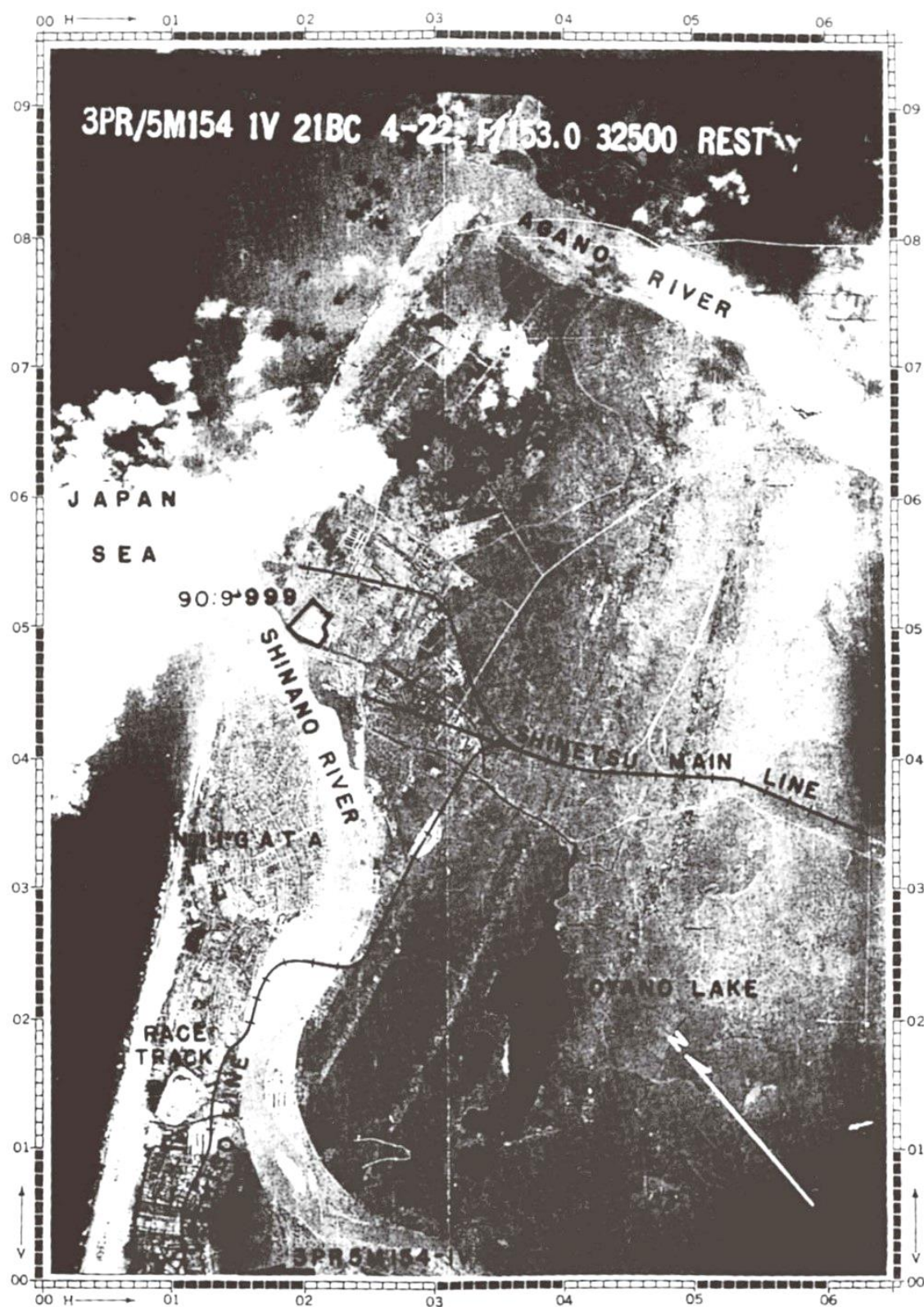
新潟歴史双書 2

戦場としての新潟

新潟市



● 俘虜收容所職員と俘虜 個人所蔵



昭和20年4月22日にB29が撮影した新潟の航空写真 『Air Target Analysis』 「USSBS」（国立国会図書館所蔵）から（10ページ図4参照）

この写真は著作権の関係で表示できません。
書籍の「戦場としての新潟」をご覧ください。

新潟市の晩部隊の配置図 個人所蔵

知事布告

(昭和二十年八月十日)

鬼畜敵米ハ新型爆弾ヲ使用シ廣島市ヲ暴撃シタ之ガ爲同市ハ從來國内諸都市ガ蒙ツタ空襲ニ比ベテ極メテ僅少
ノ爆弾ヲ以テ最大ノ被害ヲ受ケタノデアル此ノ被害ハ今迄ノ各種防空施設ヲ殆ト無効トシ從來ノ民防空對策
ヲ以テハヨク對抗シ得ナイ程度ノモノデ人命被害モ亦實ニ莫大デアツテ酸鼻ノ極トモ謂フベキ狀態デアツタ
此ノ新型爆弾ハ我國未被害都市トシテ僅ニ殘ツタ重要都市新潟市ニ對スル爆撃ニ近ク使用セラレル公算極メテ
大キイノデアル
茲ニ於テ縣ハ熱慮ノ結果人的資源ヲ確保シ戦力ノ保全ヲ期スル爲別記ノ如キ措置ヲ急遽且強力ニ實施スルコト
ト致シタ次第デアル
市民各位ハ既ニ敵ノ中小都市ニ對スル空爆開始以來疎開ニ關シ充分ナル理解ヲ以テ着々實行シテ來タノデアル
ガ變轉ノ激シイ戰局ト暴戾ナル敵ノ攻撃手段ニ對シ市民各位ハ覺悟ヲ新ニシ本措置ニ基キ更ニ一層徹底シタ
疎開ヲ急速ニ實施シナケレバナナイ
本措置ハ敵ノ無辜ノ市民ニ對スル殺滅的殺傷企圖ニ肩スカシテ喰ハセントスルモノデアアル本措置ハ甚ダ突然デ
アルガヨクコノ趣旨ヲ諒解シ益々闊現ヲ燃ヤシ逃避的ニ疎セス整齊タル秩序ヲ以テ市外轉出ヲ爲ス様特ニ要望
シテ止マナイ次第デアリマス

新潟市ニ對スル緊急措置要項

- 一、一般新潟市民ノ急速ナル徹底的人员疎開
- 二、重要工場ノ有効且能率のナル疎開
- 三、公共施設ノ疎開
- 四、新潟市ニ於ケル建物疎開ノ一時中止

緊急強制疎開の知事布告

「新潟歴史双書」刊行のことば

人と同じように、町にも表情や個性があります。どの町を訪れても、違った雰囲気を感じるのは、それぞれの固有の歴史があるからです。私たちの新潟市も、長い歴史の中でその個性を培ってきました。

この新潟市の歴史を、分かりやすい内容で、個別のテーマごとに紹介するシリーズが、新潟歴史双書です。

この双書で取り上げるテーマは、私たちの町・新潟を語る上で、欠かせないものを中心に選んでいきたいと思います。

私たちは、先人の築いてきた礎の上に立っています。新潟市をより深く知り、これからの新潟市を考えていただくために、この新潟歴史双書が役立つことを願っております。

平成十年十一月 新潟市長 長谷川義明

はじめに

本書は、太平洋戦争末期に、日米両国が新潟をどのようにとらえ、どのように位置付けていたかということや、戦争によって、新潟の町や、新潟にいた多くの日本人・外国人がどのような被害や苦難に遭ったかということを記述した本です。

戦争末期、日本軍は本土決戦を唱えて態勢を強化しようとしていました。新潟港は「満州」（中国東北部）や朝鮮半島から、本土決戦に必要な食糧をはじめとする物資を運び入れる重要な拠点になりました。また、太平洋側の工場が空襲で破壊されると、新潟の工場の重要性がますます高まってきました。新潟の港や工場には勤労動員などで多くの労働力が集められましたが、それだけでは不足でした。港で貨物の積み降ろしをする船舶部隊や港を守る港湾警備隊など、多くの陸海軍の部隊が新潟に駐屯しました。また、朝鮮人や中国人が連行されてきて、新潟の港などで働かされました。新潟には俘虜収容所が開設され、欧米系の俘虜も港や工場で働かされました。激しい労働と不十分な衛生・医療・生活環境のために、多くの外国の人々が命を失いました。

アメリカ軍は、昭和二十（一九四五）年五月から新潟港に機雷を投下し始めました。機雷に触れて損害を受ける船が相次ぎ、死傷者が多数出ました。七月十七日と八月十日には、アメリカ軍の艦載機が新潟を襲撃しました。八月十日の空襲には、日本軍も応戦しました。機銃掃射やロケット弾の発射によって港の内外では多くの船が傷つき、市内各所で多数の兵士・市民が死傷しました。

八月十日、新潟県は新潟市に原爆が投下される虞があるとして、市民に緊急疎開を命じることにしました。それを知った市民の多くは急ぎ新潟市の中心部を去りました。実際に、新潟市は一時はアメリカ軍の原爆投下の候補地になっていました。そのために新潟市は焼夷弾などによる空襲の対象から除外されていたのです。新潟市や新潟市民は結果として原爆投下や大空襲を免れ、八月十五日の敗戦を迎えました。

こうした内容の本書の書名に「戦場」という言葉を用いることに、違和感を持つ人もあるかもしれません。中国大陸や東南アジアあるいはシベリアで、戦ったり抑留されたりした方々からは、「戦争や戦場はこんなものではない」という声が聞こえてきそうです。「収容所の外国人の死を戦争や戦場での仕方のない出来事にしてしまうのか」という意見もありそうです。しかし、艦載機との交戦や機雷封鎖・掃海は戦闘行為です。また、銃撃や触雷で死んだ人々やその遺族にとって、その死は間違いなく戦争による死です。死者の数の多少は関係ありません。また、外国の人々も戦争のために遠く故郷を離れて新潟の地に連れてこられたのです。これらの人々にとって、新潟は「戦場」であったと言ってよいと思います。また、二十年春からの相次ぐ軍隊の駐屯、深夜の度重なる空襲や原爆投下の恐怖は、新潟市民に「戦場」を意識させずにはおきませんでした。そうした意味を込めて本書を「戦場としての新潟」という書名にしました。



図1 本書に関係する主な施設の位置

本書では市民と戦争の様々なかわりをみな描くことはしませんでした。国家総力戦となった太平洋戦争では、あらゆる人々が戦争に巻き込まれました。兵士としてアジア各地で戦い、傷つき、死んでいった人々。勤労働員のために学習も思うに任せなかった学生・生徒たち。女子挺身隊として軍需工場で働いた人々。肥料や労力の不足するなかで生産した作物を供出した農民たち。親の形見の貴金属から鍋・釜や弁当箱の果てまで供出した人々。すべての市民が戦争にかかわらずにはいられません。記さなければならない事柄は沢山ありますが、他日を期したいと思います。

わたしたちは、先に刊行した『新潟市史』と本書を執筆するために、広く調査しました。防衛庁の資料、アメリカ軍の記録、中国人の収容施設の報告書、横浜裁判の資料など、今まで使われなかった多くの資料を発掘しました。各地の自治体史や研究者の成果も参考にさせていただきました。全国各地の多くの方々から証言をいただきました。こうした資料や証言を基に、今まで埋もれていた事実をいくらか明らかにすることができたと考えています。

しかし、調査はまだ十分ではありません。たとえば、俘虜虐待の記述は、主として横浜裁判の俘虜側の証言によっています。連行されてきた中国人に関する記述は日本側の資料しか入手していません。さらに朝鮮人に関してはほとんど資料を見付けることができませんでした。また、戦局の推移によって軍隊が実際にいつどのように動いたのかを正確に把握することは困難でした。

加えて、戦後五三年の歳月の経過は重く、証言していただいた内容が証言者によって食い違っていたり、資料によって数字や名前が異なっていたりしていることも多々ありました。推定によって事実と認定したこともあります。結論が出なくて記述できなかったこともあります。今後、新たに発掘される資料によって記述の誤りが分かることもあるかと思います。また、双書の性格とページ数から詳しく記述できなかったこともあります。今後に残した課題は多く、本書の刊行で、戦争と新潟について語り尽くしたわけではありません。

本書は、多くの方々や各地の行政機関・研究機関などの御助力なしには、刊行することができませんでした。証言していただいた後に、病に倒れられたり、亡くなられたりした方も

おられます。巻末で失礼ではありますが、主にお世話になった方々のお名前を掲載させていただきました。あらためてお礼申し上げます。

なお、本書で用いた国立国会図書館所蔵資料の原資料は、米国国立公文書館が所蔵しています。

本書は新潟市総務局国際文化部市史編さん課の課員が共同で調査・執筆しました。

目次

口絵

「新潟市歴史双書」刊行のことば

はじめに

第一章 「暁」と「響」

第一節 戦争末期の新潟港……………	2
敗色濃い太平洋戦争 新潟港の荷役 本土決戦態勢下の新潟港 アメリカ軍にとっての新潟	
第二節 陸軍の駐屯……………	6
新潟陸軍輸送統制部 第一船舶輸送司令部北陸支部 暁第四四連隊 暁第五〇・五八連隊 その他の暁部隊 高射砲部隊 新潟飛行場と軍隊 山田飛行場 その他の陸軍部隊・機関	
第三節 海軍の駐屯……………	13
海軍の進出 新潟港湾警備隊 第一〇五戦隊 駆逐艦「響」	

第二章 外国人強制労働と戦時俘虜

第一節 朝鮮人・中国人の強制労働……………	18
朝鮮人の強制連行 新潟市内の連行朝鮮人 抵抗する朝鮮人労働者 連行朝鮮人労働者の帰国 新潟へ強制連行された中国人 新潟華工管理事務所 連行中国人労働者の生活 中国人労働者をめぐる紛争 中国人労働者の帰国	
第二節 俘虜収容所……………	23
戦時俘虜 第五分所の開所 俘虜の労働現場 劣悪な生活環境 第五分所の移転と宿舍倒壊 第一五分所 不十分な医療 医療環境の改善 俘虜への制裁 俘虜の帰国 横浜裁判	

第三章 触 雷

第一節 B29 の本土攻撃と「飢餓作戦」……………	35
B29 の日本本土攻撃 「飢餓作戦」 新潟港への機雷投下 撃墜されたB29 アメリカ軍潜水艦の日本海侵入	
第二節 触雷した船舶……………	38
新潟港での触雷 貨物船「貴船丸」の触雷 陸軍軍用船「宇品丸」の座礁 越佐航路の貨客船の触雷 漁船の触雷被害 掃海作業中の触雷 新潟鉄工所の舢舨の触雷 戦後も続いた浚渫船の触雷 新潟港の機能低下	

第四章 艦載機の空襲

 第一節 艦載機の出現 46

 新潟空襲の危惧 飛行場の被災 市民の対応 八月九日

 第二節 八月十日の空襲 48

 艦載機の奇襲 目標は飛行場石油タンク 「おけさ丸」の被弾

 「宇品丸」の炎上 その後の「宇品丸」 港外で攻撃された船

 陸上の被災

第五章 原子爆弾と新潟

 第一節 疎開..... 55

 空襲への備え 第一次建物疎開 第二次建物疎開 第三次建物疎開

 「新潟県人員疎開実施要綱」

 第二節 原爆投下の危惧と市民の疎開 57

 市民は疎開せよ 疎開する市民 原爆投下候補地新潟 パンプキン投下

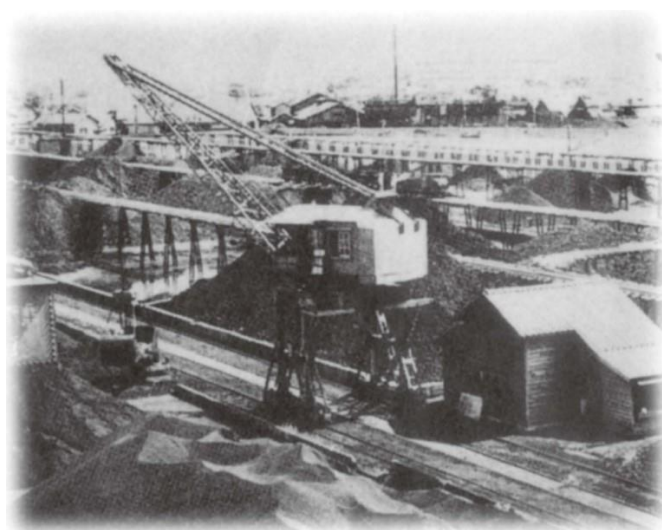
 原爆投下命令と作戦命令

参考文献 64

<ご注意>

ページ番号については、ここでの「戦場としての新潟」のページ番号に置き換えております。
したがって、書籍の「戦場としての新潟」のページ番号と異なります。本文中のページ番号
についても同様です。

第一章 「暁」と「響」



●機械化された臨港埠頭 『創業六十年史』新潟臨港海陸運送株式会社から

第一節 戦争末期の新潟港

敗色濃い太平洋戦争

昭和十六（一九四一）年十二月八日、日本はハワイのアメリカ軍基地を襲撃し、太平洋戦争を開始した。開戦直後、日本は東南アジアや太平洋の島々を次々と占領した。しかし、開戦から半年後の十七年六月、ミッドウェー沖の海戦で大敗北を喫した。これを契機に、アメリカ軍の反撃が始まった。十九年七月にマリアナ諸島サイパン島の日本軍が全滅した。日本本土の各都市は、マリアナ諸島の基地から発進するアメリカ軍のB29爆撃機の空襲にさらされることになった。空襲は軍事施設や軍需工業地帯だけでなく、住宅地域や商業地域にも及び、焼夷弾を大量に投下された都市は焦土となった。アメリカ軍の侵攻は二十年二月の硫黄島、四月の沖縄本島上陸と続き、六月になると日本は本土決戦態勢を採ることを決めた。

新潟港は、このように敗色が濃い中でも、あくまで戦争を進めようとする日本にとって、ますます重要な港になったのである。

新潟港の荷役

十七（一九四二）年十月、政府は、新潟臨港開発株式会社に対して新潟港の石炭荷揚げ力増強に関する指令を出した。新潟臨港開発が所有する臨港埠頭に、十八年四月までに木造栈橋を四基新設すること、貯炭場を整備すること、貨車引込線を敷設することなどを求めたのである。この指令は、北海道・樺太（サハリン）から京浜地帯へ向けて、大量の石炭を、太平洋側の危険な海上輸送を避けて日本海側で陸揚げして、そこから鉄道で輸送するための指令であった。新潟港はそのために最も適した港であった。

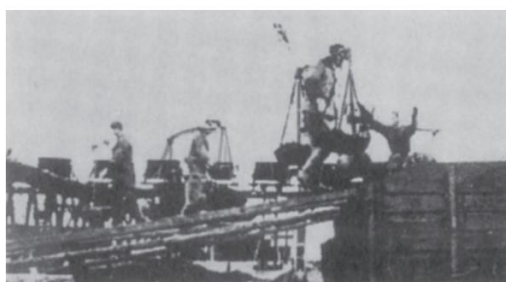


図2 石炭の貨車積み作業 『創業六十年史』新潟臨港海陸運送株式会社から

新潟港では、石炭・鉱石などのいわゆる「バラ物」は臨港埠頭で積み降ろされた。石炭の場合、本船からの荷揚げには一つの船倉ごとに四、五個のもっこが用いられた。一つのもっこに四、五人が付いて石炭をシャベルで入れた。もっこの石炭を舁はしけに積み込むためには巻き揚げ機が使われた。しかし、船入り場へ曳航された舁からは、舁と陸地の間に渡した板を渡って、人が天秤てんびんで舁に入れた石炭を担いで貯炭場まで運んだ。貨車への積み込みも、貯炭場と貨車の間に板を架けて、人が天秤で担いで運んだ。このように石炭や鉱石などの積み降ろしは、ほとんど人力に依存した荷役であった。

新潟港の貨物取扱量は増加したにもかかわらず、戦争に召集される労働者が続出して労働力が不足した。このため埠頭を整備し、荷役の機械化を進めることが急務になっていた。

この指令によって新潟臨港開発は、人力に頼った荷役を改善することになった。十八年四月に木造栈橋Aを、八月にBを、翌十九年一月にC（現在のD埠頭の位置）を相次いで完成させ、舢舨を使用せずに直接船を栈橋に接岸させて荷役をすることができるようにした。新潟港へ陸揚げされる京浜工業地帯向けの石炭は増加した。これを運ぶ臨時の貨物列車が一日に何本も編成された。それでもなお、埠頭付近の空き地には石炭が山積みされていた。この状況を打開するため、ベルトコンベアー・高脚ジブクレーンなどの機械が設置された。

新潟港では、伏木（富山県高岡市）・酒田（山形県）・船川（秋田県男鹿市）の三港とともに、十八年十二月から石炭の「総揚げ制」が始まり、翌十九年三月からは全貨物の「総揚げ制」が始まった。総揚げ制は荷役時間を短くし、船を効率良く使うために、貨物の行き先に関係なく、すべてを一つの港で陸揚げし、港で振り分けて各地へ輸送する方式であった。このため臨港埠頭の取扱貨物の量は十八年になって格段に増加した（表1）。

また、県営埠頭でも大豆をバキューム方式で荷揚げする装置や貨車に積む装置が新しく導入され、二〇トン重クレーンも新設された。さらに十九年四月には万代島に木造栈橋が完成し、石炭を荷揚げする装置が設置され、引込線も敷設された。このように新潟港は港湾整備に力が注がれ、取扱貨物量が増えていった。

年	船数	貨物量
	隻	トン
16	325	486,187
17	314	579,766
18	511	1,116,741
19	599	1,345,272
20	358	628,177

表1 昭和16～20年の新潟港臨港埠頭の取扱船数・貨物量
「GHQ/SCAP Records of Judge Advocate Section」
（国立国会図書館所蔵）から作成

本土決戦態勢下の新潟港

アメリカ海軍機動部隊は二十（一九四五）年一月中旬、南シナ海で日本の商船隊の掃討作戦を展開し、三月の沖縄作戦と相まって、日本の南方からの物資輸入に大打撃を与えた。三月に硫黄島、六月に沖縄が陥落すると、日本の船舶が航行できる水域は日本海・対馬海峡・黄海などわずかな水域に限られてしまい、南方資源の輸送は途絶状態となった。また、太平洋側の沿岸航路はアメリカ軍の攻撃によって安全の確保が困難になった。三月下旬にアメリカ軍が「飢餓作戦」と呼んだB29爆撃機による機雷封鎖が始まると（三五ページ参照）、大陸資源の輸送路は日本海側に重点が移ってきた。大陸の食糧を本土へ運ぶルートは、もはや北朝鮮の港から日本海側の諸港に運ぶルートしか残されていなかった。軍は三月から新潟港を重要な港湾と位置付け、アメリカ軍の攻撃を避けて、短時間で多くの物資を陸揚げしこれを国内各地へ輸送する「裏日本地区短切揚搭作戦^{たんせつようとう}」を実施した。

新潟港では昼夜を問わず休みなしで荷役作業が続いた。港で荷役に当たる人々の中には、市内や周辺農村からの勤労報国隊や新潟市立中学校（現県立新潟南高等学校）・県立新潟中学校（現県立新潟高等学校）の勤労動員生徒、「暁部隊」と呼ばれた陸軍船舶部隊（第二節参照）、それに強制連行されて来た朝鮮人や中国人、さらにはアメリカやカナダなどの戦時俘虜^{とりよ}の姿があった（第二章参照）。二十年五月には新潟港の荷役に一日約四〇〇〇人が投入されていた。

こうした日本海側の輸送ルートに対しても、アメリカ海軍は五月下旬から約一か月間、グ

アム島から新鋭潜水艦を出撃させた。対馬海峡を突破して日本海に侵入したこれら潜水艦は日本の船舶を攻撃した（三八ページ参照）。また「飢餓作戦」が日本海側にも及び、アメリカ軍は五月中旬からは新潟港にも機雷を投下した。そのため多くの船が触雷し、船の出入りは途絶えた（第三章参照）。

六月二十八日、日本軍は、機雷封鎖や潜水艦攻撃で日本海側の海上交通が完全にまひする前に、朝鮮・「満州」（中国東北部）の重要物資を日本に緊急輸送して、本土決戦に臨もうと、日本海での輸送作戦を実施した。この作戦は「日号作戦」と呼ばれ、陸軍と海軍が共同で日本海の航路を防備して、短期間で多量の重要戦力物資を輸送しようとしたものである。この作戦でも、新潟は重要拠点港であった。そのために六月には機雷封鎖で減少した取扱貨物量や出入港船舶数は、七月には五月の水準まで回復した。ただし、これは触雷の危険をかえりみない作戦であったため、新潟港の内外で触雷する船が相次いだ。

アメリカ軍にとっての新潟

アメリカも、新潟が重要な輸送拠点の一つであり、さらに工業上も大切な役割を担っている都市であると考えていた。

十九（一九四四）年十月、アメリカ軍は日本に関する情報を収集して「陸海軍合同情報研究」を作成した。この資料は、多くは戦前に収集した情報に基づいて作成され、開戦後に占領地で押収した文書類や日本人俘虜の陳述、上空からの偵察など



図3 「陸海軍合同情報研究」に掲載された新潟市の航空写真 「USSBS」（国立国会図書館所蔵）から

で得た情報も補足してある。その中の新潟市に関する記述の主な部分を抜き出してみる。

新潟（一九四〇年、人口一五万九〇三人）

- (1)重要性 新潟は戦略上、海軍の航空基地として重要であり、朝鮮や満州向けの軍事輸送の拠点になっていて、鉄道の結節点でもある。日本の製油業の中心地であり、鉄鋼・石油精製・軽金属（マグネシウム）・織物・製材・紙パルプ・機械などを含む重要な工場施設が集まっている。また、新潟県の県都であり、一大米産地帯の中心でもある。
- (2)自然的特性 新潟は信濃川の河口にあって、川の両岸にまたがっている。新潟の街は堀で区切られていて、堀の中には市街の中央線に沿って流れているものもある。新潟の町並みは形状的にはやや不規則で、川の堤防沿いに四キロメートル、幅は二・八キロメートルである。川の北西側は密であるが、南東側は比較的まばらである。川の付近では市街地の平面形は規則的な網目状になっているが、川の流れる方向の変化に従って市街地もその方位を変えている。

この都市は機能によって分化している。中心地付近のビジネス地区は川の左岸に面している。住宅地区は海に近い周辺部に位置している。川の右岸はおおむね工場地区で占められている。都市内の主な空閑地は学校や大学グラウンドである。

- (3)交通手段

- a 水路 汽船が函館や神戸へ通じており、毎日長崎にも出ている。沖合^{とうびょう}投錨地は何の防御もなく、冬季や春季の強風にさらされている。荒天には、船舶は佐渡の^{えびす}夷港（現両津港）に避難する。新潟の河口港は、最近は七・五メートルまで^{しゅんせつ}浚渫している。埠頭は川に入ってくる艦船を十分に処理できるが、狭い運河では大型船の運航は困難である。
- b 鉄道 越後線が新潟と南方の沿岸の町を結んでいる。また、羽越本線が新津を経て北の沿岸の町を結び付けている。磐越西線若松や他の内陸の町と結ばれている。
- c 道路 国道が海岸近くを北へ走り、南は長野へ走っている。県道は南東へ達している。
- d 空路 新潟は東京や富山からの定期航空路上にある。飛行場は都市の七・二キロメートル北東にあり、海軍の航空基地の一部になっている。広さは九〇〇メートル×三九六メートルである。乗員訓練所がある。
- (6)内陸交通 市街電車軌道が町の南西端から出てほぼ北限まで達している。主なビジネス街を回って、川端で四地点への支線を出している。バスが他の街路を通っている。この都市は多くの堀で区切られている。信濃川を少なくとも三本の橋がまたいでいる。その中の代表的なものが万代橋で、この都市の二つの地域を結合するものである。多くの堀には二〇〇以上の橋が架かっている。
- (7)修理施設 新潟には引上船台も含めて船舶の修理施設がある。そのドックは一万トンのつり上げ能力を有している。様々な工場に関連して機械修理工場も存在する。
- (8)公共施設
- d 上屋・貯蔵庫^{うわや} 上屋は川端と工場施設の付近に立地している。川の東岸に石油タンク群が二群あるが、その一つは河口に、もう一つはやや上流にある。

堀や市街電車に関する記述のように不正確な部分もあるが、新潟市について詳細に調査していたことが分かる。また、日本の二万五千分一地形図や海図・新潟港図・日本国有鉄道時刻表をはじめ、種々の資料を駆使して作成した新潟市の市街図も含まれている。

地図に盛り込まれた情報は港湾施設・主要工場・官庁・学校・鉄道・橋^{きょうりょう}・新潟港周辺水深など様々で、しかもほとんど正確に記入されている。

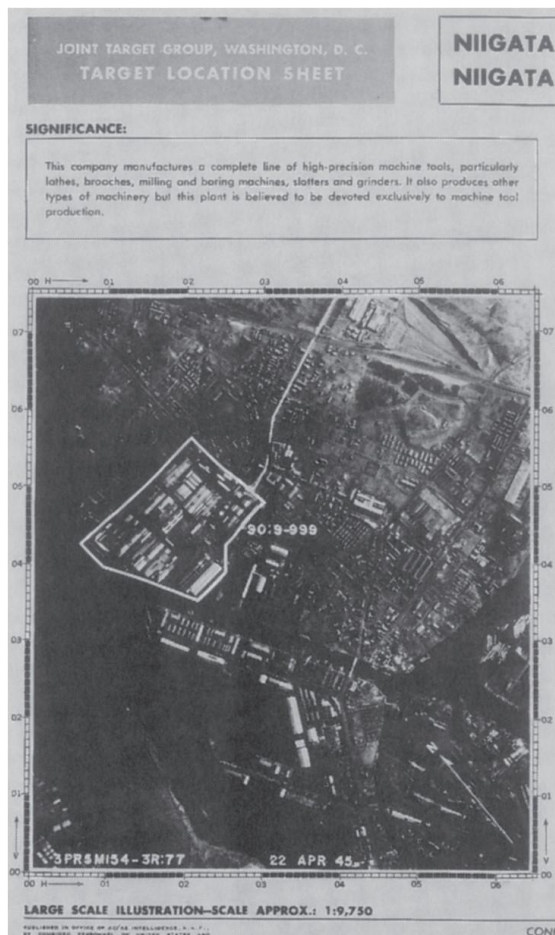


図4 アメリカ軍の攻撃目標位置図（新潟鉄工所山ノ下工場）
『Air Target Analysis』『USSBS』（国立国会図書館所蔵）から

この外に、アメリカ軍は攻撃目標を上空から撮影した写真をまとめた資料も作成している。たとえば、新潟鉄工所の「第一工場」として入船工場の写真が掲載され、「この会社は、高精度な機械、特に旋盤・穴繰り器・穿孔機^{せんこうき}・スラッター・研磨機などを一貫して製造する。この工場は、以上のすべてか一部、それに車両・ディーゼルエンジン・一般機械などを生産すると考えられる」と、工場の業務内容にまで及ぶ説明がなされている。新潟市内の攻撃目標としては、外に「新潟鉄工所第二工場」（山ノ下工場）・「日本石油」・「日本軽金属」などが挙げられている。

アメリカ軍はこうした情報に基づいて新潟市の重要性を把握した上で、攻撃計画を立て、空襲してきたのである。

第二節 陸軍の駐屯

新潟陸軍輸送統制部

昭和十四（一九三九）年四月に新潟海軍地方人事部が設置された。新潟・山形両県の海軍兵士の徴募・召集・点呼、在郷軍人の指導、戦没・戦傷者の家族の扶助などを担当する機関である。さらに十五年八月には、陸軍編成の改革によって一府県一連隊区となり、高田と新発田の連隊区司令部が統合されて、新潟市に新潟連隊区司令部が設置された。連隊区司令部も徴兵、動員、召集、在郷軍人の指導などを担当した。十四年まで新潟市には軍関係の機関や施設はなかったが、これによって新潟市は県内の陸・海両軍の事務関係の中心地になった。ただし、兵営・練習場などはなく、兵士の数は少なかった。

太平洋戦争の戦局が悪化し、本土決戦態勢がとられ、新潟港の重要性が高まると、新潟市に駐屯する兵士の数は急激に増えていった。

二十年になると、軍は連合軍の攻撃を避け、短期間で多量の物資を陸揚げし、各地へ輸送する「裏日本地区短切揚搭作戦」を実施した。二十年三月に、新潟港の短切揚搭作戦を担当する新潟陸軍輸送統制部が新潟市に設置された。この本部は、当初、中央埠頭付近の日本海汽船株式会社の建物に置かれたが、後に宮浦国民学校（現宮浦中学校）に移された。

この統制部は、陸軍の組織の上では第十二方面軍司令官の指揮下に置かれた。第十二方面軍司令官は、およそ関東甲信越地方に配置されていた部隊や機関を指揮した。新潟陸軍輸送統制部は、新潟港だけでなく、日本海側の重要港湾における陸軍に關係する船舶・鉄道の輸送、倉庫、労務、通信などをすべて統制し、陸軍部外との交渉・調整をする機関であった。

第一船舶輸送司令部北陸支部

二十（一九四五）年四月には、新潟市に陸軍の第一船舶輸送司令部北陸支部が設置された。この支部も、当初は日本海汽船株式会社の建物に置かれたが、その後、宮浦国民学校に移転した。先に宮浦国民学校に移っていた新潟陸軍輸送統制部長が、第一船舶輸送司令部北陸支部長を兼務した。



図5 宮浦国民学校 『宮浦校創設50周年記念誌』から

宮浦国民学校は船舶輸送関係の機関が集まって、あたかも合同庁舎のようになった。宮浦国民学校は、二十年四月で、二八学級、約一五〇〇人が通っていた高等科一・二年だけの国民学校であったが、これらの部隊に校舎を提供するため、四月十四日には二年生が二部授業を開始し、さらに五月十日には、全校生徒が長嶺国民学校（現長嶺小学校）に移った。高等科二年生は市内の工場へ勤労働員されていて、学校には一週間に一日ほどしか通ってこなかったが、長嶺国民学校では長嶺と宮浦の児童・生徒が午前・午後に分かれて授業を受けた。

第一船舶輸送司令部北陸支部は、「日本海船舶隊」とも呼ばれ、陸軍船舶部隊の組織に属していた。陸軍船舶部隊の母体は陸軍省に所属した陸軍運輸部であった。太平洋戦争の開戦により、十七年に陸軍運輸部をもとに大本営に直属する船舶部隊が組織され、司令部が広島市宇品に置かれた。このとき、新潟市には新潟支部が置かれた。さらに、十八年九月には、陸軍船舶兵が、上陸作戦の援助、船艇による兵士と物資の輸送、港湾での物資の揚げ降ろしなどを任務とする兵科となった。陸軍船舶兵は急激に増加し、敗戦時には三〇万人を超えたと言われる。陸軍船舶部隊の中心をなしていた部隊は船舶工兵隊であったが、その外、船舶砲兵・船舶高射砲・船舶機関砲・船舶通信などの部隊も含まれていた。

陸軍船舶部新潟支部の人員は少人数であった。この支部が、二十年四月十五日、北陸支部に改編されたのである。支部の人員も軍属一五人を含めて一七五人に増員された。本土決戦態勢に備えて、新潟港で取り扱う物資が増大することが予定され、民間から動員できる労働力では到底対応できないことから、大本営は、この北陸支部の指揮下に陸軍船舶部隊の兵士を多量に投入して、新潟港の荷役作業を担当させることにしたのである。陸軍の各部隊には、秘密保持の上からも通称が付けられていたが、陸軍船舶部隊の通称は「暁」であった。これが、新潟市民の記憶に残る、いわゆる「暁部隊」である。

暁第四四連隊

第一船舶輸送司令部北陸支部の指揮下の暁部隊が新潟に進駐したのは、二十（一九四五）年四月中旬から五月にかけてであった。その総員は三〇〇〇～四〇〇〇人に上った。新潟の暁部隊は、船舶工兵第四四連隊・第五

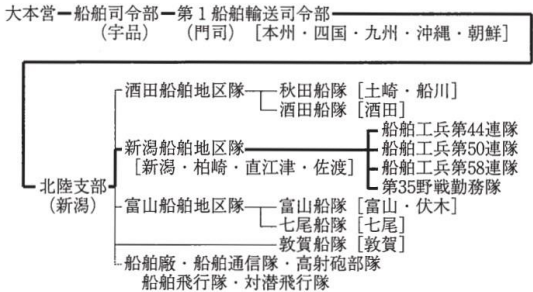


図6 新潟関係船舶部隊（暁部隊）の組織 ()内は所在地, []内は管轄区域・母港 「船舶司令部」は陸軍省陸軍運輸部を母体に昭和17年に改編 「第1船舶輸送司令部北陸支部」は「第1船舶輸送司令部新潟支部」を昭和20年4月15日に改編 『吉田郁生のことなど』などから作成

○連隊・第五八連隊などであった。船舶司令部（広島市宇品）から新潟方面へ派遣された参謀松原茂生陸軍少佐が所持していた地図（口絵参照）などによれば、新潟市内における暁部隊の駐屯の状況は表2のようであった。

船舶工兵第四四連隊は内地で動員され、石巻（宮城県）で三個中隊一〇九九人で編制された。一度は三個中隊が新潟に進駐したが、そのうち第一中隊は伏木港（富山県高岡市）に移駐した。このため、敗戦まで新潟に駐屯した兵員は約七〇〇人と推定される。隊員の年齢は高く、平均四〇歳ぐらいではなかったかと言われている。

伏木へ移駐した第一中隊は鏡淵国民学校に駐屯していた。本部と第二中隊は、新潟市立中学校（現県立新潟南高等学校）に駐屯した。五月三日から駐屯を開始し、その後、数次にわたって隊員が到着した。部隊の主な任務は港での物資の積み降ろしであった。市立中学校には、その間、高射砲部隊の照空隊なども仮泊した。市立中学校の生徒たちは、次々とやって来る部隊と対面式を繰り返し、ときには隊長の訓示を聞いた。この暁部隊が中学校を撤退したのは敗戦後の九月十六日であった。

第三中隊は、松ヶ崎浜村立松ヶ崎国民学校下山分校（現新潟市立下山小学校）に駐屯した。幹部は学校周辺の寺院や民家に宿泊し、兵員は学校に宿泊した。隊員は、飛行場の整備や警備に当たったという証言もあるが、はっきりしない。

暁部隊の各部隊は兵員が多いことなどから、本部とした学校だけでなく、周辺の学校や寺院などに分散して駐屯した。蒲原浄光寺（西堀通十番町）の住職蒲原霊英の五月十日の日記によれば「市内の国民学校にて暁部隊の宿泊せざる所なし」という状態であった。市内にとどまらず、たとえば、第四四連隊第二中隊第八分遣隊と推定される伊藤隊は、両川村立酒屋国民学校（現新潟市立酒屋小学校）に、五月一日から駐屯し、東校舎及び北新校舎を使用した。このため酒屋国民学校は二部授業になった。この部隊は信濃川で上陸用舟艇の訓練をしたり、上陸用舟艇で港へ荷役作業をしに行ったりしていたと思われる。伊藤隊が酒屋国民学校を撤退したのは八月二十四日であった。

暁五〇・五八連隊

船舶工兵第五〇連隊も内地で動員された兵員一〇九九人、三個中隊で編制され、石巻から新潟へ進駐した。白山国民学校（現白山小学校）に連隊本部と一個中隊が置れた。この連隊からも、まもなく一個中隊が酒田港（山形県）へ移駐した。一個中隊は坂井輪村立小針国民

部 隊	本部所在地	兵 員 入
第1 船舶輸送司令部北陸支部	宮浦国民学校	約180
船舶工兵第44連隊第1 中隊※	鏡淵国民学校	不明
船舶工兵第44連隊本部・第2 中隊	新潟市立中学校	約700
船舶工兵第44連隊第3 中隊	松ヶ崎国民学校 下山分校	
船舶工兵第50連隊	白山国民学校	約700
船舶工兵第58連隊	沼垂国民学校	約1,300
船舶工兵第109連隊※	長嶺国民学校	不明
船舶通信第6 大隊	県立新潟中学校	約750
船舶通信第6 大隊の一部	木戸国民学校	
船舶砲兵団	万代橋東詰め付近	不明
第9 野戦船舶廠	中央埠頭入口付近	不明
第35野戦勤務隊	龍雲寺	約1,040
病院船衛生第51班	長嶺国民学校	不明

表2 新潟市付近に駐屯した暁部隊 各部隊の隊員は本部の外に現新潟市域の学校・寺院にも駐屯していた ※の部隊は昭和20年8月15日以前に転出した部隊 それ以外の部隊の本部所在地・兵員は昭和20年8月15日時点の推定 「新潟市内部隊配置図」（松原茂生氏所蔵）・「船舶司令部編制人員表」（防衛庁戦史部所蔵）などから作成

学校（現新潟市立小針小学校、当時の所在地は小針保育園敷地）と隣接する瑞林寺に分かれて駐屯した。この中隊は港で物資の積み降ろしをしたが、その外に通信や機雷の除去の仕事もした。後にこの中隊の一部、七五人は岩船郡瀬波町（現村上市）に派遣されて、三面川河口の瀬波港に荷揚げ用の棧橋を建設した。白山国民学校に駐留した兵士は、体育館で寝起きして、主に港で荷役作業に就いていた。

この写真は著作権の関係で表示できません。

書籍の「戦場としての新潟」をご覧ください。

図7 暁部隊の看板が掲げられた白山国民学校玄関 個人所蔵

船舶工兵第五八連隊は、南方で実戦を経験した現役兵で編成され、編制段階では二個中隊、一二八一人であった。四月に新潟へ進駐したときにはまだ^{へんすい}汎水作業隊と呼ばれていた。汎水作業隊の本来の任務は上陸作戦に加わって上陸用舟艇を迅速に艦艇から着水させることであった。しかし、新潟では港の荷役作業と海岸防衛が任務で、六月十五日に第五八連隊と改称した。この連隊本部は、沼垂国民学校（現沼垂小学校）に置かれ、校舎のほとんどを兵士が使用した。この部隊は九月二十日ごろに撤退した。

この外船舶工兵第一〇九連隊が四月初めに長嶺国民学校に駐屯したが、五月一日に移駐した。移った先は分からない。

その他の暁部隊

船舶工兵隊と同じように新潟港で物資の積み降ろし作業をしていた部隊に第三五野戦勤務隊がある。「勤務隊」というのは、本来は「船舶隊」ではなく、いわば「雑役隊」で、鉄道・自動車輸送に従事する部隊であった。この部隊は、徴兵された朝鮮人一〇二二人で編制され、隊員は日本人の将校や下士官の下で荷役作業に従事した。本部は沼垂の龍雲寺に置かれ、兵士は龍雲寺・真善寺・悉地院・法光院・光照寺・西福寺など、沼垂の寺院に分宿していた。この部隊について、寺院の関係者は「本堂は朝鮮人の兵士で一杯であった。兵士は港の荷役に当たっていた。軍服を着用していたが、武器は所持していなかった」、「日本人下士官が指揮していた。軍医もいた。食事は一〇〇メートルぐらい離れた日本石油の青年学校跡で作り、各寺院へ運搬していた」と証言している。また、元軍関係者は「これらの朝鮮人は日本軍の陸軍二等兵であった。軍服は支給したが軍靴は入手できず、やむなく地下足袋を支給した」と証言している。

通信を担当した船舶通信第六大隊の本部は、県立新潟中学校（現県立新潟高等学校）に置かれた。七四六人で編制されていたが、その一部は四月二十二日に木戸国民学校（現木戸小学校）に派遣された。船舶の修理・改造などに当たる第九野戦船舶^{しょう}廠が中央埠頭付近に駐屯した。この部隊には、技術部の兵員や行員の軍属が多かった。

本来は病院船で勤務しているはずの病院船衛生第五一班も、暁部隊として新潟港の物資荷揚げ作業に従事していた。この部隊は、二十年三月ころ、「和浦丸」に乗船して台湾・香

港方面で患者の輸送業務に就いていたが、四月には下船し、下関で船舶輸送に伴う衛生勤務に従事していた。そして、六月七日からは新潟港に転進してきて、長嶺国民学校に駐屯した。人員は分からない。

この外本来船舶の自衛が任務の船舶砲兵団が万代橋東詰め付近（当初は新潟駅前）に駐屯していた。また、敗戦直前にはオートジャイロ機を持った、佐渡へ配備される予定の船舶飛行隊が、新潟飛行場に待機していた。

暁部隊の多くは、本来の任務とはかかわりなく、主に中央埠頭で一日三交替で船から荷物を降ろし、それを埠頭引込線の貨車に積み込む作業に当たった。政府・軍当局は新潟港での物資積み降ろしを重要視していた。二十年六月初旬に船舶司令官佐伯文郎中將、六月六日に第一総軍司令官杉山元^{はじめ}元帥、六月十五日に陸軍大臣阿南唯幾^{あなみこれちか}大將、六月十七日に第十二方面軍司令官田中静壹大將というように、軍や政府の要人が次々に視察・激励のために新潟市を訪れた。暁部隊は本土決戦態勢を支える新潟港を機能させ、軍需品や本土の人々の食糧を確保するという重要な役割を担っていたのである。

高射砲部隊

二十（一九四五）年三月、第十二方面軍は、新潟港の船舶をアメリカ軍の空襲から守るため、付近に所在する陸・海軍の各部隊は密接に協力し、防空に努めるとともに、「裏日本地区短切揚搭作戦」を促進するよう指示していた。二十年六月初旬には大山（現大山台公園付近）に本部を置く高射砲部隊が配置された。これらの高射砲部隊は東京・千葉方面から移動して来た部隊で、港湾・船舶だけでなく重要工場の防護も任務にした。高射砲部隊の通称は「晴」であった。

二十年六月初旬に新潟の高射砲部隊を視察した高射兵監部五十嵐勝吉大佐の報告によれば、新潟市域の高射砲部隊は大山・万代橋・臨港・日和山・埠頭に配置されていた（表3）。大山に配置された隊員は約三〇〇人で、山ノ下国民学校（現山の下小学校）に駐屯した。学校では、この隊員を駐屯させるため、第一～四学年を二部授業あるいは三部授業にした。

五十嵐大佐が視察した時点では、新潟市域には照空隊が配置されていなかった。五十嵐大佐は「新潟ニハ^な為シ得レバ照空一ケ大隊ヲ配属」する必要があると要請している。照空隊が配置されたのは六月下旬になってからであった。照空隊も高射砲部隊に含まれるので、通称は同じ「晴」である。

照空隊の本部は、新潟市公会堂に置かれた。照空隊は、幾つかの地点から照空し、その交差点に機影をとらえ、大山などの高射砲隊に通報するのが任務であった。そのため幾つか

部 隊	配置	編成装備	陣地完成予定
独高第1大隊本部 (晴1993部隊)	大山	電測小隊 配属	6月下旬
独高第1大隊第1中隊	大山	八高6門	6月下旬
独高第1大隊第5中隊	万代橋	七高6門	6月下旬
高第115連隊第1中隊 (晴1910部隊)	臨港	七高4門	概ね完成
高第115連隊第3中隊	日和山	八高6門	概ね完成
独立機関砲第13中隊	埠頭	ソキ6基	近く到着

表3 昭和20年6月初旬の高射砲部隊の配置 「独高」は独立高射砲、「高」は高射砲の略 「八高」は口径8センチメートルの高射砲の意 「ソキ」は機関砲の種類を示す略称 「東北軍管区及新潟師管区高射砲部隊視察報告」(防衛庁戦史部収集)から作成

の部隊が分散して配置された。記録に残っている照空隊には、六月二十八日に県立新潟工業学校（現県立新潟工業高等学校、当時の位置は現日本歯科大学新潟歯学部所在地）に駐屯した一隊がある。また、高射砲部隊か照空隊かは分からないが、長嶺国民学校に七月十六日から晴部隊が駐屯している。

新潟市の高射砲がB29に砲撃を加えるのは、六月二十日からである。砲弾はなかなか命中しなかった。七月二十日に撃墜したB29一機が唯一の戦果であった（三七ページ参照）。

新潟飛行場と軍隊

二十（一九四五）年には新潟飛行場にも軍隊が駐屯するようになった。松ヶ崎浜村地内の新潟飛行場は新潟市営であったが、日中戦争が始まり、戦時色が強まった十四年三月に国に移管された。太平洋戦争の開戦間近い十六年四月、逓信省は、新潟飛行場内に新潟地方航空機乗員養成所を開設した。これは、全国五か所に開設した養成所の一つであった。この養成所は、航空機操縦士・整備士・通信士の養成を目的としたものであった。しかし、新潟は冬期間の悪天候のため、開設の翌年には整備士養成の専門施設に変更された。このころの新潟飛行場は、養成所教官が技量を維持するために飛んだり、分解整備後の試験飛行をしたり、木製飛行機の試験飛行が行われたりする程度であった。

二十年五月六日、新潟飛行場に、九九式高等練習機一機と複葉中等練習機一一機が着陸した。陸軍航空輸送部に所属し、所沢（埼玉県）に配置されていた第九飛行隊が、練習機による夜間特攻訓練を目的として、新潟派遣隊を編成したのである。派遣隊長は米澤修大尉で、この派遣隊は「米澤隊」と呼ばれた。隊員は、約八〇人であった。夜間特攻とは、夜間に上陸しようとする連合軍の舟艇に機体もろとも体当たり攻撃することで、本土上陸に備えた訓練であった。訓練を受ける者は、学徒から特別操縦見習士官になった操縦要員約三〇人であった。いずれも飛行訓練時間は短く、操縦技量は未熟であった。六月九日夜には、目測を誤って複葉中等練習機が地上に激突し、二人が死亡した。六月下旬には、複葉練習機五機と操縦要員・整備員二〇人が米澤隊に補充された。

この写真は著作権の関係で表示できません。

書籍の「戦場としての新潟」をご覧ください。

六月初めには、熊本県黒石原（^{くろいしはら}菊地郡合志町）

にあった陸軍の第八練習飛行隊第四教育隊（黒石原教育隊）が、四式基本練習機とともに新潟飛

行場に移ってきて、離着陸などの訓練を開始した。二十年二月ごろから、アメリカ軍艦載機が熊本地区の航空施設を激しく攻撃するようになったため、新潟へ疎開したのであった。しかし、黒石原教育隊は、約一〇日間の訓練の後、長野飛行場に移動した。

二十年六月、日本海で貨物船や潜水艦がアメリカ軍潜水艦によって撃沈された（三八ページ参照）。日満輸送路による物資の輸送を急いでいた日本軍は、アメリカ軍潜水艦が日本海

図8 新潟飛行場で特攻訓練を受ける米澤隊
個人所蔵

に侵入したことを知り、大きな衝撃を受けた。軍は海上護衛のため、新潟飛行場に磁探対潜哨戒飛行隊一〇機、通称「北辰隊」を配置した。

磁気探知機を備え、潜水艦の探索と船団の護衛を目的とする磁探対潜哨戒飛行隊は、二十年五月に陸軍が初めて編成した。このとき、北辰隊と海燕隊の二隊が編成され、北辰隊は、北海道一千島の哨戒任務に就くため帯広に配置され、その後、天寧（択捉島）^{てんねい まとろふ イトルプ}へ転出した。海燕隊は、朝鮮海峡の対潜哨戒に当たるため南朝鮮に配置された。その北辰隊が、天寧から新潟への転進を命じられ、六月二十七日、新潟飛行場に到着したのであった。

北辰隊は、新潟港及び酒田港近海の対潜哨戒を任務とし、北朝鮮の羅津港・清津港^{らしん せいしん ナジン チョンジン}との航路の船団を護衛すること、新潟港の船舶部隊及び海防艦と緊密な連携をとること、海軍の水上偵察隊（七尾湾・石川県）や第九〇一航空隊（小松・石川県）とも連絡をとることなどを命じられた。北辰隊は、約一二〇人で編制され、隊員は飛行場周辺の寺院などに分宿していた。低空の哨戒飛行は危険で、七月六日には一機が海面と接触して墜落し、四人が死亡した。

新潟飛行場にはこれらの部隊の外に、第七四飛行場新潟分遣隊や中央航路部が配置されていた。

山田飛行場

新潟飛行場に派遣された米澤隊は、陸軍航空運輸部に対し特攻訓練を専用にする飛行場の新設を要請し、新飛行場造成の許可を得た。新飛行場は、曾野木村合子^{ぐうし}ヶ作（現黒埼町山田）に造成された。造成工事は、二十（一九四五）年七月に始まった。工事には、一日一〇〇〇人以上が勤労奉仕に動員された。もっこ・背負籠^{なご}・一輪車・リヤカー・トロッコなどを用いた人海戦術であった。

この写真は著作権の関係で表示できません。

書籍の「戦場としての新潟」をご覧ください。

図9 山田飛行場の造成作業 個人所蔵

新飛行場は八月三日に完成し、米澤隊は、八月八日地元側協力者などを招いて飛行場開きを行った。米澤隊はこの新飛行場で早朝から急降下訓練などをしたが、燃料不足のため午前七時ごろには訓練を終了した。しかし、すぐに敗戦の日を迎え、八月二十四日には飛行機は新潟飛行場へ飛んでいった。

その他の陸軍部隊・機関

十九（一九四四）年四月には、東京の陸軍軍医学校が新潟市の新潟競馬場（信濃町・文京町）に出張所を開設した。戦局が緊迫し、東京の空襲も始まったため、軍医学校防疫部で行っていたワクチン・血清製造部門を疎開させなければならなかった。ワクチン製造には、馬・

牛などの大型動物を使うため、厩舎^{きゅうしゃ}が必要であった。新潟競馬場の馬券売場、厩舎など、すべての建物が研究施設として使用され、数百人が研究に従事した。陸軍軍医学校新潟出張所の本部は、後に新潟カトリック教会に移った。

二十年五月上旬には、「裏日本地区短切揚搭作戦」を促進するため、独立自動車第六六大隊が新潟市に派遣され、新潟陸軍運輸統制部長の指揮下に入った。その本部は県立新潟工業学校であった。その後、大半は宇都宮へ移駐し、敗戦時に新潟市にいた隊員は一個中隊二〇〇人程度と推定される。自動車部隊の通称は「幡」であった。

新潟市に駐屯した陸軍は、暁部隊がその任務の性質の上からも、兵士の数の上からも中心であった。そのため新潟市民の多くは、晴部隊も幡部隊も、新たに新潟市に進駐してきた部隊はみな「暁部隊」であると思っている人が多かった。この外にも新潟市には、表4の陸軍関係の機関が設置されていた。これらの中には、連隊区司令部のように太平洋戦争開戦以前から設置されていた機関もあり、また、地区司令部のように本土決戦態勢の下で国民戦闘組織として臨時編成された機関もあった。いずれも機関の幹部は軍人であったが、外は軍属で、人数も少なかった。

新潟市はいわゆる軍都ではなかったが、二十年四月ごろから暁部隊を中心にして、四、五千人の陸軍兵士が学校や寺院など大きな建物に駐屯する町になったのである。

第三節 海軍の駐屯

海軍の進出

暁部隊を中心に、多くの陸軍の部隊が新潟市に進駐したのとほとんど同時に、海軍の舞鶴鎮守府護衛部隊に属する二つの部隊も新潟市に進駐した。新潟港湾警備隊と第一〇五戦隊である。

それ以前に海軍の機関としては、昭和十六（一九四一）年十二月五日に舞鶴鎮守府に属する新潟在勤海軍武官府が竜が島の日満館に置かれていた。この海軍武官府は、新潟港に出入りする船舶に情報を提供したり、運航を指示したりしていて、勤務する兵員は十数人であった。これに対し、二十年五月一日に編成された新潟港湾警備隊は、駆潜特務艇などの船艇と約六五〇人の兵員を擁していた。また、同年五月五日に編成された第一〇五戦隊は、駆逐艦

機 関 等	所 在 地
新潟連隊区司令部	医学町通二番町
新潟憲兵分隊	医学町通二番町
新潟地区鉄道指令部	新潟鉄道管理局
陸軍兵器廠新潟出張所	中央埠頭付近
陸軍糧秣廠新潟出張所	臨港町三丁目
陸軍被服廠東京支廠新潟出張所	秋葉通二丁目
新潟地区司令部	未確認
第三警備隊司令部	流作場
特設警備隊第三大隊	上大川前通一番
防空監視隊	礎町

表4 新潟市内の陸軍関係機関の配置 主として本文で触れなかった機関について掲げた 「昭和20年内地官衙部隊名簿」（防衛庁戦史部所蔵）などから作成

などの艦艇と約一四〇〇人の兵士がいた。第一〇五戦隊司令官は舞鶴鎮守府護衛部隊指揮官を務め、新潟駐屯後は、新潟港湾警備隊や新潟在勤海軍武官府を指揮下に置き、実質的に新潟港における海軍を統括していた（図10）。

新潟港湾警備隊と第一〇五戦隊の進駐によって、二十年五月から八月の敗戦にかけて新潟港付近に多くの海軍兵士が駐屯するようになったのである。

新潟港湾警備隊

港湾警備隊の編成は、二十（一九四五）年三月に、大本営海軍部が港湾の警備に重点を置くため、横浜警備隊を横浜港湾警備隊に改編したのが最初である。新潟港湾警備隊は、二十年五月一日、舞鶴鎮守府護衛部隊に所属する部隊として編成された。

新潟港湾警備隊の本部は新潟在勤海軍武官府と同じ日満館に置かれた。隊員の宿舎には、料亭元木亭（沼垂東四丁目）や昭和石油株式会社社員寮（平和町）が充てられた。新潟港湾警備隊の任務は、新潟港の警備であったが、具体的には、新潟港水路と船舶の防備、新潟港を中心とした関連する輸送基地（酒田・両津・直江津）の警備、それらの輸送基地の機雷監視、輸送基地に出入りする船舶に対する情報伝達や運航指示など多岐にわたった。しかし、その中心的な任務は、アメリカ軍が投下した機雷の処理、つまり掃海作業であった。

新潟港に投下された機雷は磁気機雷が多かった（三八ページ参照）。磁気機雷の掃海には図12のように、主として舟艇が隊形を組み、ワイヤーに電磁棒を付けて引く方法が用いられた。掃海する船は鉄鋼製では磁気機雷に感応してしまうため、十八年ごろから造船されるようになった漁船式木造船体の駆潜特務艇や哨戒特務艇（遠洋哨戒用）が掃海作業に従事

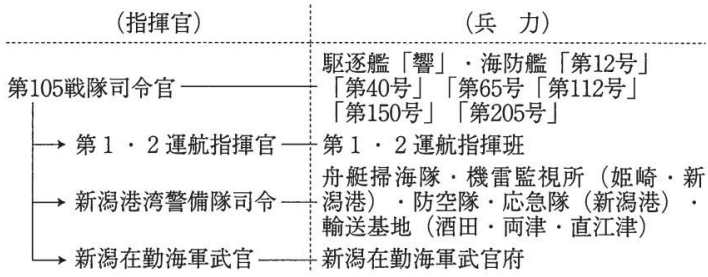


図10 昭和20年5月の新潟駐屯の海軍関係部隊の命令系統と兵力 「第105戦隊（舞鶴護衛部隊）司令部戦時日誌」（防衛庁戦史部所蔵）から作成



図11 昭和20年の舞鶴鎮守府の担任区域 『戦史叢書 本土方面海軍作戦』から作成

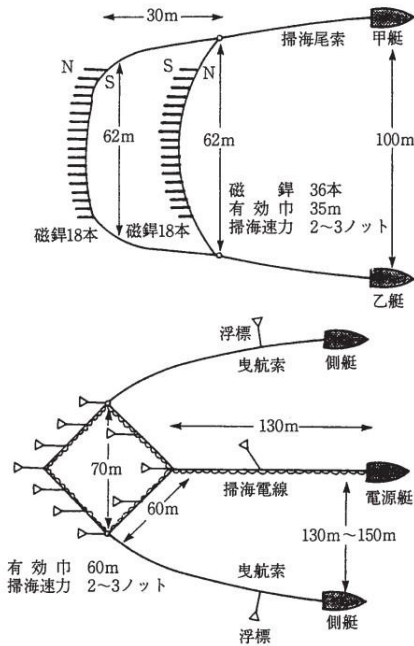


図12 昭和20年に新潟で用いられた掃海方式 『日本の掃海』から

した。また、現地で木造漁船を徴用して掃海に使用した。表5は新潟港湾警備隊の編成当初の掃海作業を示している。新潟港湾警備隊に所属する第一五三号駆潜特務艇や第一五七号駆潜特務艇は、「一号艇」「三号艇」などと名付けられた港湾警備隊の舟艇とともに、連日のように掃海作業に出動していた。掃海作業中に、触雷した駆潜特務艇や徴用漁船もあって、犠牲になった兵士や軍属もいた（四二ページ参照）。この外七尾湾から飛来した水上偵察機が発音弾を投下して音響に感応する機雷を除去していた。

日	港出入時刻	出動艦艇	掃海機雷	備考
14	12：00～14：30	150防カッター	音	処分機雷1個
	12：30～19：30	153駆・①・③	磁・音	水路半量掃海
15	6：30～19：20	153駆・①・③・⑦	磁・音	予定水路掃海完了
	13：30～	水偵2機	音	
16	12：30～16：45	153駆・157駆	磁	器具不良掃海不能
	13：00～	水偵2機	音	処分機雷なし
17	7：30～12：30	①・③・⑧	磁	
	15：30～18：45	153駆・①・③	磁・音	荒天のため中止 おけさ丸触雷
18	7：00～7：20	153駆・157駆・ ①・③・⑦・⑧		荒天のため中止

表5 昭和20年5月14日の機雷投下後の掃海 「出動艦艇」の「防」は海防艦、「駆」は駆潜特務艇、○は新潟港湾警備隊付属艇、その数字は艇の号数、「水偵」は水上偵察機、「掃海機雷」の「音」は音響機雷、「磁」は磁気機雷を示す 「舞鶴護衛部隊戦闘詳報第一号」（防衛庁戦史部所蔵）から作成

第一〇五戦隊

第一〇五戦隊は、新潟を中心とする日本海での船舶の護衛、機動対潜作戦、北陸方面の護衛に関する対陸軍折衝、敵機雷対策及び船員教育に関する在勤海軍武官府への協力などを任務とする戦闘部隊であった。この部隊は、二十（一九四五）年五月五日に舞鶴で編成され、五月九日に新潟市に進駐した。本部は、当初、新潟在勤海軍武官府の近くに置かれたが、六月四日には武官府や港湾警備隊本部のあった日満館に移転した。日満館は海軍の新潟港関係の合同庁舎のようになっていた。

第一〇五戦隊は編制上は駆逐艦一隻（「響」、海防艦六隻（第一二号・第四〇号・第六五号・第一一二号・第一五〇号・第二〇五号）を擁し、これらの艦艇を新潟港・伏木港（富山県）・七尾湾（石川県）・敦賀港（福井県）・宮津湾（京都府）に配置することになっていた。しかし、実際には、編制されたとき、駆逐艦「響」は呉港（広島県）で修理中であり、海防艦第一二号・第四〇号も舞鶴で修理中であった。第六五号・第一一二号・第二〇五号海防艦は、千島・北海道方面の海上輸送が増大したことから、大湊警備府護衛部隊司令官の指揮下にあった。編制後直ちに新潟港に配置されたのは第一五〇号海防艦だけで、第一〇五戦隊の旗艦はこの海防艦が仮に務めた。海防艦は八〇〇トン級の警備・船団護衛用の艦船で、爆雷や砲・機銃を装備していた。五月中に修理を終えた第一二号海防艦は宮津湾に、第四〇号海防艦は伏木港に配置された。

五月の編成段階の、新潟港湾警備隊や新潟在勤武官府の

部 隊 等	兵 員
	入
第105戦隊司令部	46
第105戦隊駆逐艦「響」	354
第105戦隊第12号海防艦	206
第105戦隊第40号海防艦	200
第105戦隊第85号海防艦	199
第105戦隊第158号海防艦	231
第105戦隊第205号海防艦	194
新潟港湾警備隊	652
新潟在勤海軍武官府	15
計	2,097

表6 昭和20年8月15日の第105戦隊司令官指揮下の兵員 この外の海軍関係機関には、新潟地方海軍人事部11人、舞鶴海軍運輸部新潟支部9人がいた 「帝国海軍現在員調」（防衛庁戦史部所蔵）から作成

人員などを含めた第一〇五戦隊司令官の指揮下の兵力は一三四三人であった。これは新潟以外に駐屯していた兵員も入れた人数である。その後、指揮下の艦艇が変わり、八月十五日、敗戦時の第一〇五戦隊司令官指揮下の兵力は、二〇九七人に増加していた（表6）。

駆逐艦「響」

駆逐艦「響」は、第一〇五戦隊編成当初は呉港にあったが、計画に従い二十（一九四五）年七月一日に新潟港に入港した。入港以後、「響」は第一〇五戦隊の旗艦を第一五〇号海防艦から引き継ぎ、県営南埠頭に停泊していた。



図13 駆逐艦「響」 「ひびき会名簿」から

本来、駆逐艦は魚雷・爆雷を主要兵器にして、敵の艦船を撃破することが任務の快速船である。「響」は、一九八〇トン、全長一一二メートル、最大幅一〇・三六メートルで、口径一二・七センチメートルの二連装砲（一砲塔に二門の砲を並べた砲）三門、魚雷発射管三門などを装備していた。「響」は、八年三月三十一日に舞鶴工作部で竣工し、実戦を重ね、二度にわたって航行不能となりながらも修理・復帰した艦艇であった。

「響」は、新潟港に入港してからは一度も港の外に出航せず、「防空砲台」となったといわれる。このことについて、「響」に乗船していた隊員は「新潟には七月に入港したが、その時、既にソ連の参戦が予想されていた。ウラジオストク艦隊の日本海進出に対処できる艦艇は『響』以外に残されていなかった。艦艇も弾丸も温存しておく必要があった。燃料も払底していた」と説明している。この間、隊員は「仕事がないので防空壕掘りや機雷の搜索などをしていた」とか、「『響』に搭載していた手漕ぎのカッター二隻と内火艇（内燃機関装備の小艇）二隻を使って掃海作業をした隊員もいた」などと証言している。また、「新潟市民が強制疎開させられた後、治安維持のため、繁華街をパトロールした記憶がある。市民が一斉に新潟を去っていった後、終戦を迎え、再び大挙して町へ戻って来たことが強く印象に残っている」、「強制疎開の手伝いをした隊員もあった」などという証言もある。

「響」が「防空砲台」としてどのように機能したかは明らかでない。八月十日のアメリカ軍艦載機襲来（四八ページ参照）に際しても、陸軍軍用船「宇品丸」は交戦し、多大な被害があったが、同じ港内に停泊していた「響」が交戦した記録は残されていない。

当時も戦後も、この「響」が停泊していたことを、ほとんどの新潟市民は知らなかった。「響」だけでなく海軍の諸部隊や兵士に対する記憶は少ない。これは陸軍と比べて宿泊地が限られていたこと、防諜のため市民は港湾に眼を向けることができず、情報も流れなかったことなどが理由であろう。

これらの部隊の外に海軍の機関としては、新潟市に、十四年四月一日設置の新潟地方海軍人事部、十八年六月二十五日設置の特設海軍運輸部舞鶴海軍運輸部新潟支部、二十年七月十五日設置の特設船舶救難本部新潟支部などがあった。

第二章 外国人強制労働と戦時俘虜



●東京俘虜収容所第5分所の職員と俘虜 個人所蔵

第一節 朝鮮人・中国人の強制労働

朝鮮人の強制連行

本土決戦態勢に入り、重要性を増した新潟港では、多くの暁部隊の隊員や勤労働員された人々が働いていたが、それだけでは労働力は足りなかった。労働力の不足を補ったのは、強制的に日本に連れてこられた中国人や朝鮮人、捕虜となった欧米人兵士であった。彼らは厳しい労働・生活条件の下で、港だけではなく、市内の工場でも働かされていた。

戦争で多くの男子が戦場へ送り出されると、内地の労働力不足が深刻になった。政府は昭和十三（一九三八）年に公布した「国家総動員法」に基づいて、様々な法令や規則を制定し、老若男女を問わず労働力として動員した。それでも労働力は不足であった。政府は朝鮮人を使って労働力の不足を補ってきた。朝鮮は明治四十三（一九一〇）年に日本に併合され、住民は強制的に日本人に同化させられていた。学校での朝鮮語の使用を禁止されたり、氏名を日本式に改めて届け出させられたりした。

日本政府は、昭和十四年からはそれぞれの会社や事業所の労務係を通じた「募集」方式で朝鮮人の労働者を確保したが、十七年からは職業紹介所を経由して朝鮮総督府を仲立ちにした「官斡旋^{あつせん}」方式という名の強制連行を実施した。さらに十九年九月からは一層強硬な「徴用」という形での強制連行を進めた。日本政府の調査では、十四年から二十年の間に日本へ連行された朝鮮人は七〇万人余に上った。

新潟市内の連行朝鮮人

新潟市内では、日本鋼管新潟製鋼所・新潟鉄工所入船工場・新潟海陸運送・日本通運新潟港支店などで朝鮮人が働かされていた。その数は二十（一九四五）年八月十五日時点で、約六七〇人であった（表7）。

新潟鉄工所入船工場には、二十年一月三十日と三月十七日の二回にわたり、合わせて一六八人が一年間の徴用という形で連行されてきた。これらの朝鮮人は新潟鉄工所の栄寮や北溟寮^{ほくめい}で生活した。日本鋼管新潟製鋼所には一六一人が数回にわたって連行されてきた。このうち十九年十二月に到着した朝鮮人九〇人は日本鋼管の第三報国寮に収容された。新潟海陸運送に連行されてきた一九〇人の朝鮮人は、新潟海陸運送の大陸寮に収容されて、港湾荷役作業に従事させられた。

日本通運新潟港支店の朝鮮人は、会社が釜山^{プサン}まで受け取りに出向き、新潟まで連れてきた。

事業所	人数	新潟到着年月日	新潟出発年月日
新潟海陸運送	194	不明	昭和20.9.15,16,17
新潟鉄工所入船工場	168	昭和20.1.30,3.17	昭和20.9.12,13
日本鋼管新潟製鋼所	161	昭和19.12.-	昭和20.9.14,15
日本通運新潟港支店	82	不明	昭和20.9.17
新潟電気工業	39	不明	昭和20.9.13
栗原組	23	不明	昭和20.9.12
計	667		

表7 新潟市内事業所の強制連行朝鮮人 人数は昭和20年8月15日時点
朴慶植編『朝鮮問題資料叢書第13巻 日本敗戦前後の在日朝鮮人の状況』・
長沢秀「新潟県と朝鮮人強制連行」（梁泰昊編『朝鮮人強制連行論文集成』
所収）から作成

会社の和協寮に収容され、新潟海陸運送の朝鮮人と同様、港湾労働に従事した。和協寮は中央埠頭の倉庫を改造した大きな建物であった。敗戦直前には爆撃目標になる虞があるということから取り壊され、朝鮮人労働者は別の木造の建物に移転させられた。荷役作業は早朝六時ごろから夕方六時ごろまで続き、日本人の勤労働員された人々が米や石炭を貨車から積み降ろす仕事であったのに対し、朝鮮人労働者はより危険な船内作業に充てられた。

強制連行されてきた人の外にも、現新潟市域では白石基礎工事・中野組飯場で五九人（家族を含む）、豊島組飯場で約一〇人、大倉組飯場で三七人の朝鮮人が働いていた。

これらの朝鮮人の多くは過酷な労働と劣悪な生活環境を強いられていた。新潟市内で死亡した朝鮮人もいたと思われるが、その数は分からない。

朝鮮人はこうした労働力補充としての徴用以外に軍隊・軍属などにも動員された。朝鮮人の軍人・軍属関係者は全体で三六万人を超えていた。敗戦直前の新潟港で港湾荷役に従事した第三五野戦勤務隊も朝鮮人部隊であった（九ページ参照）。

抵抗する朝鮮人労働者

これらの朝鮮人労働者と事業所との間には、様々な紛争が起きた。二十（一九四五）年三月十七日に徴用で新潟鉄工所へ連れてこられ、北溟寮にいた朝鮮人労働者松本一峰は、同寮の朝鮮人に工場が衣服・食糧などの待遇面で朝鮮人を差別していることを教え、寮から逃亡するようにあおった。この結果、三月三十日に二四人が逃走した。松本は、朝鮮の独立を企てたとして治安維持法違反で逮捕され、検事局に送られたが、敗戦後の九月に執行猶予となり、強制連行されてきた朝鮮の人々とともに同月十三日に帰国することになった。また、日本通運新潟港支店でも逃亡した人がいた。

日本鋼管新潟製鋼所は、敗戦後は操業をやめ、朝鮮人労働者は公休扱いにしていた。ところが、八月二十六日になって本社から操業継続の指示が出た。第三報国寮にいた朝鮮人労働者九〇人はこれを拒否した。これに対して工場は就労しない朝鮮人の食糧を減配したため、朝鮮人労働者が工場事務所付近に集結して氣勢をあげた。この事件は、警察の説得で落ち着いた。

連行朝鮮人労働者の帰国

強制連行されてきた朝鮮人の帰国は、二十（一九四五）年九月から開始された。新潟市内の事業所にいた朝鮮人は、九月十二日から十七日にかけて新潟駅を出発し、新潟の地を離れた（表7）。これらの人たちの帰国は決して順調ではなかった。

新潟鉄工所入船工場の一六八人は、九月十二日・十三日に二隊に分かれて新潟駅を出発し、博多港（福岡市）から釜山へ渡ることになっていた。しかし、博多に到着してみると、新潟県からの帰国者の名は、博多港からの乗船予定者の名簿に載っていなかった。乗船を求め交渉したが不調に終わり、持参した食糧も乏しくなってきたため、他の地方の朝鮮人とともに暴動を起こしそうになった。この間に、四二人が自分たちで船を調達してヤミで帰国したと

いう。日本鋼管新潟製鋼所の朝鮮人労働者は、博多まで同行した会社の引率者の責任を追及した。栗原組は朝鮮人労働者をヤミの船で帰国させた。

二十年九月末から十月初めにかけては、山陽本線が不通になった。そのため、上越地区にいた朝鮮人労働者と東京方面で就労していた朝鮮人労働者が新潟港から帰国した。九月三十日には五八〇人が「間宮丸」で、十月二日には一六七四人が「白龍丸」で新潟港から朝鮮へ向かった。

新潟へ強制連行された中国人

政府は朝鮮人に続いて、十七（一九四二）年十一月に中国人を強制連行して日本国内の炭鉱・鉱山・土木現場・工場・港湾などで働かせることにした。さらに、十九年二月には強制連行を促進することを決めた。これ以後、政府機関や軍機関は中国各地から数多くの中国人を強制連行した。日本は中国と戦争していたので、連行される中国人はいったん中国各地の捕虜収容所に入れられ、その後日本へ送られた。

新潟市に連行された中国人の第一陣二〇七人は、十九年六月九日に中国の青島港を「プル^{チンタオ}ト号」で出発して、十四日には神戸港に上陸し、十七日に第一大隊として新潟に到着した。この第一大隊に続いて、第二大隊の第一陣一五〇人が十一月十七日に、第二陣一五〇人が十一月十九日に、さらに第三大隊二九四人が十二月二十日に、それぞれ下関港を経由して新潟に到着した。第三大隊は、予定していた三〇〇人のうち二人が乗船前に逃亡して、二九八人が乗船したが、船中で四人が死亡した。このようにして十九年中に新潟に到着した中国人労働者は全体で八〇一人であった。中国人は貨物船船倉の石炭・鉱石・塩などの上に乗せられ、食事もほとんど与えられず、医師も付き添っていなかったと言われる。

その後、二十年三月十五日に一人が新潟から清水市へ移送され、五月二十八日には第四大隊一〇〇人が東京港から配置換えになり、新潟に送り込まれた。また、六月十四日には七〇人が労働者が不足する直江津港（上越市）へ移されたが、このうち三人は直江津で死亡した（表8）。

第一大隊の中国人は「特別供出」で華北運輸（本社天津^{テンチン}、南満州鉄道の子会社）から送られた「中国人勤奉隊」と呼ばれた労働者で、ほとんどが山東省出身であった（表9）。それに対し、第二・三・四大隊の中国人は「訓練生」と呼ばれる華北労

隊	到着 人	死亡 人	転出 人	転入 人	拘引 人	送還 人	到着年月日
第1大隊	207	10	—	—	—	197	昭和19.6.17
第2大隊	300	65	—	—	1	234	昭和19.11.17,19
第3大隊	294	64	71	67	—	226	昭和19.12.20
第4大隊	100	13	—	—	—	87	昭和20.5.28
計	901	152	71	67	1	744	

表8 新潟華工管理事務所の中国人連行者の状況 第3大隊の直江津転出者70人のうち3人は直江津で死亡、残りの67人が昭和20年10月2日に新潟へ再転入 「死亡」にはこの3人は含まない 「新潟華工管理事務所華人労働者就労期末報告書」（東京華僑総会所蔵）から作成

隊	省	山東	河南	山西	河北	安徽	四川	陝西	その他	計
第1大隊	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人
第1大隊	186	1		1					1	189
第2大隊	37	206	4	5	16	14		8	10	300
第3大隊	256	12	1	18	1				6	294
第4大隊	6	15	51	18	1	2	6		1	100
計	485	234	56	42	18	16	14	18	883	

表9 新潟華工管理事務所の中国人連行者の出身地 第1大隊の18人の出身地が不明 「新潟華工管理事務所華人労働者就労期末報告書」（東京華僑総会所蔵）から作成

工協会経由の人たちであった。「訓練生」は「俘虜・投降・帰順兵が収容所で訓練を受けた者」とされていたが、実は労働力に充てる中国人を捕らえることを目的に実施した日本軍の作戦（参加した兵士は「^{うきぎ}鬼狩り」「^{うきぎ}劳工狩り」などと言っていた）で、俘虜扱いにした非戦闘員が多数を占めていた。彼らはどこへ送られるのかを知らされないまま下関港へ入港したという。その出身地は第二大隊はほぼ三分の二が^{ホーナン}河南省、第三大隊は六分の五が山東省と、同じ地域で捕らえられた人々がまとまって新潟へ送られてきていた。また、東京から配置換えで来た第四大隊は^{シャンシー}山西省出身が五割であった。このように多くの人は日本軍がいちはやく展開した華北の地域の人が多かったが、なかには^{カンスー}甘肅省や^{スーチョウ}四川省など奥地の出身の人もいた。

新潟華工管理事務所

新潟市に送られた中国人は、日本港運業会新潟華工管理事務所に管理され、新潟港運株式会社によって新潟港での港湾荷役に使役された。

港湾荷役関係の半官半民の統制組織である日本港運業会は、各港に華工管理事務所を設けた。この華工管理事務所が中国人を管理し、港湾荷役関係の会社へ供給した。華工管理事務所の役員には、日本港運業会に出資して中国人を使役する会社の職員が派遣されていた。中国人を使役した会社は、労務者の稼働時間に応じて労賃を華工管理事務所に支払った。華工管理事務所が中国人に衣食住を供給したが、どれくらい、どのように与えるかは、華工管理事務所長に任されていた。

職員を派遣して新潟華工管理事務所を事実上運営し、港で中国人を使役したのは、新潟港運であった。この会社は、十七（一九四二）年六月に日満倉庫・鍵富本店船舶部・小林力三商店・新潟海陸運送など新潟港の港湾荷役運送関係の会社が出資して設立されたが、翌十八年五月に事業を拡大した際に、株式の三分の二を取得した新潟臨港開発が子会社にした。

新潟華工管理事務所は国立倉庫の南（桃山町二丁目）にあった。新潟に連行されてきた中国人は、新潟華工管理事務所の宿舎に収容された。管理事務所の職員約二〇人が中国人労働者の生活全般を管理し、新潟港の作業場では新潟港運の労務関係職員、警備作業指導員など約三〇人が作業を指導・監督した。外に五人ぐらいの警察官が常時駐在していた。

連行中国人労働者の生活

新潟華工管理事務所の道路に面した入口には事務室・警備室などがあり、その奥に宿舎があった（図14）。中国人は原則的に



図14 新潟華工管理事務所の建物配置 戦後に同所が作成した図面「華人労務者就労願末書」（東京華僑総会所蔵）から作成

は自由な外出は許されなかった。宿舎は木造瓦葺き二階建ての建物であった。建物の中央に通路があり、その両側の床に藁^{わら}が敷かれて居住部分になっていた。昼は各大隊長と病人にだけ支給された。事務室・倉庫などを含めた建物の総床面積は二二〇〇平方メートルほどであったが、そのうち宿舎の面積は一六〇〇平方メートルほどであった。中国人労働者が増加するにつれて手狭になり、一人平均一・三畳程度の広さになった。

新潟港での労働は厳しかった。毎朝、点呼を受けた後、現場監督と守衛に引率されて作業場に向かった。作業場は臨港埠頭や中央埠頭で、主に船倉の石炭をスコップでもっこに入れる船内作業であった。労働時間は冬季間は九時間、夏季は一一時間、春秋は一〇時間となっていたが、徹夜作業をさせられることもあった。

中国人の多くは、衣服の代わりに南京袋^{なんきん}などを身に付け、荒縄をベルト代わりに締めていた。吹雪の日でも雨具や外套^{がいとう}はなく、素足であった。雨にぬれながら作業をして宿舎に帰っても着替えはなく、ぬれた衣類を火で乾燥させて着た。宿舎には数個のストーブしかなく、暖房用の石炭も不足した。彼らは抱き合って暖をとったという。

管理事務所は、食事として小麦粉に雑穀の粉を混ぜたものを支給していたが、十九（一九四四）年末からは小麦粉の入手が困難になったため、やむなく米食を与えた。その食事が冷えた握り飯であったため下痢の患者が続出した。副食も冬季間は漬物だけで、野菜不足のためビタミンが欠乏した人が多かった。加えて、二十年五月からは小麦粉に粗悪な雑穀粉を混ぜて支給したため、衰弱していた患者は次々と死亡し、強健な人も夜盲症・角膜潰瘍・胃腸疾患・栄養不良などに冒された。角膜潰瘍の原因は栄養不足と不潔であったという。

新潟華工管理事務所の中国人の死亡者数は、受け入れから敗戦までのわずか一年余の間に、直江津港派遣中の死亡三人を含めて一五五人に達した。戦後に新潟華工管理事務所が作成した報告書では、主な死因は肺炎五七人、栄養失調三〇人、角膜潰瘍一七人などとなっている。この一五五人の中には、二十年六月四日に触雷した「貴船丸」に、作業するために乗船していて即死した九人も含まれている（四〇ページ参照）。また、死亡に至らなくとも「不具廃疾」（失明を含む）になった人も三九人いると報告されている。死亡者は「劳工狩り」で連行されてきた第二大隊以降の人たちに多かった。これは、元来労働者であった第一大隊の人たちと比べて体格的に劣っていたためであるという。新潟華工管理事務所での死亡率は一七パーセント以上に上った。

中国人労働者をめぐる紛争

こうした過酷な状況に置かれていた中国人労働者の中には、中国人同士で争ったり、日本人に抵抗したりした人もいた。

十九（一九四四）年九月十四日には、中秋節を祝うために日本酒の特別配給を受けて宿舎で飲んだ際に、三人の労働者が一部の幹部労働者を木製枕^{まくら}や手桶^{おけ}などで殴って怪我をさせた。このため幹部労働者がこの三人を拘束するように警察に申請するという事件もあった。

第一大隊の労働者とそれ以後到着した人々とが対立することもあった。華工管理事務所

では入所順に傷病者を治療したり、診察したりしていた。このため第一大隊が先になり、第二大隊以降の人々が後回しになった。こうした華工管理事務所のやり方に不満をもった第二大隊以降の人々は、華工管理事務所の嘱託医の診療を忌避するという事件を起こした。これは二十年六月になって、新潟医科大学（現新潟大学医学部）から医師を招くことによってようやく収めることができた。中国人労働者同士の対立は、二十年四月にもあったが、大事に至らなかった。また、中国人に配るはずの酒、煙草などを日本人職員が取ったとして、中国人の間に不満が生じたこともあった。

二十年三月三日には、午前零時ごろ、中国人九人が宿舎を脱走し、石山地区中山の民家に侵入し、その家の人を縛り上げ、飯を食べた上に、現金・衣類・米・みそなどを奪った。地元の警察は直ちに署員を非常招集して警戒するとともに、地域の警防団員にも出勤を求めて脱走した中国人を捜索し、午後三時ころ全員を逮捕した。この事件を重視した東新潟警察署長は、新潟海運局華工管理派出所長・日本港運業会新潟華工管理事務所長とともに、町内会長・隣組長・校長あてに中国人労働者と接する際の注意事項を通達し、彼らの前で不体裁で見苦しい行為をしないこと、関係ない人は接触しないこと、物を与えたりもらったり売買したりしないこと、作業場や宿舎をのぞき見しないこと、彼らに関していい加減なうわさ話をしないこと、侮蔑的な態度をとったり同情心を持ったりしないこと、逃走を発見したら警察へ通報することなどを求めた。

中国人労働者の帰国

二十（一九四五）年八月十五日の時点で、新潟華工管理事務所が管理していた中国人労働者は七四四人であった。

日本の敗戦後、自由を得た中国人労働者のなかには、戦争中に受けた仕打ちに抗議して事件を起こす人もいた。九月二十三日には飛行場道路で日本人と言い争った中国人六〇人ほどが暴行事件を起こした。九月二十八日から十月六日までの間に、中国人労働者と同じく港で働いていた日本人の労働者六人が、中国人労働者一〇～一五人から襲撃を受けた。

しかし、日本人と中国人労働者は争っていたばかりではなかった。中国人労働者の食糧を確保するために努力したり、帰国に際して衣服を用意したりした日本人もいたし、そうした日本人に感謝を惜しまない中国人もいた。

十月九日、中国人労働者は、新潟港から「江ノ島丸」で故国へ向かい、十八日に^{タンク}塘沽港に到着した。

第二節 俘虜収容所

戦時俘虜

「戦時^{せんじ}俘虜」は、戦争の際、敵に捕らえられ自由を拘束された人のことである。単に「俘

虜」ともいうし、「捕虜」ともいう。俘虜は、国際的には犯罪人として扱われることなく、一定の待遇が保証されている。

太平洋戦争中、日本軍は連合国軍の兵士約三五万人を俘虜にしたが、そのうち敗戦時に日本内地の収容所には三万二四一八人が収容されていた。日本人と連合国側の人々との間では、戦争で俘虜になることについて、考え方に違いがあった。連合国の人々は勇敢に戦った結果なので不名誉なことではないと考えていたのに対して、日本人は俘虜になることを不名誉なことで、最大の屈辱であると教え込まれていた。こうした日本人の俘虜観が、捕えた俘虜に対する侮蔑的な態度や劣悪な待遇につながったことも否定できない。

政府は、国内の労働力不足を補うため、これらの俘虜たちに労働を命じ、工場・鉱山・輸送機関などで使役した。昭和十七（一九四二）年、陸軍省に新設された俘虜管理部が、俘虜関係業務の計画及び監督を担当することになった。同年中には内地では東京・大阪・函館・福岡に俘虜収容所が設置された。二十年には空襲が激しくなったため、仙台・名古屋・広島に収容所を開設した。

第五分所の開所

十七（一九四二）年十月二日、陸軍省俘虜管理部長は、新潟県知事に対して、不足する労働力を補うために、戦時俘虜を受け入れる企業があるかということを知会した。条件は、県当局や公的機関、受け入れ側の企業が、三〇〇人以上の俘虜を収容する施設を整備して軍に提供することなどであった。

十八年五月二十三日、新潟海陸運送は、日本通運・新潟鉄工所と共同で俘虜収容所を建設することにして、俘虜三〇〇人の配当を陸軍大臣に申請した。これに対して陸軍大臣は新潟海陸運送に、七月二十八日一三〇人、さらに八月二十七日一七〇人の配当を通知した。この俘虜収容所は、東京俘虜収容所第五分所として置かれることになり、十八年八月十日に陸軍中尉吉田正人が初代所長に任命され、二十日に開所した（表10・11）。

十八年八月十五日、一一八五トンの貨物船「萬陵丸」がカナダ人・オランダ人などの俘虜を乗せて香港を出港した。彼らは香港の九龍にあったシャム＝シュイ＝ボ収容



図15 新潟市内の俘虜収容所の位置の推移
①～⑤は表10の番号 昭和29年発行5万分1地形図

年月日	東京俘虜収容所第5分所	東京俘虜収容所第15分所
昭和18.8.20	新潟海陸運送社員寮①	
昭和18.12.24	河渡の収容所（新築）②	
昭和19.1.1	（1棟倒壊）	
昭和19.1.18	新潟海陸運送朝鮮人宿舍③	新潟鉄工所大山寮④
昭和19.4.1	河渡の収容所（補修）②	（第15派遣所開設）
昭和19.9.5		新潟鉄工所桃山寮⑤
昭和20.8.1		（第4派遣所と改称）
昭和20.8.10		（第15分所と改称）
昭和20.9.20	閉鎖	閉鎖

表10 新潟市内の俘虜収容所の位置の推移 ○の数字は図15に示した位置 「GHQ/SCAP Records of Judge Advocate Section」（国立国会図書館蔵）から作成

所に収容されていたが、日本へ移送されることになったのである。船は台湾の基隆^{キールン}に寄港した後、九月初めに大阪港に入港し、五〇一人が上陸した。そこでカナダ人の一部は別の収容所へ向かい、残りの三〇〇人が列車で新潟へ向かった。国籍別ではイギリス一人、カナダ二七六人、オランダ二三人であった。九月二日に新潟に到着すると、彼らはトラックに乘せられて旧新潟農園の入り口付近（桃山町一丁目）にあった新潟海陸運送の社員寮に仮に収容された。

俘虜の労働現場

俘虜たちは三つの作業隊に分けられた。新潟海陸運送の臨港貯炭場に一二〇人、日本通運のドックに五〇人、新潟鉄工所に一二〇人が派遣された。

臨港貯炭場に派遣された俘虜は、九月六日から作業に従事させられた。^{はしけ} 舩に石炭を積み降ろしたり、高架運炭軌道で重さ一・五トンの石炭の入ったトロッコを押し、下に待機する貨車に積み入れたりする仕事であった。日本通運のドックでは、船から五〇〇～一〇〇〇キログラムもある爆弾を降ろして、平台貨車や自動車に積み込んだり、重さが五五キログラム以上もある大豆袋を積み降ろしたりした。体の具合の悪い俘虜はこの袋の重みに耐えられず、倒れてしまうこともあった。

新潟鉄工所の作業隊は、製鋼工場などで働いた。工場へ石炭やくず鉄、その外の材料を運び入れたり、電気炉を扱ったり、鋳型の土をかき混ぜたりする作業であった。中にはディーゼルエンジンの部品や弾丸ケースを製造したりした人もいた（表12）。

怪我をする俘虜も多かった。高い運炭軌道の上での作業を強いられた臨港埠頭では事故が多発した。初め運炭軌道の上で長靴を履くことは許されず、代わりに草履が支給されたが、小さ過ぎて足裏の保護には役立たなかった。やむなく素足で作業したが、切り傷が出来たり、打ち身になったり、水泡ができたりして俘虜たちを苦しめた。結局、長靴履きが許可されることになる。足の怪我だけでなく、運炭軌道から石炭や貨車の上へ転落して負傷する俘虜もいた。十九（一九四四）年五月二十二日には、東京俘虜収容所から新潟海陸運送の管理者にあ

所名	代	階級	氏名	在任期間
東京俘虜収容所	第5分所	初代	中尉 吉田 正人	昭和18.8.10～19.4.1
		2代	少尉 根本 藤雄	昭和19.4.1～19.7.15
		3代	中尉 竹内 寛	昭和19.7.15～19.8.28
		4代	中尉 加藤哲太郎	昭和19.8.28～20.8.20
		5代	中尉 江守 秀敏	昭和20.8.20～20.9.20
	第15分所	初代	少尉 根本 藤雄	昭和19.4.1～19.7.27
		2代	少尉 中村 友喜	昭和19.7.27～20.2.25
		3代	大尉 野本 武夫	昭和20.2.25～20.9.20

表11 新潟市内の俘虜収容所長 第15分所は当初は「第15派遣所」、後に「第4派遣所」を経て、第15分所になる 根本は第5分所長と第15派遣所長を兼任 「GHQ/SCAP Records of Judge Advocate Section」（国立国会図書館所蔵）から作成

工場・作業		人数
鍛練工場	水圧機械操業	10～15
	蒸気槌作業	60～65
	石炭鋼材運搬作業	10～15
	小計	80～95
鋳造工場	鋳鉄溶解作業	20～25
	鋳造品ハツリ仕上作業	20～25
	鋳型製作作業	25～30
	鋳物砂調合作業	5～10
軽作業	コークス鋳鉄運搬作業	5～10
	小計	75～90
製鋼工場	電気炉操業	30～35
	鋳造品ハツリ仕上作業	10～15
	材料運搬作業	10～15
	小計	50～65
一般資材及び製品運搬	鉋金鋳物仕上作業	10～15
	釘針金曲直作業	10～15
	小計	20～30
	一般資材及び製品運搬	10～20
食料品買入運搬・炊事・掃除・被服補修・農耕作業等		30～35

表12 新潟鉄工所新潟製作所製鋼工場の俘虜の労務配置 資料の小計人数が合わない部分があるが、そのまま記載した 「GHQ/SCAP Legal Section 昭和21年1月17日 新潟鉄工所新潟製作所製鋼工場長提出『俘虜労務ニ関スル資料』」（国立国会図書館所蔵）から作成

てて、俘虜の傷害防止に関する通知が出された。負傷者が多発するのは管理がよくないためであるとして、管理関係者の自覚を促すとともに、直ちに事故の根絶を図るように指示した通知であった。また、日本通運で働く俘虜には、セメントの荷揚げの際に舞い立つほこりのために眼を痛めて苦しむ者が多かった。

俘虜たちの労働時間は実働約九時間であった。しかし、収容所が河渡（小金町）に完成して移転してからは作業現場まで遠くなった。そのため、宿舍と作業現場の間を往復するのに時間がかかり、昼食時間を加えると一日に一一時間ほど収容所を離れていることになった。賃金は規定どおり支払われていた。俘虜のうち将校は労働の義務はなかったが、日本側からは作業管理要員として、「自由意思」で作業に参加するよう指示されていた。

劣悪な生活環境

俘虜が最初に収容された旧新潟農園入り口付近の新潟海陸運送社員寮は、湿気がある上に、体を温めるためのストーブもなかったため、俘虜たちは寒さに悩まされた。給水設備は戸外のポンプ井戸一台だけであった。便所は戸外にあって、人数に比べて不足していた。建物には大きい部屋が一〇室あって、それぞれが襖^{ふすま}で仕切られ、部屋の片側を狭い廊下が貫き、別に炊事小屋が付いていた。一部屋には三〇～四〇人が詰め込まれ、一人当たりの面積は畳一枚程度であった。

この手狭な宿舍へ、十八（一九四三）年十月になるとアメリカ人などの俘虜約三五〇人が入ってきた。そのため総勢六五〇人となり、宿舍はすし詰め状態になった。この俘虜は十七年五月六日にフィリピンのコレヒドールで俘虜になり、カバナツアン収容所に入れられていた人たちであった。十八年九月十八日にフィリピンのマニラ港を四二九一総トンの「黄浦丸」で出港し、十月五日に八八三人が門司港に入港した。ここで俘虜は、東京と大阪の俘虜収容所に分けられた。東京俘虜収容所の俘虜の大部分は門司から鉄道で新潟に運ばれ、七日に第五分所に収容されたのである。

食糧も粗末であった。規則では、基本的な食糧として、労働する俘虜は一日一人当たり米・大麦・コウリャン・大豆などを七〇五グラム、収容所要員や内部労働の俘虜はその八五パーセント、士官は五五パーセントが支給され、加えて野菜・食肉・魚・調味料などが支給されることになっていた。しかし、実際には十九年四月一日まではこの基準を下回っていた。また、食文化の違いもあって、支給された食品のうち、ジャガイモ・ニンジンの葉の部分や海藻、煮たイナゴなどは、俘虜には食糧とは思えなかった。俘虜のために給付されたはずの砂糖・食肉・調理用油・鶏や、収容所の農場の収穫物などが、日本人の手に渡ってしまうこともあった。しかも、俘虜たちは十分な時間をかけて朝食をとることもできず、また昼食用の弁当箱を洗う時間もままならなかったため、汚れたままの弁当箱に入れた昼食が食事時には酸っぱくなってしまいうこともあった。赤痢がはやったのもこうしたことが一因と思われた。

カナダ人は、時計・指輪・ナイフ・手帳など、個人的な財産を新潟に到着するとすぐに没

収された。アメリカ人は日本本土へ到着する前に没収された。

カナダ人は各自の衣服の一部を所持することが許された。多くは綿の着替えを二着持ち、イギリス製の毛織の戦闘服も所持していた。しかし、フィリピンから移送されて来たアメリカ人は、作業服は支給されたが、毛織物は持っていなかった。そこで、十一月中旬には屋外労働に従事する俘虜たちにイギリス製のオーバーが配布された。また、クリスマスのころには日本の沈没船から引き上げたオーバーが配られた。その結果、ようやく俘虜全員が何らかの形でオーバーを持つことができた。

俘虜たちに日本兵の使い古したレインコートが若干配られたこともあった。しかし、小さ過ぎて使い物にならなかった。臨港貯炭場では会社側がごく少数ではあるが^{みの}蓑を与えた。レインコートよりはましであったが、雨や雪の中では一時間も作業をすれば使えなくなった。また、冬になっても屋外でぬれた衣服を乾燥させる設備は収容所にはなかった。衣服を乾燥させる唯一の方法はそれを着たまま眠ることで、毎日午後八時の点呼に寝床から起き出すと、なおさら冷えたという。カナダ人俘虜の履物は傷んでいて足の保護には役立たなかった。中には、靴のない者さえいた。収容所に着いた最初の冬には、多くのカナダ人俘虜は裸足か新潟海陸運送から支給された草履を履いて臨港埠頭まで通った。

こうした悪条件の下で最初の冬に約八〇人の俘虜が死亡した（二九ページ表 14 参照）。

第五分所の移転と宿舍倒壊

十八（一九四三）年十二月二十四日、クリスマスイブの日に、俘虜たちは旧新潟農園入口付近の仮の収容所を出て、河渡に新たに建てられた収容所へ移された。この収容所は俘虜を使役する三社が建設費を出し合って建てた。実際にはまだ建築途中で、天井板はなく窓にもドアにもガラスが入ってなくて、窓には臨時に板が張ってあるというありさまであった。十九年元旦の未明、そのうちの一棟が倒壊した。非常に粗悪な造作で、柱が細く、^{はり}梁に腐った木材を使っていた上に、屋根に重いコンクリートタイルを葺いたのが原因であった。かすがいもなく、釘もほとんど使われていなかった。この事故でカナダ人俘虜八人が死亡した。負傷者も十数人出た。

収容所は事故の翌日、応急の処置として、俘虜を使って建物の外部からかすがいを入れた。この事故から一〇日ほどたって、東京俘虜収容所の所長が来訪し、俘虜の待遇を改善し、宿舍を補強することを約束した。宿舍は補強されたが、待遇はよくならなかった。

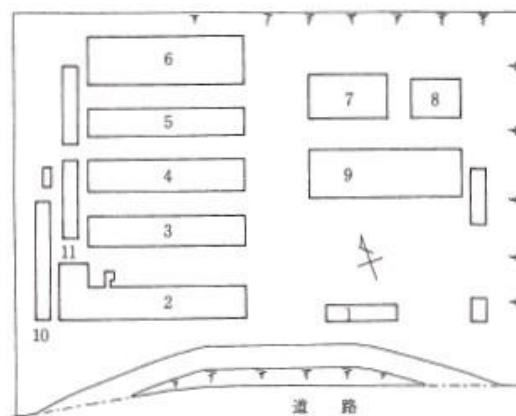


図16 東京俘虜収容所第5分所の建物配置 1；衛兵所・営倉等 2；所長室・下士官室・衛兵宿舍等 3～5, 7～9；俘虜宿舍 6；食堂・炊事場 10；病室 11；医務室 「GHQ/SCAP LS」(国立国会図書館所蔵)・関係者証言から作成

第一五分所

収容所を修理するため、十九（一九四四）年一月十八日ころ、俘虜たちは二手に分けられ別の建物に移された。新潟海陸運送と日本通運で働いていた俘虜は、最初の収容施設の近くにあった、新潟海陸運送が朝鮮人を収容していた建物、新潟鉄工所で労働していた俘虜は、新潟鉄工所車両工場



図17 東京俘虜収容所第15分所の建物 「GHQ/SCAP JAS」(国立国会図書館所蔵)から

の一面にあった大山寮であった。四月一日、新潟海陸運送の朝鮮人収容施設に入っていた俘虜は、修理の終わった河渡の収容所に戻ったが、新潟鉄工所大山寮の俘虜二一九人はそのまま残った。ここが東京俘虜収容所第一五派遣所となった。

十九年九月五日、第一五派遣所は新潟鉄工所の桃山寮（桃山町一丁目）に移った。桃山寮は二階建ての細長い建物で、各階とも中央部に通路があり、両側は六区画に区切られていた。十九年十一月には新たな俘虜の受け入れに備えて一棟が増築された。冬にはストーブも置かれ、前年の冬と比べて過ごしやすかった。そのため大雪の厳しい冬であったが、第一五派遣所の死亡者は一人にとどまった。

この第一五派遣所は二十年八月一日から第四派遣所と改称し、さらに敗戦直前の八月十日には第一五分所に昇格した。

不十分な医療

十八（一九四三）年十月十八日、東京俘虜収容所は、「戦時俘虜側の収容所長」として、アメリカ陸軍野戦砲兵部隊少佐フランシス・E・フェローズを新潟の第五分所へ送り込んだ。彼が第五分所に入ったときには、俘虜の中に医療要員はいなかった。そこで、彼はアメリカ海軍の一等薬剤兵曹と衛生兵三人を医療スタッフにした。しかし、収容所手持ちの医薬品はなく、たとえば脚気患者には湯を与えるのが唯一の「治療」というありさまであった。フェローズは収容所の一隅を割いて病室にした。フェローズに言わせれば、彼が最初に目にした医療は、「祈祷師」が肺炎患者の胸に「草」を置いて「燃やす」といったものであった。

十八年十一月、イギリス陸軍医療部隊少佐ウィリアム・M・スチュアートが軍医として東京俘虜収容所第一分所（川崎）から第五分所へ移されてからは、アスピリン・下痢止め・包帯・外傷治療用品などが、徐々に配備されるようになった。

しかし、収容所内の衛生・医療環境はひどい状態が続いていた。携帯便器や洗面器もなかった。寝たきりの患者はブリキや木製の箱を便器代わりに使わせられた。肺炎患者が多発したのは、雨天でもレインコートやオーバーなしで働かされ、宿舎に帰っても着替えがなかったからであった。井戸と便所は近く、一五メートルとは離れていなかった。その井戸水を飲んだことも病人が続出した原因の一つと思われた。また、当初、収容所には洗濯をしたり、入浴をしたりする設備がなかった。

スチュアート軍医が第五分所に到着したころには、約一五〇人の俘虜が病気のため作業

を免除されており、毎夕食後に二〇〇人前後の俘虜が診療を受けた。当時、収容所には日本人の医師は常駐しておらず、衛生下士官が代行していた。

十八年十二月の中ごろ、東京俘虜収容所本所から日本の軍医が派遣されてきた。第五分所で病人が多発

し、肺炎の死者が多いことと、労働に就けない俘虜が余りにも多く、就労率が低いことを調査するためであった。この軍医の調査の際には約六五〇人の収容者のうち約二四〇人が病人であった。この軍医は病人たちを診察して、頻脈症という心臓疾患の俘虜を労働可能と判定するなど、約一五〇人を病人ではないと診断し、残った病人は九〇人になった。彼はできるだけ多くの俘虜を労働に駆り出そうとしたのである。

しかし、この軍医は帰京後、東京俘虜収容所長に第五分所での食事の増量、収容施設の移転を上申した。また、新潟の俘虜の三分の一が病気にかかっている、外の収容所に比べて率が高いとして、俘虜全員に休息を与え、これ以上就労率にこだわらないほうがいいと上申した。その結果、十九年の一月には、一部の俘虜はそれまでの月二日の休日が、四日に増加し、その後、全員が月四日の休日になった。しかし、食事の増量は認められなかった。食事は東京俘虜収容所長の命令で八月に減らされていた。そのため、俘虜の体重は一か月で平均八キログラムも減っていた。日本人職員以上の量を俘虜に提供する必要はなく、米を食べさせずオートミール（燕麦のかゆ）やジャガイモなどの代用食で事足りるとしたからである。

医療環境の改善

十八（一九四三）年十二月のクリスマスイブに、第五分所は新築の建物へ移転したが、そこにも病室や風呂はなく、井戸は一本あるだけであった。十九年元旦の倒壊後に移った新潟海陸運送の朝鮮人収容施設では、湿気から解放され、ストーブを使って湯を沸かし、包帯を消毒したり傷口を洗浄したりすることができるようになった。十九年四月一日に修理が済んだ河渡の第五分所の建物に戻ると、風呂も台所もあった。こうして、施設や設備が少しずつ改善され、その年のクリスマスころにはかなり設備の整った病室と薬局が設けられていた。顕微鏡、尿分析や血液検査用の試薬、その他の医療器具も次第に整えられた。軍医のスケジュールは顕微鏡を使って多数のアメーバ赤痢保菌者を発見し、新潟医科大学から検査のため派遣されてきた教授と医学生がそれを確認した。医科大学の教授は検疫と集団治療、

種別	新潟海陸運送		新潟鉄工所		日本通運	
	10月	11月	10月	11月	10月	11月
就労日数	31	30	29	27	31	29
就労すべき延人数	7,531	8,883	5,993	6,402	2,497	2,726
就労延人数	4,538	5,148	4,735	4,195	1,827	1,806
就労率（％）	60.3	58.0	79.0	65.5	73.2	66.3

表13 昭和18年10・11月の東京俘虜収容所第5分所俘虜の就労状況 11月の「就労すべき延人数」の増加は10月中の俘虜の新規収容による「GHQ/SCAP Records of Judge Advocate Section」（国立国会図書館所蔵）から作成

時期	死因				計
	赤痢	肺炎	脚気	その他・不明	
昭和18.9～12	12	23	5	1	41
昭和19.1～4	21	3	5	22	51
昭和19.5～8	3		1		4
昭和19.9～12					
昭和20.1～4			1	1	2
昭和20.5～9				7	7
計	36	26	12	31	105

表14 東京俘虜収容所第5・第15分所俘虜の時期別・死因別死者数 「GHQ/SCAP Records of Judge Advocate Section」（国立国会図書館所蔵）から作成

衛生設備の改善を勧めた。

また、収容所に雪囲い玄関が設けられたり、便所への通路に覆いを取り付けられたり、俘虜が手作りしたストーブが置かれたりして居住環境の改善が進められた。そのため、第五分所の二度目の冬の死亡者は一人だけで、第一五派遣所と合わせても二人であった。最初の冬に多くの俘虜が死亡したのは余りにも対照的であった。

俘虜への制裁

俘虜たちが出したり受け取ったりする手紙は、収容所の通訳の検閲を受けた。通訳は俘虜あての郵便物が到着しても、二か月もの間、手元に止めておくようなことがあって、俘虜はいらだった。収容所の職員が俘虜が母国へあてた郵便物の差し出しに干渉したり、俘虜が便箋^{びんせん}を求めてもすぐには渡そうとしなかったりしたこともあった。

アメリカ軍の空襲にも、俘虜たちは危険な場所から退避させられず、遮るものがない所に放置されていた。二十（一九四五）年八月十日にアメリカ軍艦載機が新潟港内の船を攻撃した際には、日本通運の港湾現場では、日本人看守は防空壕に避難したが、俘虜は倉庫に閉じ込められたままであった。新潟鉄工所では昼食時であったが、日本人は食堂から姿を消したにもかかわらず、俘虜たちは食堂に残されたままであった。また、臨港貯炭場では俘虜が作業していたが、日本人職員は俘虜を放置して防空壕に逃げ込んだ。

収容所では何よりも俘虜を労働に駆り立てることが重視された。収容所の成績は俘虜の何パーセントが作業に従事したかで判定された。収容所側は手段を選ばず就労率を高めることに躍起となり、病人であっても病人とはみなさずに作業現場へ駆り立てた。東京から来た軍医に頻脈症にもかかわらず働くようにいわれ、新潟鉄工所で働いていた俘虜は、病院に移されたときには手遅れになっていた。また、下痢に苦しんでいたのに作業を強制されて死んだ俘虜もいた。

十八年十二月、国際赤十字から送られてきた食糧の一部を盗んだとして、二人のカナダ人俘虜が、雨の降る戸外の柱に縛り付けられた。翌年一月にも缶詰を盗んだとしてカナダ人俘虜一人とアメリカ人俘虜一人が雪深い戸外で一週間以上も柱に縛りつけられた。カナダ人はわずかな食事が与えられただけであった。カナダ人は凍傷にかかり、病院に収容されたときには意識不明であった。手足は黒ずみ指は腐れ落ちていた。いったん意識を取り戻したが、「俺は盗んでいない」とうめきながら死んでいった。アメリカ人は病院に収容される途上で死亡した。

第四代収容所長加藤哲太郎の在任

国名	第5分所		第15分所		計		死亡率
	収容	死亡	収容	死亡	収容	死亡	
アメリカ	550	24	163	3	713	27	3.8
イギリス	33	0	43	2	76	2	2.6
カナダ	182	60	93	14	275	74	26.9
オランダ	20	2	10	0	30	2	6.7
ノルウェー	3	0	0	0	3	0	0
オーストラリア	1	0	21	0	22	0	0
ニュージーランド	0	0	3	0	3	0	0
計	789	86	333	19	1,122	105	9.4

表15 東京俘虜収容所第5・第15分所俘虜の国別収容者・死亡者数
本表は収容者の名簿に基づいて作成したため、本表から計算される生存者数と本文の連合国軍への俘虜引き渡し時点の人数とは異なる 「GHQ/SCAP Records of Judge Advocate Section」(国立国会図書館蔵)から作成

中の二十年七月、一人のアメリカ人俘虜が処刑された。加藤は収容所の生活環境の整備に配慮し、建物を修理する資材を提供したり、かまどを設ける材料を用意したりした。しかし、彼は生来の激しやすい気質から状況判断や俘虜の処遇を誤ることもあった。その俘虜は精神錯乱の状態にあって、外の俘虜たちは他の収容所か、病院へ送ることを要望していたが、加藤は収容所に置いて医師に診させていた。その俘虜は七月初め自転車を盗んで脱走して逮捕され、所内の営倉に監禁された。その際、再び脱走すれば日本陸軍の規則により処刑すると警告された。一週間後、その俘虜は営倉から脱走した。彼は捕らえられ、警告どおり処刑すると告げられた後、銃剣で処刑された。彼は収容所から少し離れた川を横断しようとして心臓麻痺^{まひ}を起こして死亡したことにされたという。

二十年七月中旬、俘虜がグリコール中毒で死亡する事件が起きた。グリコールは、本来、飛行機の不凍溶液として使用するもので、飲用すれば中毒症状を起こし、ときには死亡したり失明したりするものであった。日本通運の監督下で新潟港で荷揚げ作業をしていた俘虜たちが、埠頭の倉庫からグリコールを持ち出して飲んだ。深夜に俘虜十数人が苦しみ出した。収容所内の病室で俘虜の軍医スチュアートが手当てをし、新潟医科大学の医師が収容所へ急行して処置したが四人が死亡した。

厳しく閉ざされた生活の中で、俘虜同士でも様々な仲たがいが起きたり、制裁があつたりした。「戦時俘虜側の収容所長」フェローズは、時に理不尽なことを俘虜たちに命じ、自分の命令を守らない者に制裁を加えることがあった。カナダ人の大柄で強健な軍曹は、外の俘虜を怒鳴りつけたり、脅したり、平手打ちしたりした。

俘虜の帰国

二十（一九四五）年六月五日、第一五派遣所にアメリカ人・イギリス人・オーストラリア人の俘虜八七人が新たに収容された。翌日には第五分所に川崎の収容所から九九人、大森の収容所から一六人、横浜の収容所から八一人の、合わせて一九六人の俘虜が移送されてきた。さらに七月三日には第五分所に上海からアメリカの民間人俘虜一五〇人が移送されてきた。

敗戦の翌日、八月十六日から俘虜の作業は一斉に中止され、収容所内での行動は自由になった。この段階では、俘虜は戦争が終わったことを知らされていなかったもので、所内の秩序は維持されていた。

二十七日正午、アメリカ軍艦載機が第五分所構内に五〇キログラムの包みを一〇個投下した。翌二十八日午後三時ごろにも、B24 型機がドラム缶と包み一〇個を投下した。この日は、外に新潟連隊区司令部（医学町通二番町）付近、新潟医科大学グラウンド（学校町通二番町）、その付近の民家、さらには坂井輪地区の畑などにも落ちた。投下された物資は、パイナップル缶・バター・菓子類・せっけん・靴下・煙草・歯磨き粉・歯ブラシ・編み上げ靴などの日用品であった。英文の艦隊ニュースなどの印刷物も収められていた。

俘虜はこの印刷物を読んで日本の無条件降伏を知り、収容所の職員に対する態度を一変させた。所内は無秩序状態になり、俘虜は高圧的な態度をとるようになった。二十八日以降

は、憲兵を配属して警備を強化したが収まらなかった。ひそかに収容所を抜け出して遊びに出る俘虜もいた。また、九月二日には衣服・靴・チョコレート・せっけん類を持って民家を訪れ、酒類との交換を強要する俘虜もいた。こうした事態に新潟警察署・東新潟警察署・新潟市は、女性が夜間外出したり、俘虜と接触したりすることを禁止すること、戸締りを励行すること、俘虜の接待や俘虜との物品の交換や供与をしないこと、俘虜に追従して自らの品位を傷つけることのないようにすることなどを市民に伝え、指導した。

これより先、八月十六日に陸軍省俘虜管理部長から「俘虜ノ取扱及輸送等ニ関スル件」が発せられ、俘虜はとりあえず現在地で保護し、近い将来新潟など一四の港湾から船舶輸送するので、乗船地までの鉄道輸送・宿泊・衣食などを準備しておくようにという指示があった。しかし、その後、新潟港はこの指定から除かれ、俘虜が新潟港から帰国することはなかった。

九月五・六の両日、戦時俘虜が連合国に引き渡された。第五分所の俘虜はアメリカ人五二人、イギリス人三四人、オランダ人一八人、カナダ人一〇九人、オーストラリア人一人、ノルウェー人三人、計六八八人、第一五分所の俘虜はアメリカ人一六〇人、イギリス人四一人、オランダ人九人、カナダ人八二人、オーストラリア人二五人（ニュージーランド人三人を含むと思われる）、計三一七人、両分所合計一〇〇五人であった。この俘虜たちは横浜駅でアメリカ合衆国海軍大尉ゴーヤットに引き渡され、それぞれ帰国の途に着いた。新潟の二つの俘虜収容所は九月二十日に閉鎖された。

俘虜の中には、帰国に先立って、世話になった新潟海陸運送の作業監督の家へ土産を持って訪れた人もいたという。

横浜裁判

「ポツダム宣言」に基づいて戦争犯罪人の逮捕、裁判が行われた。戦前、戦中の戦争指導者はA級戦犯として極東国際軍事裁判（東京裁判）にかけられた。俘虜や占領地住民に対する残虐行為など通常の戦争犯罪で訴追された者はB・C級戦犯として裁判にかけられた。B・C級裁判は、アメリカ、イギリスなど七か国がアジア各地の四九か所に設けた法廷で、二十（一九四五）年十月から二十六年四月までの間に実施された。新潟の二つの俘虜収容所の関係者は横浜の法廷で裁かれた。横浜での裁判は「横浜裁判」と呼ばれた。

新潟からの被告は第五分所関係者七人、新潟海陸運送関係者一三人、新潟鉄工所関係者三八人の合計五八人であった。第五分所関係者のうち一人は加藤哲太郎所長で、俘虜刺殺を問われた。新潟海陸運送の被告は第五分所の設備不完全のため多数の死亡者を出した上に、食糧や被服の支給を怠り、作業上の監督が不十分で、殴打などの虐待行為があった責任を問われた。新潟鉄工所関係の被告は、病気で衰弱状態にある俘虜を殴ったり、危険な労働に従事させて死亡させたり、生涯にわたって治癒しない傷害を負わせたりしたという容疑であった。

判決では、加藤が絞首刑を宣告され、その外多くの人々が有罪となったが、無罪となった人も二二人いた。加藤は、GHQ最高司令官マッカーサーの命令で再審理となり、再審判決で

終身刑に減刑され、即日、GHQ第八軍司令官の書類審査で禁固三〇年に減刑された。この外の多くの被告も減刑された。

第三章 触雷



●投下される機雷 【The Army Air Forces in World War II】Vol.5から

第一節 B29 の本土攻撃と「飢餓作戦」

B29 の日本本土攻撃

昭和十七（一九四二）年四月十八日、阿賀野川沿いに新潟付近に出現したアメリカ軍の飛行機が、北に向かって日本海へ抜けていった。太平洋上の空母「ホーネット」を発進して、初めて東京を空襲したB25のうちの機である。アメリカ軍が開戦当初の敗北から立ち直り、戦意を高揚するために不意打ちしたのであった。このB25は、途中新津市の郊外、羽越線阿賀野川鉄橋付近に投弾した。これが新潟県内への最初の空襲であった。

十九年十一月ころから、日本本土はアメリカ軍のB29による空襲を頻繁に受けるようになった。B29はアメリカの航空機会社ボーイング社が開発した、大型長距離爆撃機である。全長が三〇メートル、翼の長さは四三メートルあり、二二〇〇馬力エンジン四基を備え、実用上昇限度は一万一六〇〇メートル、高度一万メートルにおける最大時速は五八八キロメートルであった。四トンの爆弾を積んで五六〇〇キロメートル飛び続けることができた。十九年に実用生産が軌道に乗ったばかりの、この新鋭機が日本空襲に投入されたのである。

アメリカ軍は、B29の空襲によって日本の軍事・工業・経済の組織を混乱させ、日本国民の戦意を低下させようとした。当初は、昼間に高高度から目標を目視して精密に爆撃をする方法を採用した。しかし、この方法では爆撃の成果が上がらないため、夜間に低空から都市に多量の焼夷弾を無差別に投下して焼き払う戦術を採用した。このため東京をはじめ日本の都市の多くは次々と焦土と化していった。

「飢餓作戦」

アメリカ軍は都市部市街地への爆撃と並行して、港湾地帯に機雷を投下した。機雷は、鋼板でできた缶に爆薬を入れて起爆装置を付けておき、これを水中に投下しておいて、船が近づいたり接触したりすると爆発する仕組みの兵器である。アメリカ軍は機雷を敷設して、港を封鎖しようとしたのである。この機雷の多くは、艦船が近づくと磁気・音響・水圧などに感応して爆発するものであった。新潟港に投下された機雷は、船の磁気を感じ取って爆発する磁気機雷が六三パーセントを占めていた（三八ページ表17）。

アメリカ軍が日本本土の港湾・航路に最初に機雷を投下したのは、二十（一九四五）年三月、関門海峡



図18 日本領海に機雷を投下するB29 【Mines against Japan】から

である。この機雷を敷設する作戦をアメリカ軍は「飢餓作戦」と呼んだ。この作戦の目的は、日本軍の補給と移動を阻止すること、日本への原材料と食糧の輸入を阻止すること、日本本土沿岸の海上輸送網を寸断することであった。この作戦はアメリカ海軍が準備した計画書に基づいて、マリアナ諸島テニアン基地の陸軍航空軍が実施したが、最新の機雷技術を結集した、それまで例がない大規模で徹底した作戦であった。三月から敗戦までの五か月間に、日本近海に一万二〇〇〇個の機雷が投下された。機雷が敷設されて危険な海域になった日本沿岸の航路は船舶が航行できなくなり、主な港も出入が難しくなった。国内の海上交通は閉ざされ、海外からの食糧や工業原料の補給が断たれた。

アメリカ軍は、「飢餓作戦」を五期に分けて実行した。二十年三月二十七日の作戦開始から五月二日までの第一期には、沖縄進攻を支援するために、呉・佐世保の海軍軍港や広島

の陸軍輸送港、さらに関門海峡に機雷を投下して艦船の通航を妨害した。五月三日から十二日までの第二期には、関門海峡に加えて、東京・名古屋・大阪・神戸の主要港と瀬戸内海に機雷を投下して、日本の主要地域間の海上交通を遮断した。従来関門海峡を通過して瀬戸内海に入っていた大陸からの船舶は、日本海側の港か九州の港に回航せざるを得なくなった。五月十三日から六月六日までの第三期には、第二期作戦の延長として、日本海側の港や九州の港を封鎖した。新潟港への機雷投下もこの時期から

始めた。六月七日から七月八日までの第四期には、本州・九州への攻撃を強め、関門海峡の封鎖を続け、神戸・大阪港一带に繰り返し機雷を投下した。関門海峡や重要な港湾を完全に封鎖した。七月九日から敗戦までの間の第五期には、加えて朝鮮沿岸にも機雷を投下した。

こうしたアメリカ軍の機雷敷設によって、黄海や日本海から瀬戸内海へ通過していた関門海峡の通航量は、第一期の作戦実施後は機雷投下前の二五パーセントまでに減り、第二期の作戦実施後は五〜一〇パーセントに減った。代わって日本海側の港への航路の通航量が増えたが、これも第三期の作戦以降は減少し、最終的には日本沿岸はほとんど航行できなくなった。また、敗戦までに全国で七七万トンの船がこの機雷のために沈没した。

新潟港への機雷投下

アメリカ軍は新潟を本州北部日本海側の第一級の機雷攻撃目標に定めていた。

新潟県の上空にB29が初めて姿を見せたのは、二十

月日	県内遡空時刻	機数	内容(投下機雷数)
4.13	9:35~10:05	1	通過
4.22	朝	1	航空写真撮影
5.14	0:20~1:15	4	機雷投下 (43)
5.25	0:30~2:30	4	機雷投下 (63)
5.25	8:00~不明	1	航空写真撮影
5.27	0:30~1:40	約10	機雷投下
6.14	0:40~1:30	12	機雷投下 (144)
6.14	1:45~不明	1	通過
6.20	0:10~3:00	8	機雷投下 (96)
6.24	0:10~1:25	9	機雷投下 (108)
6.28	0:30~1:37	7	機雷投下 (84)
7.3	1:05~不明	2	通過
7.4	1:43~2:10	1	通過
7.10	0:20~1:17	9	機雷投下 (87)
7.16	0:07~不明	2	機雷投下 (59)
7.17	10:30~11:30	▲約10	銃爆撃
7.20	0:45~不明	5	機雷投下 (45)
7.24	10:35~11:25	1	通過
7.28	0:00~不明	6	機雷投下 (52)
7.28	2:25~不明	3	通過
7.29	10:48~不明	1	通過
7.31	20:45~22:30	3	通過
8.1	夜	2	機雷投下
8.2	11:59~不明	1	通過
8.4	12:12~13:10	1	ビラ散布
8.7	11:30~不明	1	通過
8.9	6:11~不明	▲ 6	不明
8.10	11:45~不明	▲ 16	銃爆撃
8.14	22:00~不明	不明	通過
8.15	6:50~不明	1	ビラ散布

表16 昭和20年敗戦以前の新潟市へのアメリカ軍機の飛来 機数の▲は艦載機、その外はB29 5月27日・8月1日・8月9日の飛来は「新潟日報」記事だけにあり、アメリカ軍資料では確認できなかった 「Tactical Mission Report」「USSBS」(国立国会図書館所蔵)・「Mines against Japan」・「新潟日報」から作成

(一九四五)年四月十三日午前九時三十五分のことであった。富山県から新潟県南部に侵入した一機は、そこから北東に進んで県北部から福島県へ抜けた。爆弾などは落とさなかった。しかし、市民に与えた心理的な影響は大きく、本土攻撃が激しくなると新潟も空襲されると、多くの人が思った。新潟県警察部も、空襲は必至であるから、この際、もう一度周辺の防衛体制を見直し、足りないところを反省して直ちに整備するように県民に要望した。

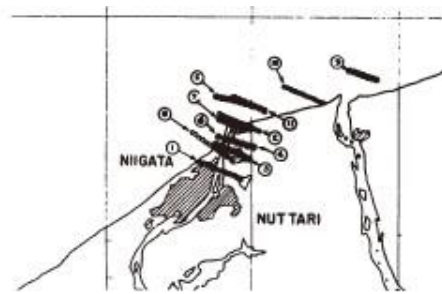


図19 昭和20年7月20日・28日の機雷投下地点 「Tactical Mission Report」 「USSBS」 (国立国会図書館所蔵) から

B 29 は四月二十二日朝にも姿を見せ、前回同様一機が富山県から新潟県南部に侵入し、高度八〇〇〇メートルから一万メートルで北東へ進み、福島県へ抜けた。このB 29 は新潟市上空で四回にわたって進路を変えて軍事目標の航空写真を撮影した。B 29 の来襲に、準備を整えて待避した市民もいたが、警報が発令されてから、防火水槽に水を張ったり、防空用の服装に着替えたり、屋内の整理に取り掛かったりした市民もいた。

五月十四日には初めて夜間の空襲があった。午前零時二十分ころ、B 29 四機が新潟県下に侵入し、新潟港に四三個の機雷を投下して一時十五分ころ福島県へ去った。新潟市民は初めての夜間空襲に不慣れで、特に灯火管制が不徹底であった。市内では電灯が漏れていたり、危険であると禁じられていたにもかかわらず、警報解除と同時に点灯したりする家庭が多かった。

この空襲が新潟港への機雷投下の始まりであった。この後、八月一日まで二回にわたって機雷が投下され、投下数は分かっているだけで七八一個に達した。機雷の投下は新潟港内はもちろん、港への進入を遮るように港外にも投下され、阿賀野川河口付近まで及んでいた。機雷の中には、地上に落下したものもあった。(表 16・図 19)。

撃墜されたB 29

新潟へ機雷投下に来襲するB 29 に対して、日本軍も高射砲などで反撃したが、撃墜できたのは七月二十日の一機だけであった。

この日は午前零時四十五分ころ、B 29 八機が新潟県に進入し、そのうちの五機が新潟港に機雷を投下した。これに対して「待機中のわが地上制空部隊は一斉に砲門を開き、的確無比な集中砲撃により二機撃墜、三機撃破の全機撃砕の輝く戦果を得た。なお、撃破の三機は水原、津川上空を通過、阿賀野川沿いに福島県に脱去した」と「新潟日報」は戦果を報じた。しかし、実際に撃墜されたB 29 は一機だけであった。その一機は、新潟市上空で照空灯に捕らえられ、高射砲が命



図20 昭和20年7月20日に新潟港に機雷を投下したB 29の飛行経路 「Tactical Mission Report」 「USSBS」 (国立国会図書館所蔵) から作成

中した。火を吹きながら南進し、新津市上空から東に反転し中蒲原郡横越村（現横越町）^{そうみ} 沢海焼山地内の畑に落ちた。地元民は警報発令と同時に身支度をして堤防に上がり、警戒にしていた。住民は退避していて無事であった。

アメリカ軍の記録には、「攻撃目標を離脱後、飛行機一機行方不明、乗員一人全員不明」とあり、B29には通常の定員どおり一人の乗員が乗っていた。墜落した機体は一部が焼け焦げていて、中ではアメリカ軍兵士四人が死んでいた。残り七人は落下傘で脱出し、北蒲原郡京ヶ瀬村で捕えられた。捕えられたアメリカ軍兵士は、朝になって新潟へ送られ、その日のうちに汽車で東京に向かった。撃墜されたB29の機体は白山新公園（現新潟市役所分館所在地）で七月二十二日から二十九日まで展示された。

アメリカ軍潜水艦の日本海侵入

太平洋岸の主要港湾が機能を失うにつれて、本土とアジア大陸を結ぶ航路として日本海の重要性が増大した。アメリカ海軍の潜水艦部隊は、日本海を制圧するために、日本側が敷設した機雷海域を突破して日本海へ侵入し、船舶を撃破する「バーネー作戦」を展開した。二十（一九四五）年五月二十七日にグアム島を出撃した九隻の潜水艦は対馬海峡を突破して日本海に入った。六月九日、潜水艦は佐渡弾^{はじきぎき}崎東方沖で「佐川丸」（一一八九総トン）、「昭陽丸」（二二一一総トン）の二隻の貨物船を撃沈した。これが「バーネー作戦」最初の戦果であった。しかし、日本が船の日本海航行を停止したことや、対潜水艦作戦を強化したために、十分な成果を上げることができないまま、六月二十五日に潜水艦が宗谷海峡から脱出してこの作戦は終わった。

第二節 触雷した船舶

新潟港での触雷

昭和二十（一九四五）年に新潟港を封鎖するために投下された機雷は、分かっているだけで七八一個に上る（表17）。新潟港に出入りする多くの船が、触雷して損害を受けた（表18）。初めて機雷が投下された五月十四日に、大阪商船の貨客船「白龍丸」（三一八二トン）が、新潟港西防波堤灯台（以下「新潟港灯台」と略記）の北北西五〇〇メートルの所で触雷して小破したのが最初の被害であった。

海軍は掃海作業を進めたが、相次ぐ機雷投下と装備が不備なため十分な掃海はできず、掃海作業をしていた船まで触雷する始末であった。そのため六月以降、触雷、沈没する船が増え、七月には連日のように船が触雷した。触雷は乗っていた人々の生命も奪った。また、触

種別	形式	個数	特 徴
磁気	M 9	431	小型、水深の浅い所で使用
	M11	61	大型、水深の深い所で使用
音響	A 3	190	中周波感应
	A 5	10	低周波感应
複合	A 6	89	磁気・水圧複合
合 計		781	

表17 新潟港付近に投下された機雷 『Mines against Japan』から作成

年月日	船名(トン数)	種別	所有者	触雷位置	被害
30年					
5.14	白龍丸(3,182)	貨客	大阪商船	灯台345°500m	小破
5.17	おけさ丸(438)	貨客	佐渡汽船	灯台345°1,000m	小破
5.22	第157号駆潜特務艇(130)	艦艇	海軍	灯台59°14,800m	小破
5.27	長陽丸(2,225)	—	大洋興業	新潟港	小破
5.27	貴船丸(1,623)	貨物	日本郵船	灯台0°1,400m	小破
5.29	敦賀丸(134)	—	敦賀一松下	新潟港	小破
5.30	旭丸(3)	漁船	—	飛行場沖1,000m	沈没
6.4	貴船丸(1,623)	貨物	日本郵船	灯台86°550m	沈没
6.7	佐昭丸(15)	—	—	新潟港	大破
6.7	—(6?)	漁船	松浜一倉田	阿賀野川河口付近	沈没
6.8	第1浦風丸(11)	—	新潟一田辺	新潟港	沈没
6.11	エイゲン(1,710)	—	—	新潟港	小破
6.17	—(150)	曳船	—	新潟港	—
6.19	第8佐渡丸(230)	貨客	佐渡汽船	新潟港	小破
6.27	真岡丸(1,218)	貨物	北日本汽船	灯台26°300m	小破
6.27	—(150)	曳船	—	新潟港	小破
6.29	雲鷹丸(117)	—	—	新潟港	沈没
7.1	第2天祐丸(29)	艦艇	新潟一八幡	灯台90°600m	沈没
7.1	生多丸(132)	—	—	新潟港	小破
7.2	新潟鉄工所群(30)	群	新潟鉄工所	灯台193°2,100m	沈没
7.4	丸五丸(19)	貨物	丸五高野本店	灯台80°600m	沈没
7.5	第1東勢丸(542)	油槽	朝鮮油槽船	灯台66°1,700m	沈没
7.6	第153号駆潜特務艇(150)	艦艇	海軍	灯台20°400m	大破
7.6	宇品丸(2,216)	艦艇	陸軍	灯台付近	大破
7.8	第4号舟艇(12)	艦艇	海軍	灯台19°1,900m	大破
7.12	興順丸(2,178)	貨物	大連汽船	灯台44°300m	沈没
7.15	第6地油丸(150)	油槽	陸軍	灯台19°11,600m	沈没
7.19	大黒丸(598)	浚渫	新潟港工事事務所	灯台191°1,300m	沈没
7.19	大治丸(2,759)	鉱石	昭和企業	灯台北700m	小破
7.22	香取丸(2,211)	貨物	栃本汽船	西防波堤20°2,180m	沈没
7.22	古城丸(1,684)	貨物	大連汽船	西防波堤付近	大破
7.23	海光丸(218)	曳船	—	新潟港	沈没
7.23	昭光丸(2,208)	貨物	松岡汽船	灯台9°1,150m	沈没
7.30	第30号舟艇(12)	艦艇	海軍	新潟港	大破
7.30	第1号舟艇(12)	艦艇	海軍	新潟港	大破
8.2	山東丸(1,890)	貨物	菅谷汽船	灯台350°1,780m	沈没
8.17	第7地油丸(150)	油槽	陸軍	灯台84°300m	沈没
8.22	煙台丸(3,461)	貨物	日本海汽船	灯台298°2,100m	沈没
8.23	第49号駆潜特務艇(150)	艦艇	海軍	灯台36°3,500m	沈没
9.2	第6大平丸(24)	—	—	新潟港	—
9.16	松栄丸(3~4?)	漁船	—	飛行場沖	大破
10.5	那須丸(694)	引揚	日本サルベージ	灯台沖3,700m	沈没
22年					
9.22	万代丸(503)	浚渫	船匠渡川工事事務所	灯台180°1,210m	沈没
47年					
5.26	海嶺丸(2,142)	浚渫	新潟港工事事務所	新潟港東防波堤灯台21°230m	沈没

表18 新潟港内外の触雷船一覧 —は不明 ?は推定 「種別」欄の艦艇は特務艦艇を含む 「所有者」欄のたとえば「松浜一倉田」は前者が地域名、後者が個人名。「触雷位置」欄の「灯台」は新潟港西防波堤灯台、「飛行場」は新潟飛行場 位置を示す方位は北を0°とした時計回りの度数 海上自衛隊・海上保安庁・新潟県新潟港湾事務所所蔵資料、厚生省援護局『遭難艦船名簿』・『海上保護用船名簿』（防衛庁戦史部所蔵）・駒宮真七郎『戦時船舶史』・海上労働協会『日本商船隊戦時遭難史』・内務省調査局『旧陸海軍所属難役船名簿』・『United States Strategic Bombing Survey Section』・『GHQ/SCAP Legal Section』（国立国会図書館所蔵）・戦前船舶研究会連藤昭氏所蔵資料などから作成

雷して沈没したり、座礁したりした船は航路をふさいだ。

いったん敷設された機雷は、戦争が終わってもその機能を失わない。八月十五日以降も二十年には六隻が、二十二年には一隻が触雷した。さらに、海上保安庁の掃海作業が終了した後も、四十七年に一隻が触雷、沈没した。

戦争中の触雷による被害や被害者の全容はよく分からない。表 18・19 に掲載した以外にも被害があった可能性は高い。

貨物船「貴船丸」の触雷

アメリカ軍の機雷作戦「飢餓作戦」の目的は、日本の物資の海上輸送を遮ることであった。実際、貨物を運ぶ船が触雷している。

五月二十三日早朝、日本郵船株式会社が所有する「貴船丸」（一六二三トン）は銑鉄を満載し、室蘭を出港して新潟に向かった。しかし、間もなく新潟港には多数の機雷が投下されて危険になったため、入港を禁止する知らせを受け、二十六日午前八時船川港（秋田県男鹿市）に臨時寄港した。夕方になって、船川を出港して粟島沖で新潟港の掃海完了を待った。二十七日午後二時ごろ、入港可能の確認がとれたので、直ちに新潟に向かった。慎重に航行していたが、午後六時五十八分、新潟港灯台の北一四〇〇メートルの地点に差し掛かったとき、左舷のすぐそばで機雷が爆発した。爆発の衝撃で破損した船体にはあちらこちらから海水が流れ込み、排水作業のかいもなく、二十八日午前零時ごろには後部上甲板を海水が洗うようになった。船長は、沈没を防ぐため午前一時過ぎに防波堤東側の浅瀬に船体を乗り上げ

た。夜の明けるのを待って、船長は事務長を伴い新潟在勤海軍武官府へ行き、救援を依頼した。

五月三十一日、第一〇五戦隊司令官は、新潟港湾警備隊司令官に対し、「貴船丸」の救助を命じた。これを受け、六月一日から二日にかけては、第一五三号駆潜特務艇と掃海用付属艇が出動して掃海した。続いて船体を浮かせて曳航^{えいこう}するために積み荷の銑鉄を陸揚げした。積み荷の陸揚げ作業には強制連行されてきていた中国人数十人が従事した。二四五トンの積み荷を揚げた「貴船丸」は、船体が浮き上がり、六月四日、引き船に引かれて港内に向かった。午後二時五十分、「貴船丸」は港口の新潟港灯台の東五五〇メートルの所で再び触雷した。船は瞬時に中央から折れ、船首と艦橋を水面に残して沈んだ。荷揚げのために乗船していた中国人九人を含む一三人が死亡した。「貴船丸」はもはや再生できず、放棄された。

陸軍軍用船「宇品丸」の座礁

七月六日には、陸軍軍用船「宇品丸」（二二一六トン）が、清津^{チョンジン}（朝鮮）から米・コウリヤンなど一四〇三トンと雑貨六〇トンを積んで新潟港に入港する直前に、新潟港灯台付近で触雷し、船底から浸水を始めた。「宇品丸」は沈没を免れるために全速力で入港し、河口の浅瀬に座礁した。

この船は、アメリカで造船されたが、昭和五（一九三〇）年に陸軍が民間会社から購入して、「宇品丸」と名付けて運輸部に配属し、工兵の訓練母船・輸送船として使用していた。七年三月二十四日には新潟港中央埠頭から満州事変参戦の交替兵を乗せて出港したこともあった。触雷したときには船員約五〇人と兵士約一〇〇人が乗船していた。

当時の次席二等航海士荒稻蔵は、この触雷の状況を次のように証言している。

私は、清津を出港した後、船橋で操船の補佐をしていた。新潟港の入口で、コンパスの方位が定まらなくなった。船長に「方位が取れない」と報告した。船長と会話しているうちに触雷した。船橋を下りて船倉を点検すると、私の担当していた二番ハッチが浸水していた。直ちに船橋に戻り、浅瀬に乗り上げるために全速力で船を走らせ、外の船の航行に支障がないように新潟鉄工所造船工場ドックより下流の浅瀬に座礁させた。上流側に錨^{いかり}を二本打って船を固

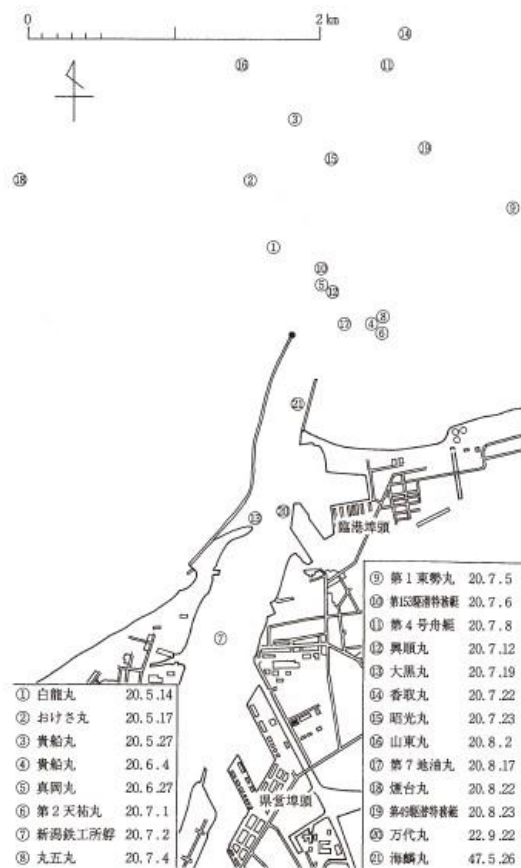


図21 新潟港の主な触雷地点 表18に掲げた触雷船のうち、位置の明確な船の港内触雷地点を明示した

定した。

触雷によって水浸しになった米を荷揚げするまで一週間ぐらいかかった。米は新潟市内に特別に配給されたが、臭かった。

越佐航路の貨客船の触雷

新潟と両津を結んで、佐渡の人々にとって欠かせない越佐航路の貨客船も触雷した。

新潟港に対するアメリカ軍の機雷投下が開始されて間もない二十（一九四五）年五月十七日、新潟港灯台北北西一〇〇〇メートルの地点で、「おけさ丸」（四三八トン）が触雷した。被害は軽く、自力で航行し入港した。六月十九日には「第八佐渡丸」が港外で触雷した。これも人に被害はなく、沈没も免れた。これらの船は、その後修理されて越佐航路に再び就航した。



図22 「第八佐渡丸」 【六十年のあゆみ】 佐渡汽船株式会社から

「丸五丸」（一九トン）は、佐渡郡真野村（現真野町）の丸五高野本店（現マルゴ味噌株式会社）の船で、船舶運営会に所属して貨物の運送に使用されていた。「丸五丸」は、七月四日、軍用木材を積み、佐渡から新潟に向かっていた。「^{かずまる}一丸」という佐渡の船が同行し、「丸五丸」の先を航行していた。「一丸」は無事であったが、「丸五丸」は、港口で触雷した。乗船していた佐渡郡二見村（現相川町）出身の三人が死亡した。船長の遺体は現紫雲寺町の海岸で発見されたという。五十七年七月、マルゴ味噌は「丸五丸」関係者の慰霊碑を真野町に建立した。

漁船の触雷被害

食糧不足が続いていた新潟市にとって、新潟やその周辺の漁船が水揚げする魚は貴重なタンパク源であった。そのため機雷投下後も出漁していて触雷した漁船もあった。これらの漁船の中には、船名や被害が確認できない船もある。

五月三十日午前六時三十分ごろ、新潟飛行場沖一〇〇〇メートルの所で、漁船「旭丸」（三トン）が、引き網中に触雷し沈没した。この漁船の所有者や被害は分かっていないが、死亡者がいるのではないと思われる。

六月七日午前六時三十分ごろには、松ヶ崎浜村（現新潟市松浜地区）の松浜港に帰る途中のイワシ漁船（六トン程度）が阿賀野川河口付近で触雷した。乗組員八人中五人が死亡した。この漁船の所有者は松浜の人であるが、船名は分からない。この事故を契機に、松浜のイワシ漁は中止されたという。

敗戦後の九月十六日、松浜港の底引き網漁船「松栄丸」（三～四トンくらい）が飛行場沖で触雷し、漁師一人が死亡した。この船には三人が乗組み、飛行場沖でコダイ、キスなどの漁をしていた。三人のうち一人は国民学校一年生の子供であった。日曜日で漁に同行したが、船酔いのため船首で眠っていて、爆発で海に投げ出され一命を取り留めた。

掃海作業中の触雷

第一〇五戦隊司令官の指揮下にあつて掃海作業に当たっていた駆潜特務艇（一五ページ参照）や徴用されて掃海作業をしていた漁船も触雷した。第一五七号駆潜特務艇は、五月二十二日午前九時四十八分、新潟港灯台東北東八海里（約一四・八キロメートル）で触雷した。船体や兵器・機械に損害を受け、修理に約一週間を要した。第一五三号駆潜特務艇は、七月六日に新潟灯台北北東四〇〇メートルで触雷した。九人が重軽傷を負い、船は機関室に浸水して航行できなくなり、浅瀬に乗り上げた。

海軍に徴用されていた「第二天祐丸」（二九トン）は、七月一日、新潟港灯台東六〇〇メートルで掃海作業中に触雷して沈没した。「第二天祐丸」は、新潟港に所属する機船底引網漁船であった。新潟港の機船底引網漁船は二十五、六隻あったが、いずれも三〇トン前後で当時の漁船としては大きい方であった。これらの漁船が、海軍に徴用されて掃海作業に従事していた。徴用された船には、船員六、七人、兵士二、三人が乗船し、機銃が一丁装備されていたというが、「第二天祐丸」もそうした漁船の一隻であった。この触雷で「第二天祐丸」では三人の船員が死亡した。

七月八日には、掃海作業に従事していた「第四号舟艇」（一二トン）が新潟港灯台北北東一九〇〇メートルの所で触雷し、航行できなくなった。

新潟鉄工所の舁の触雷

新潟市域で最も多くの人々が犠牲になった触雷事故は、いわゆる「鉄工丸事件」であった。

二十（一九四五）年七月二日午後五時少し前、新潟鉄工所入船工場から信濃川対岸の山ノ下工場に向かって新潟鉄工所の定期連絡船「第一鉄工丸」が出発した。「鉄工丸」は通勤時間帯には多くの人を運ぶため舁^{はしけ}を引いていた。この日は蒲原祭で、帰宅を急ぐ人々の姿があった。この舁には勤労働員の生徒や新潟鉄工所の職員が七〇人ほど乗っていた。



図23 県立相川高等学校の慰霊碑

午後五時五分ごろ、北埠頭地先約八〇メートル、水深七メートルの所で舁が触雷した。新潟鉄工所に勤労働員中の、県立第一新潟工業学校（現県立新潟工業高等学校）の生徒七人、県立第二新潟工業学校（現県立新潟商業高等学校）の生徒三人、相川町立相川中学校（現県立相川高等学校）の生徒二人と新潟鉄工所の関係者一六人の計二十八人が死亡し、二四人が負傷した。さらに、その後、負傷者二四人のうち、第一新潟工業学校生徒一人と新潟鉄工所関係者一人が、この負傷が原因で死亡した。

七月十四日、新潟鉄工所は勝楽寺（西堀通八番町）で、生徒一二人を含む二十八人の社葬を執り行った。

県立相川高等学校の前庭には、「平和」の碑が建立されている。これは級友たちが死亡した二人の霊を慰めるため関係者に呼び掛け、昭和六十三年七月二日に建立したものである。平成六（一九九四）年七月二日には、この碑の前で、犠牲者の五十回忌慰霊祭が営まれた。

戦後も続いた浚渫船の触雷

新潟港は信濃川の運んでくる土砂がたまり、浚渫しなければ港内が浅くなってしまう。水深を維持するためには浚渫船が欠かせなかった。浚渫は戦争中も戦後も続けられたが、投下された機雷は戦中・戦後を問わず、浚渫船を襲った。

運輸省第一港湾建設部新潟港工事事務所に所属していた浚渫船「大黒丸」（五九八トン）は、二十（一九四五）年七月十九日午前、新潟港内の浚渫作業を開始しようとして触雷し、一瞬にして転覆、沈没した。このため、船長を含む七人の乗組員が死亡した。船長の遺体は、一年数か月後、泥で埋まった船の中から発見された。戦後、新潟港を復興するため、港内外で触雷して沈没した船舶の引上げ作業が開始された。「大黒丸」の引上げは、二十一年八月から始まった。二十三年三月によりやく浮き上がり、函館ドックに回航された。「大黒丸」は完全に修復されて二十五年度から再び新潟港の浚渫作業に従事した。

二十二年九月二十二日、新潟県土木部信濃川工事事務所に所属する浚渫船「万代丸」（五〇三トン）は、直江津港での浚渫作業を終えて新潟港へ帰港した。港口を入り、臨港埠頭入口に差し掛かったときに触雷した。「万代丸」は大音響とともに沈没した。乗組員一六人中、三人が死亡した。

敗戦から二七年もたった四十七年五月二十六日、運輸省第一港湾建設局所有の浚渫船「海鱗丸」（二一四二トン）が、新潟港で触雷、沈没し、乗組員四六人中二人が死亡、外の乗組員も全員が重軽傷を負った。触雷した所は、臨港埠頭前面の水域で、大音響とともに船体は左に傾き、数十秒で沈没した。

「海鱗丸」は、その後修復され、再び新潟港で浚渫作業を開始したが、乗組員の要望もあって、「白山丸」と改名された。

新潟港の機能低下

アメリカ軍の機雷投下によって、日本海側の海運の重要拠点に位置付けられていた新潟港の機能は低下した。二十（一九四五）年六月中旬から、掃海に手間取って船の出入港は思



図24 沈没した「大黒丸」 【新潟港修築史】から

触雷年月日	船名	死亡者数
昭和20.6.4	貴船丸	13
昭和20.6.7	漁船（松浜－倉田）	5
昭和20.7.1	第2天祐丸	3
昭和20.7.2	新潟鉄工所艇	28
昭和20.7.4	九五丸	3
昭和20.7.12	興順丸	5
昭和20.7.15	第6地油丸	2
昭和20.7.19	大黒丸	7
昭和20.8.2	山東丸	19
昭和20.9.16	松栄丸	1
昭和22.9.22	万代丸	3
昭和47.5.26	海鱗丸	2
計		91

表19 新潟港内外の触雷による死亡者数 典拠は表18に同じ

うに任せなかった。灯台近くの航路や港口に、触雷した船が沈没したり、座礁したりして、外の船の航行を妨げた。浚渫船が触雷したため、新潟港は土砂がたまって浅くなった。六月上旬に比べると、六月下旬の新潟港の輸移入貨物量は一パーセント、輸移出貨物量は四五パーセントに落ち込んだ（表 20）。

また、アメリカ海軍の潜水艦が日本海に進入したため、日本海を航行する船は最短距離をとることができなくなり、海岸沿いに遠回りしなくてはならなかった。そのため輸送力は五〇パーセント減退した。八月以降、再び最短コースを航行するようになったが、触雷によって輸送船の数が減少したり、港の荷揚げが遅れたりしたため、輸送力は回復しないまま敗戦を迎えた。

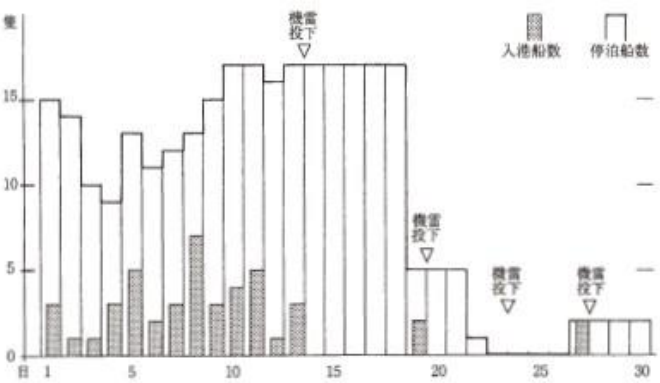


図25 昭和20年6月の新潟港の入港船・停泊船数の変化 「第十二方面軍兵站月報六月分」（防衛庁戦史部所蔵）から作成

時期	輸移入 貨物量 トン	輸移 出 貨 物 量 トン
上旬	74,470	7,083
中旬	51,381	5,277
下旬	8,476	3,188

表20 昭和20年6月の新潟港輸移出入貨物量の推移 「第十二方面軍兵站月報六月分」（防衛庁戦史部所蔵）から作成

第四章 艦載機の空襲



●「宇品丸」の慰霊碑

第一節 艦載機の出現

新潟空襲の危惧

「新潟はなぜ空襲されないのか。いつ空襲を受けるのか」、新潟市民の空襲への不安は次第に高まっていった。

昭和二十（一九四五）年三月十日の東京大空襲の後、着の身着のままで新潟駅に降り立った東京の罹災者の姿に新潟市民は驚いた。東京大空襲のすさまじさは人々の口から口へと伝えられ広がっていった。四月十三日にB29が新潟に姿を現したとき、県警察部も空襲は避けられないと言明した。東京に続いて全国の都市に次々と焼夷弾の雨が降った。県も市も盛んに空襲への備えを強調し、建物疎開も次第に強化されていった（五五ページ参照）。しかし、新潟上空にB29は来襲するが、機雷を投下していくだけであった。

「いつ新潟は焼け野原になるのか」、西堀通十番町蒲原浄光寺の住職蒲原霊英は、日記にそうした人々の思いを次のように記録している。

四月十日 檀家の内にて吾が予言的中せる為め新潟空襲は何時頃なるか聞き度き人ありと

四月十二日 四月十六日に新潟へ投弾説流布せらる

六月五日 新潟の全焼は盆前後なるかと

六月二十四日 一般人も新潟市の罹災は盆以前なるべしと予言す

七月十三日 市内の焼夷攻撃は今明日に迫れる如し

飛行場の被災

七月十七日昼、アメリカ軍の艦載機が新潟を襲った。アメリカ軍の空襲はそれまでほとんどが夜間のB29による空襲で、昼間の艦載機による空襲は初めてであった。来襲した十数機の艦載機は、アメリカ海軍機動部隊のグラマンF6FヘルキャットとヴォートシコルスキーF4Uコルセアである。これらの艦載機は、太平洋上の航空母艦を発進したものであった。この日、日本側は電波探知機によって、午前六時ころ、金華山（宮城県）の東南一〇〇海里（約一八五・二キロメートル）沖にアメリカ海軍機動部隊を発見していた。この海軍機動部隊の各空母から、悪天候にもかかわらず、午前十時ころまでに、四〇〇機以上の艦載機が関東・東北地方に向けて発進した。艦載機は主として太平洋側の飛行場や市街地を攻撃した。そのうちの一部が福島市上空を経て山形県南部から午前十時三十分ごろ新潟県に侵入した。新潟地域では、不意をつかれたため事前に警戒警報などは発令されなかった。

この日の新潟は、今にも雨が降り出しそうな



図26 新潟飛行場大格納庫と中島A T双発輸送機
「新潟地方航空機乗員養成所」から

天候であった。艦載機のうちの数機が新潟飛行場を襲った。当時、新潟飛行場にあった新潟地方航空機乗員養成所では生徒一五〇人が教育訓練中であった（一一ページ参照）。オレンジ色の九九高等練習機が一機、緊急に着陸した。その直後、爆音がして機銃掃射音、次いで養成所の窓ガラスが破れる音が響いた。コルセア二機に続いてヘルキャットが攻撃してきた。

艦載機はロケット弾や小型爆弾を投下し、大格納庫を爆破した。この格納庫は、夜間戦闘機の離着陸障害にならないように、すでに爆破されていた。攻撃されたのはその残骸であった。屋外に置かれていた整備教育用の中島 A T 双発輸送機は燃料を抜いてあったが、艦載機の機銃弾によって三機が焼失した。

養成所の本館の壁にも無数の弾痕^{だんこん}が残り、焼失した A T 機の周辺の地面には一〇センチメートル四方に三発の割合で弾痕が付いていた。激しい空襲であったが、生徒らは松林や防空壕に避難し、死亡者はなかった。

市民の対応

この日、艦載機の攻撃が始まるまで空襲警報は発令されなかった。そのため、市民の中には、艦載機の機銃掃射を日本軍の演習と勘違いしたり、対空砲撃音を機雷処理の音と思い込んだりした人もあった。やがて新潟警察署の屋上に設置された拡声器から空襲警報が発令された。しかし、そのまま古町通りの店の前に買い物客が長蛇の列を作っている光景も見られた。市内の国民学校では児童らを帰宅させたが、艦載機が頭上を飛び交っているのに、列を組んで小走りに下校するありさまであった。このように、市民は艦載機の空襲に対して無防備な状態であった。こうした市民に対して、「新潟日報」は、艦載機は「曇天の日などは低い雲上にあって爆音だけごうごうと聞かせていて、なかなか姿を見せない、と思う間もなく雲を破って急降下し、まず動いているものをやっつける」という、外の都市で艦載機の空襲を体験した人の談話を掲載して警告した。

八月九日

二十（一九四五）年八月一日夜、空襲警報が発令されると、新潟から遠く南の空が赤く染まった。長岡市が九二五トンの焼夷弾のじゅうたん爆撃で焼け野原になったのであった。八月五日は「こんどこそ新潟が空襲される」とうわさされた日であったが、この日も空襲はなかった。八月六日、広島に原子爆弾が落とされた。新潟市民の不安は募っていった。

八月九日朝、艦載機が再び新潟上空に現れた。八月十日付けの新潟日報は「九日午前六時十一分ころ艦上機ヘルキャット三六機は山形県から県北部に侵入、三〇機は二編隊で村上付近から日本海に行動したのち山形県へ脱去したが、六機は西南進し新潟、内野、寺泊、出雲崎付近を旋回、さらに反転し長岡、三条、新発田付近を行動して福島県へ脱去した。被害は全くなかった」と報道している。

なお、アメリカ海軍の記録によると、この日の昼にも新潟攻撃が計画されていた。午前九

時三十分、牡鹿半島東二五〇キロメートルの海上にあったアメリカ海軍空母「ワスプ」からヘルキャット八機、コルセア四機が発進した。これらの艦載機は、空母「ヨークタウン」・「シャングリラ」から飛び立った艦載機とともに、新潟飛行場や米沢市（山形県）^{はちまんぼら}八幡原飛行場を攻撃するために出撃した。この艦載機は米沢市付近を攻撃したが、新潟市へは飛来しなかった。

第二節 八月十日の空襲

艦載機の奇襲

昭和二十（一九四五）年八月十日、アメリカ軍の艦載機が再び新潟市を襲った。午前十一時四十五分ごろ、艦載機は低く垂れ込めた雲の間から急降下してきた。新潟市域のあちらこちらで機銃を掃射し、ロケット弾を投下した。

この日の空襲について、学徒動員によって新潟鉄工所山ノ下工場で働いていた相川中学校（現県立相川高等学校）の三年生は、日記に「艦載機だ。壕に入ると同時に空襲警報。（略）突然爆音が聞こえたかと思うと機銃掃射の雨、バリバリバリバリものすごい。まるで息つくひまもない。連続射撃だ。（略）さっき防空壕にいた時、非常汽笛をならしている船があったが、そいつが燃えているという。真っ黒い煙がもくもくと湧き、烈しい^{まぐれつ}炸裂音が空気をふるわす」と記述している。

この攻撃を、翌十一日付け「新潟日報」は「十日午前十一時四十五分ごろ艦上機F 6 F四十数機は数編隊に分散して福島県から県北部に侵入、新潟市付近の軍事施設、工場、市街地の一部に銃爆撃を加え、更に新潟港に碇泊中の船舶並びに付近海上を航行中の船舶を機銃攻撃して福島県へ脱去した。被害は軽微である」と報道している。

戦時中の報道であるから、「被害は軽微」ということになるのであろう。しかし、実際は、この八月十日は、新潟市の戦災上では最も多くの人が犠牲になった日であり、最大の物的被害のあった日であった。

目標は飛行場石油タンク

アメリカ海軍の第三八機動部隊第三八・四任務群の「戦闘報告」によれば、この艦載機は、金華山沖の空母「ヨークタウン」から午前九時五十九分に発進した、グラマンF 6 Fヘルキャット一六機であった。攻撃目標は新潟飛行場の石油タンクであった。

当時、新潟飛行場に石油タンクはなかった。石油はドラム缶に入れて近くの松林の中に隠していた。飛行場近くの昭和石油のタンクが一基攻撃され炎上した。また、飛行場から離



図27 新潟攻撃を記す空母「ヨークタウン」の戦闘報告書 「海軍海兵隊艦載機戦闘報告書」「USSBS」（国立国会図書館所蔵）から

れていた日本石油のタンクも被災した。

このとき、飛行場近くの阿賀野川河口、松ヶ崎浜村大字下山字根室（現在新潟空港敷地内）にあった排水機付近に小型爆弾が投下され、その破片を浴びた住民が一人死亡し、他の一人が重傷を負った。

ヘルキャットの攻撃はこれだけではなかった。攻撃目標は飛行場の石油タンクとされていたが、外の工場や船・民家に対しても機銃掃射やロケット弾攻撃を加えていったのである。

「おけさ丸」の被弾

二十（一九四五）年五月十七日に触雷した、佐渡汽船の貨客船「おけさ丸」（四三八トン）は、修理されて再び越佐航路に復帰していた（四一ページ参照）。八月十日午前十一時五十分ころ、「おけさ丸」は新潟港に入港し、中央埠頭^{ふとう}付近をいつものように微速で航行しながら、下大川前通六ノ町の佐渡汽船岸壁を目指していた。そのとき、アメリカ海軍の艦載機の機銃掃射を受けた。「おけさ丸」は大急ぎで接岸したが、船橋後方の甲板を中心に一七〇～一八〇発の銃弾が船体を貫通した。船尾の三等船室の被害が最も大きく、中には頭を撃たれてスイカを割ったように赤い血にまみれている人や、内臓を露出している人さえいた。到着直後の佐渡汽船の待合室には、むしろを掛けられた遺体が並び、多数の負傷者の中には右手を撃たれて鮮血が流れ、手首が皮膚だけでつり下がっている人もいたという。乗客一四人、船員一人が死亡した。重軽傷者も乗客一九人、船員四人に上り、長谷川病院に収容された。



図28 「おけさ丸」 『六十年のあゆみ』
佐渡汽船株式会社から

「おけさ丸」は喫水線から下の被弾箇所を応急修理し、翌日には佐渡関係者の遺体を乗せて両津港に着いた。佐渡汽船創立以来最大の惨事であった。

「宇品丸」の炎上

八月十日の空襲で最大の犠牲者を出したのは、陸軍軍用船「宇品丸」であった。しかし、軍用船の性格上か、新聞は「おけさ丸」のことは報道したが、全く「宇品丸」の被災に触れていない。

「宇品丸」は七月六日に触雷して河口浅瀬に座礁していた（四〇ページ参照）。佐渡汽船が被弾したと同時に、「宇品丸」も攻撃を受けた。「宇品丸」は高射砲二門、機関砲六門をはじめ、野砲・爆雷・打ち上げ筒などを装備しており、乗船していた兵士が艦載機に応戦した。

「宇品丸」には、操船のための船員約五〇人と船舶防衛のための陸軍船舶砲兵や機関砲兵等、兵員約一〇〇人が乗り組んでいた。兵士は船舶砲兵第一連隊第一〇中隊・第一九中隊・第二〇中隊と船舶機関砲第一連隊第二中隊から分遣されてきた人たちで混成されていた。この中には、補充兵も多数おり、武器の操作に未熟な兵士もいて、新潟港内に座礁中に、高射砲・機関砲の操作について特訓を受けた者もあった。座礁した後は、兵士・船員ともに船

中で毎日を過ごしていた。「宇品丸」に乗船していた兵士や船員は死亡者からみると、西日本出身者が多かったようであるが、数少ない新潟県出身の兵士の一人原忠一は、座礁中に長岡への帰省を許され、船に戻ったばかりであった。原は打ち上げ筒分隊長として応戦中に戦死した。原にはこの帰省が家族との永遠の別れになった。

艦載機は、あたかも眼前に物が落ちてくるかのように、急降下して迫ってきた。迎撃している兵たちに向かって機銃掃射を加え、ロケット弾を発射した。機関砲が装備されていた船尾にロケット弾が命中して火の手が上がった。船長太田^{けんすけ}虔甫は脚部に重傷を負った。隊長渡部^{くにとだ}訓忠は陣頭指揮に当たったが、ロケット弾の破片を左肩に受けた。

戦闘時間は十数分間であった。この短時間の戦闘で兵士が一六人、船員が三人、合計一九人が戦死した。

二十年九月二十三日、「宇品丸」に乗船していた船舶砲兵大西正義は、この戦闘で戦死した戦友の加藤慶一郎の遺族に書簡を送った。その中で、戦闘の様子を次のように記している。

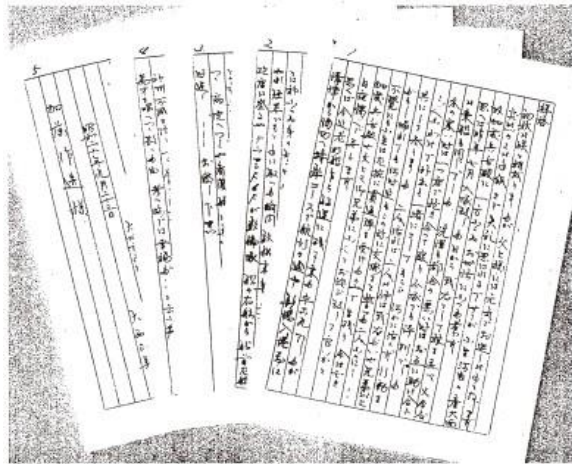


図29 加藤兵長の最期を知らせた書簡 個人所蔵

この日は昨日の戦果の野菜を漬けるのに分隊総掛かりで昼前までかかり、夕方から——と楽しんで昼食に掛かりました。これが最後の食事とは神ならぬ身の知る由なく、冗談話を交わしながら楽しく食べ終り、やれ煙草^{たばこ}でもと手に取った瞬間、敵機来襲、「定位につけ」、砲座に登るやグラマンF 6 Fが数編隊、船の右舷から船首左舷と回りました。不運にもこの時他の船は皆岸壁にいたため、倉庫の陰になり本船のみが信濃川の真ん中、よい目標となったものか、左舷に回った編隊が急降下するやバリバリと掃射、本船よりも隊長の号令いっか、応戦、一番機、二番機は火を発しつつ海へ。この時に空にいた数編隊が船首右舷よりも襲いかかりました。不覚、左腕に貫通弾を受けた小生は応急処置を受けるべくサロンへ、船は残念にも直撃弾を受け、モウモウと白煙をあげつつ火の手が——、手当てを受け船尾へ帰ろうとしたときは、通路は火の海、負傷者は全員船首へ避難するよう命令が降り、銃剣装具、また加藤兵長のことが気になりつつ如何^{いかん}ともなし得ず着のみ着のままで退船、火はブリッジ、機関砲座を包み、弾はバンバンと破裂しやっとな小舟で陸へ——

また、この戦闘で死亡した陸軍伍長小島清一に関する公文書には、戦死の状況が次のように記述されている。

昭和二十年八月十日、乗組陸軍輸送船宇品丸新潟港内ニ於テ^{かくざ}擱坐中、十一時四十五分、敵艦載機二十数機本船上空一帯ニ数編隊ヲ以テ雲上ノ間ヨリ急降下来襲ニ際シ、船尾ニ在リテ機関砲小隊第六分隊長トシ奮戦中、掃射弾ニ依リ頭部貫通銃創ヲ受ケ、十一時

五十分即死ス

大西の書簡はアメリカ軍の艦載機二機を撃墜したと記述しているが、アメリカ軍の「戦闘報告」には、新潟に向かった艦載機一六機のうち一機が撃墜され、パイロット一人が戦死したとある。

「宇品丸」の兵士の死亡者や重傷者は、トラックなどに乗せられて市内の長谷川病院や鉄道病院、さらには野戦病院に充てられた大形国民学校（現大形小学校）へ搬送された。また、船員の死傷者は、新発田の陸軍病院へ移送された。残った兵士は、万代橋東詰め近くの三社神社（三和町）で負傷の程度を見極めた後、任務に耐えると判断された者は、万代橋東詰め近くの船舶砲兵団の施設へ収容された。

ロケット弾を被弾した「宇品丸」は船内で火災が発生した。船尾に装着していた爆雷はいち早く信管を外して海中に投棄したが、弾薬庫にも火がまわって次々に誘爆し、弾丸が陸地にまで飛散した。「宇品丸」は一昼夜にわたって燃え続け、船体は焼けただれた。船体は左に傾き、西新潟の信濃川岸からは赤い船腹が見えていた。

その後の「宇品丸」

敗戦を迎えた「宇品丸」の兵士は、二十（一九四五）年八月下旬に新潟を離れ、列車で船舶砲兵団の本部のある広島県福山へ向かった。船員も八月下旬に宇品（広島市）へ戻った。

「宇品丸」は、河口にそのまま放置されていたが、二十年十一月ころ、陸軍から大蔵省に所属が移り、二十一年三月十二日には国鉄の一時使用が許可された。戦災で船舶が極端に不足している折であったので、沈船であっても再び使用することになったのである。「宇品丸」は、二十一年五月十一日から引き上げ作業が始まり、七月十一日に浮揚し、翌十二日に中央埠頭へ曳航された。八月三日には改修工事のため、舞鶴に向けて曳航され、二十二年五月三十日に改修が終了すると、早速六月十四日に初荷役として枕木を積み込むために釧路へ出航した。「宇品丸」はこうしてよみがえり、石炭など国鉄が使用する物資を輸送したが、二十五年三月、賠償の対象になり、朝鮮郵船（後の東京郵船・昭和郵船）に引き渡された。

山田町など「宇品丸」の座礁地点近くの町内の有志は、「宇品丸」の犠牲者を慰霊するため、昭和三十一年から慰霊祭を始めた。三十二年には山田町遊園地（現船見町二丁目北部公園）に木製の「英霊塔」が建立され、三十四年にはコンクリート製の「慰霊塔」に建て替えられた。

港外で攻撃された船

この日の「おけさ丸」と「宇品丸」の被災については、戦後、様々な形で、本に記録されたり、新聞に報道されたりしてきた。しかし、同じ時に新潟港外でこの艦載機の攻撃を受けた船についての記録は少なく、ほとんど語られてこなかった。

大阪商船三井船舶の所有で、船舶運営会に所属していた貨物船「第七万栄丸」（一一八七トン）は、新潟港沖で艦載機に襲われた。沈没は免れたが、損傷が激しく船体を放置せざる

を得なかった。乗組員のうち船長ら二人が死亡した。

陸軍に徴用されていた貨物船「よりひめ丸」（五二六トン）も被災した。神戸の浜根汽船所有のこの船には船員約二五人と船舶護衛の兵士が乗船していたが、そのうち船員一人と兵士一人が死亡している。死亡した兵士は船舶砲兵部隊に所属し、この船に装備されていた砲の砲手を務めていた。

また、海軍徴用船「第三新潟丸」でも、船員一人が死亡している。同じ海軍徴用船の「第七星丸」という船も新潟港灯台北一八〇〇メートル地点で銃撃され、船員三人が戦死している。新潟港湾警備隊の隊員が、新潟市の吉田儀八所有の機帆漁船「七星丸」（二五・九トン）が新潟港の掃海作業に当たっていたという証言している。「第七星丸」はこの「七星丸」かもしれない。

この日、南蒲原郡大崎村（現三条市）出身で新潟港湾警備隊所属の上等水兵（通信兵）阿部富次が戦死している。阿部の戦死に関する資料には、「新潟港灯台北四四〇〇メートルデ、付属艇ニ乗船、機雷掃海中、敵機来襲、交戦」し、戦死したとある。「付属艇」は新潟港湾警備隊に所属する舟艇であろう。この「付属艇」で阿部の外に兵士や軍属らが戦死しているかどうか確認できない。

これらの船で死亡した人々はいずれも新潟市外の出身であった。兵士として、軍属として新潟港で任務に就いたのである。

「合衆国航空母艦ヨークタウン戦闘報告書」には、八月十日の空襲によって、新潟港では「水雷艇一隻、中型商船二隻、大型貨物船一隻、小型帆船三隻」の七隻に損傷を与えたと記録されている。

陸上の被災

アメリカ軍艦載機は、市街地でも人命を奪った。西堀前通十番町と十一番町の間の風間小路で死傷者が出た。ロケット弾が投下され、小路に面した一軒が全壊した。隣りの家は二階部分が損壊した。小路を挟んだ家々では機銃掃射のため男女各一人が死亡、五人が重傷を負った。負傷した人々は長谷川病院へ運ばれたが、「おけさ丸」や「宇品丸」の負傷者も運びこまれていて、病院内はごったがえしていた。

新潟鉄工所入船工場（入船町四丁目）でも被害が出た。機銃掃射で工員一人が即死し、五人が重軽傷を負った。ロケット弾で工場の屋根も損傷した。

これら以外に、相川中学校の生徒の日記にあった新潟鉄工所山ノ下工場や北越製紙などの工場が銃撃を受けている。また、本間町二丁目の肥やし舟に爆弾が落ちて近隣の民家の窓ガラスが壊れたり人糞^{じんぶん}が飛散したりしたとか、関屋地区で機銃弾で屋根瓦が破損したとか、県庁が銃撃されたなどの証言が記録されている。万代橋上でも民間人が機銃掃射を浴びたという情報があるが確認できない。

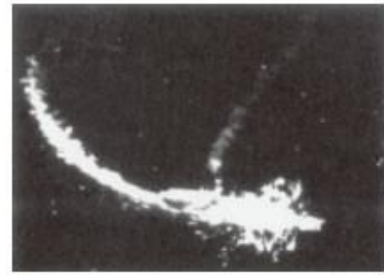


図30 新潟港外でヘルキョットに攻撃される船「海軍海兵隊艦載機戦闘報告書」[USSBS]（国立国会図書館所蔵）から

八月十日の空襲で、新潟市周辺で死亡した人は、現在分かっているだけで、兵士を含めて四七人である(表21)。

	被災場所	死亡者数	内訳
港内	おけさ丸	15	乗客14・船員1
	宇品丸	19	船員3・兵士16
港外	第7万栄丸	2	船員2
	よりひめ丸	2	船員1・兵士1
	第7星丸	3	船員3
	第3新潟丸	1	船員1
	新潟港湾警備隊付属艇	1	兵士1
市街地	下山字根室	1	村民1
	風間小路	2	市民2
	新潟鉄工所	1	工員1
	計	47	一般29・兵士18

表21 昭和20年8月10日の銃爆撃による死亡者数 財団法人日本殉戦船員顕彰会所蔵資料・『六十年のあゆみ』佐渡汽船株式会社・『戦時船舶史』及び関係者からの聞き取りなどから作成

第五章 原子爆弾と新潟



● 平和祈念碑

第一節 疎開

空襲への備え

新潟市では、すでに昭和九（一九三四）年七月に防空演習が実施されていた。太平洋戦争が始まった後の十七年九月には、市全域で焼夷弾攻撃を想定した防空演習が実施され、バケツリレーの消火訓練が始まった。十八年十月には、新潟県は新潟市内に防空壕や公共待避所を設けることにした。学校・会社・工場には、穴を掘ったり土嚢を積んだりした待避所が造られた。市内の主な道路にも一〇人程度収容できる待避所を一〇か所設けた。しかし、まだ待避所や防空壕は数も少なかったし、壕内に水がたまっただまになっている所もあって、市民はあまり必要性を感じていなかった。

アメリカ軍の本土攻撃が必至になると、新潟市は市内の防空壕や待避所を見直し、十九年十一月から国民学校高等科・中等学校の生徒や町内会・隣組を動員して防空壕を増設した。二十年三月には新潟市内に九六二一の待避壕があり、さらに増設する計画になっていた。また、東京大空襲以降、家々の塀の取り壊しも始まり、各家々の防空壕をだれでも使えるようにし、家々の空き地をつないで広くし、火災から逃げやすくした。家の中では屋根を突き抜けた焼夷弾が天井板で止まって火をつけないように、天井板を取り外した。各町内では防火用水を用意した。その外、衣料や家具を疎開することも奨励された。

第一次建物疎開

新潟市域にB29が飛来するようになると、新潟県は新潟市が空襲されるのは避けられないとして、二十（一九四五）年五月から市内で建物の強制的な疎開を開始した。

建物疎開は「防空法」に基づいて進められた。空襲によって起きる火災が広がって、重要な施設を類焼しないように、防火区域として空き地を作るもので、事前に建物を取り壊し、住民も疎開させた。十九年一月、東京と名古屋で指定地区内の建物が強制的に取り壊されたのが初めて、その後、空襲の激化に伴い全国の重要都市で建物疎開が実施された。

新潟市では二十年五月から八月までの間に、三次にわたって建物の強制疎開が命じられた。最初の疎開は、地域も限られた小規模なものであった。新潟港の機能を守るための建物疎開で、対象になった地域は、沼垂駅前とその付近の線路沿い、中央埠頭と臨港埠頭の引込線沿い、永戸教付近（現水戸教公園付近）であった。この範囲に含まれた家屋、約一万平方メートルが取り壊されることになった。五月三日に新潟県と新潟市は関係者を新潟市役所に集め、五月十日までに移転を済ませるように指示した。新潟県は疎開の対象となった人のために、新潟市役所の沼垂出張所内に疎開事務所及び相談所を開設し、午前八時から午後九時まで相談に応じた。また、新潟市では疎開者の壮行会を計画した。

建物疎開の対象となった建物の住民が移転するとすぐに、建物の持ち主自らか、あるいは

国民義勇隊が建物を取り壊した。国民義勇隊は戦争末期に本土決戦に備えて編成された国民総動員の組織である。建物の持ち主には補償金が支払われたが、わずかであった。

第二次建物疎開

六月になると、県は、県庁内に都市部の疎開について検討する総合本部を設け、二十八日、新潟・長岡・高田（現上越市）・柏崎・三条の五市、新発田・直江津・新津の三町（現新発田市・上越市・新津市）に対して建物疎開を実施することを決めた。

この建物疎開は、ますます激しく、一層範囲を広げていくアメリカ軍の空襲に備えて、重要な施設・工場や鉄道を守り、消防道路を確保することを目的に、その周囲や沿線・沿道の建物を取り壊す措置であった。新潟市は、六月二十九日に関係者を公会堂に招集し、その内容を具体的に指示した。新潟郵便局（現新潟中郵便局）の周辺の建物を取り壊すことになり、古町通七番町では町内の約四分の一が対象になった。畑新旅館は七月十五日に引き払い、その後、建物を取り壊すのに二日ほどを要したという。この外、大和百貨店・新潟鉄工所・新潟駅・白山駅（現鏡淵小学校校地）などの周辺の建物を取り壊しの対象となった。また、鍛冶小路、横七番町通、栄国民学校（現栄小学校）から他門川六ノ橋の間の道路、県庁（現市役所本館敷地）の裏から白山駅への道路、学校町通の小山医院上手の道路、流作場から沼垂へ至る万代町通などを拡幅するために、道路沿いの家屋が取り壊された。全体で三九か所、約一七万平方メートルに及んだ。

第三次建物疎開

八月一日、長岡市はB29による大空襲を受け、市街地の約八〇パーセントを焼失した。この空襲は、県に大きな衝撃を与えた。県は、かねてから計画を立てていた第三次建物疎開を実行に移すことにし、六日にこれを公表した。

この建物疎開の対象になった地区は、既に戦災都市となった長岡市を除く、新潟・高田・柏崎・三条の四市と、これに隣接する幾つかの町村であった。空襲のときに逃げる道路を設けること、重要施設を防護すること、燃えやすい木造家屋を間引くことが目的であった。今まで認めていた自力による移築は原則として認めず、それまで一週間あった移転までの猶予期間も三日にした。取り壊しの対象となった家々には町内会長が一括して通知した。また、建物疎開の範囲がさらに拡大することが予想されたので、旧市内への移転は認めず、郡部へ移転するように命じた。

新潟市は、六日午前十時から緊急町内会長会議を開き、この建物疎開の内容や方法を示した。その方法は、市内四か所に事務所を設け、県の職員がそれぞれ主任になり、主任は市職員・警察署職員とともに疎開該当地区に出向き、町内会長と自衛部長立ち会いの下に、疎開



図31 建物疎開後の古町十字路口付近 「タ刊ニヒガタ」昭和21年5月18日から

対象となる家屋を決定し、その家屋に赤紙を張り、評価額を決め、立ち退き後の建物は国民義勇隊や軍隊がすぐに取り壊すというものであった。疎開対象になってしまえば否応もなく取り壊すやり方であった。この建物疎開では新潟市の市街地の五分の一に当たる建物が対象になる予定であった。

この疎開作業は七日に始まったが、十一日に新潟市民に対する人員疎開の県知事布告が出されたため、中止された。

「新潟県人員疎開実施要綱」

二十(一九四五)年五月から開始された建物疎開に伴い、そこに住む人も疎開していたが、七月二十七日に、県は「新潟県人員疎開実施要綱」を出し、新潟市と長岡市の市民の疎開に本腰を入れることにした。

この「要綱」は、空襲の激化に対処して、都市防衛体制を整備するとともに、「人的物的資源」の被害を防止・軽減するために、老人・幼児・妊産婦・病弱者とその介護者を急いで疎開させる計画であった。つまり防空に足手まといになる弱者を疎開させてしまうという計画である。その具体的内容としては、疎開先は近郷の農村とし、知り合いや親戚しんせきの所に疎開する縁故疎開を原則とすること、国民学校児童の集団疎開はしないこと、疎開すべき人には市長が疎開を勧め、町内会長・隣組長・国民学校長を通じて知らせること、疎開する人の荷物はできるだけ少なくして、近距離の輸送にはトラックは避け、荷車やリヤカーを使うことなどであった。

新潟市は、「要綱」の公布に先立って、二十五日に緊急町内会長会議を開いて、町内会長に「要綱」の内容を示すとともに、疎開申告書の作成、疎開証明書の交付、列車の乗車券、荷物の内容・容量などについて具体的に説明した。

しかし、こうした疎開を実施すると、家族の一部が疎開して別々の生活となるため生活費が増えたり、家に残った人の炊事・掃除・洗濯などが不自由になったり、配給物資の受け取りに困ったりするという問題も起きた。そのため疎開は順調には進まなかった。また、疎開のために留守がちになる家があり、空襲されたときに責任を持って対処する人がいなくて防空上危険であるといった問題もあった。

第二節 原爆投下の危惧と市民の疎開

市民は疎開せよ

新潟県が「新潟県人員疎開実施要綱」を出した五日後の二十(一九四五)年八月一日、長岡市はアメリカ軍B29の大空襲を受け、一四〇〇人余の命が失われた。そのため新潟県は八月六日に、第三次建物疎開を公表し、建物と人の大規模な疎開に取り掛かった。

八月六日には広島に、そして九日には長崎に、原子爆弾が投下された。原子爆弾には、そ

れまでの防空壕や建物疎開は何の役にも立たなかった。加えて十日には新潟市がアメリカ軍艦載機の銃爆撃を受けた（四八ページ参照）。

新潟県知事ら県の幹部は、十日午後から緊急会議を開いて、新潟市民の疎開について検討した。会議には、広島に投下された「新型爆弾」の視察のために派遣された警防課職員の報告書も提出された。この職員は、途中の混乱のため広島に行くことができず、東京の内務省で収集した断片的な情報をもとにして報告書を作成した。その報告書には「新型爆弾」は爆心地から三里（約一二キロメートル）以内が危険であること、ソ連が日本に宣戦を布告したこと、長崎にも同型の爆弾が投下されたこと、内務省は新潟市民の疎開には反対であることなどが記されていた。意見が分かれたが、夜を徹した会議の結果、新潟市民の緊急疎開を実施することになった。国の意向に反した決断であった。

十一日、次の十日付け「知事布告」（口絵参照）が公表された。

知事布告

（昭和二十年八月十日）

鬼畜敵米ハ新型爆弾ヲ使用シ、広島市ヲ暴爆シタ。之ガ為同市ハ従来国内諸都市ガ蒙ッタ空襲ニ比ベテ、極メテ僅少ノ爆弾ヲ以テ最大ノ被害ヲ受ケタノdeal。此ノ被害ハ今迄ノ各種防空施設ヲ殆ド無効トシ、従来ノ民防空対策ヲ以テハヨク對抗シ得ナイ程度ノモノデ、人命被害モ亦実ニ莫大デアッテ、酸鼻ノ極トモ謂フベキ状態デアッタ。此ノ新型爆弾ハ我国未被害都市トシテ僅ニ残ッタ重要都市新潟市ニ対スル爆撃ニ、近ク使用セラレル公算極メテ大キイノdeal。茲ニ於テ県ハ熟慮ノ結果、人的資源ヲ確保シ戦力ノ保全ヲ期スル為、別記ノ如キ措置ヲ急速且強力ニ実施スルコトト致シタ次第deal。

市民各位ハ既ニ敵ノ中小都市ニ対スル空爆開始以来、疎開ニ関シ充分ナル理解ヲ以テ着々実行シテ来タノdealガ、変転ノ激シイ戦局ト暴戾ナル敵ノ攻撃手段ニ対シ、市民各位ハ覚悟ヲ新ニシ、本措置ニ基キ更ニ一層徹底シタル疎開ヲ急速ニ実施シナケレバナラナイ。

本措置ハ敵ノ無辜ノ市民ニ対スル殲滅的殺傷企図ニ、肩スカシヲ喰ハセントスルモノdeal。本措置ハ甚ダ突然dealガ、ヨクコノ趣旨ヲ諒解シ、益々闘魂ヲ燃ヤシ、逃避的ニ墮セズ、整齐タル秩序ヲ以テ、市外転出ヲ為ス様特ニ要望シテ止マナイ次第dealリマス。

新潟市ニ対スル緊急措置要項

- 一、一般新潟市民ノ急速ナル徹底的人員疎開
- 二、重要工場ノ有効且能率的ナル疎開
- 三、公共施設ノ疎開
- 四、新潟市ニ於ケル建物疎開ノ一時中止

この「布告」は、これまで大空襲を受けていない新潟市が、「新型爆弾」つまり原子爆弾の攻撃を受ける公算が大であること、したがって新潟市民の徹底的な疎開を急速に行わなければならないこと、そのために、新潟市の建物疎開は一時中止することなどを呼び掛けた

ものである。

疎開する市民

新潟市は、十一日午後一時三十分から緊急町内会長会議を開き、この「緊急措置要項」について県・市が説明し、町内会長の質疑を受けた。その会議では次のような具体的な疎開の方法が示された。新潟市民は、早急に、しかも徹底的に、近郷へ疎開する。疎開を受け入れてくれる縁故者がいない人は、町内ごとに名簿をとりまとめて市へ提出する。これらの人々には、北・中・西・南・東蒲原郡、三島郡、刈羽郡、岩船郡の八郡に疎開先を割り当てる。疎開証明書を持参した人は、優先的に列車に乗車させる。持参品は、身の回りの必需品、主要食料品、家庭用米穀通帳、家庭用品購入通帳などに限り、大きな荷物は控える。家族全員が疎開する場合は、町内会長と隣組長の証明書と通帳類を疎開先へ持参する。家族の一部が疎開する場合もこれに準ずる。同一家族が二か所以上に分かれて疎開したり、県外へ疎開する場合には、従来の手続きによって市長が証明書を交付する。

しかし、十一日に町内会長から「知事布告」を知らされる前に、新潟市民の疎開は始まっていた。この「知事布告」のうわさは、十日のうちに市民に広がっていた。十日の夜から「ある町内会では避難命令が出たので、一人残らず二里以上離れた地域に避難するように伝達した」とか、「ある交番の警察官が一軒一軒回って避難を強要している」といったデマが乱れ飛んでいた。十日夜から十一日朝にかけて、新潟市から近郷に通じる道路は、大きな荷物を担いだり、沢山の荷物をリヤカーに積んだりした市民で埋まった。蒲原浄光寺住職蒲原靈英は八月十一日の日記に、「新型爆弾の出現に依り広島、長崎（一発）にて全滅説伝わり市内より三里外、退去命令のデマ出で昨夜深更より退去者多き為め憲兵まで制止に出動せりと」と記している。

また、この疎開の対象外の、国・県・市などの職員、軍需品・生活必需品の生産・配給関係者など、市内に残らなくてはならない人々の中にも疎開した人がいて、混乱は一層広がった。八月十二日、疎開しなかった蒲原は日記に「夜間ラジオも沈黙して人の声も聞こえず、^{はいきよ}廢墟の如く敗戦前夜の感あり」と記した。

新潟華工管理事務所には収容されていた中国人を緊急疎開させるように、東新潟警察署から指示があった。疎開先は北蒲原郡濁川村立濁川国民学校（現新潟市立濁川小学校）であった。十二日には、三隊に分かれて、重症患者は担架に乗せ、食糧や炊事道具を天秤棒で担ぎ、身の回り品や寝具を持って、徒歩で移動した。^{より}俘虜収容所の俘虜は疎開させなかった。

原爆投下候補地新潟

果たして新潟市には原爆の投下が予定されていたのであろうか。

アメリカではかねてから原爆の投下目標地点について検討していた。日本人の抗戦意欲を挫折させ得るような場所であること、軍事的性格を多分に持っていること、原爆の効果を正確につかめるよう、まだ被害を受けていない場所であること、最初の目標は、爆弾の破壊

力を完全に把握できるだけの広さがあることを選定の基準として、その目標をどこにすべきか討議が重ねられた。

二十（一九四五）年五月十日に開催された原爆投下目標を選定する第二回目の会議で、新潟市は、「本州西北海岸」にある港湾で、他の港湾が破壊されるにつれて、重要性が増しつつある、工作機械工場があり、工場疎開の潜在的な中心地でもある、精油所や倉庫もある、と位置付けられ、原爆投下目標の候補地に挙げられた。

この会議では、新潟市は候補地となったが、一貫して候補地になっていたのではなく、この後もあるときは候補地となり、また、あるときは候補地から除外された。しかし、こうした経緯から、原爆が試される可能性のある都市として、アメリカ軍内部では新潟市に対して通常の焼夷弾などによる爆撃を禁止する命令が出されていたのである。

パンプキン投下

アメリカ軍は原爆を模した大型爆弾を用いて投下訓練をしていた。その模擬原子爆弾は、「パンプキン」と呼ばれた。この爆弾がオレンジ色に塗装されていたこと、ずんぐりと丸い形をしていたことからパンプキン（かぼちゃ）と呼ばれたのである。元々は兵士が使っていた通称であったが、公式の文書にもこの名称は用いられた。パンプキン一発に詰められた火薬量は、通常爆弾で最大の一トン爆弾の四倍半あり、強力な爆弾であった。パンプキンは、原爆と同じように、マリアナ諸島テナン基地を飛び立ったB29が、一機一発ずつ搭載し、基本的には目標に目視で投下した。

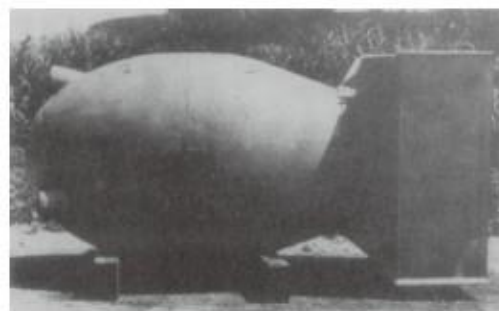


図32 模擬原子爆弾パンプキン 奥住喜重・工藤洋三訳『米軍資料 原爆投下の経緯』から

パンプキンの投下目標は、原爆の投下目標都市を避け、その周辺の都市、しかも焼夷弾などによる通常の攻撃目標になっていない都市の中から選定する必要があった。原爆投下候補地である新潟の周辺都市としてパンプキンの目標として選定された場所は、アメリカ軍の資料によれば、郡山市の「日本精練」・「操車場」・「軽工業工場（工場名未確認）」・「品川製作所」、福島市の「軽工業工場（工場名未確認）」、長岡市の「工場（工場名未確認）」・「津上安宅製作所」、富山市の「不二越製鋼東岩瀬工場」・「日満アルミニウム」・「日本曹達^{ソード}富山製鋼所」であった。

アメリカ軍は、この計画に基づいて、おおむね一目標に対し一機を派遣した。実際には新潟県内に三発のパンプキンが投下された。

七月二十日、二機のB29が長岡に向けて出撃した。そのうちの一機は、長岡市の津上安宅製作所に対してレーダーでパンプキンを投下した。これは古志郡上組村左近（現長岡市）に落ち、四人が死亡し五人が重軽傷を負った。一五〇メートル離れた農家がほぼ全壊した。しかし、投下したB29はその結果を観測できなかった。もう一機は長岡の「工場名未確認」の

工場を目標にしたが、雲に隠れていたため平市(現福島県いわき市)にレーダーで投下した。

七月二十六日には四機が長岡を目指した。一機は、目標の長岡市の「軽工業」の工場を雲で発見できなかったため、柏崎にレーダーでパンプキンを投下した。これは刈羽郡西中通村長崎(現柏崎市)に落ちた。田で農作業中の二人が死亡し、六人が重軽傷を負った。この攻撃結果もB29は観測できなかった。一機は「未確認目標」を目視して投下した。このパンプキンが落ちたのは、東蒲原郡鹿瀬町の昭和電工鹿瀬工場近くの阿賀野川岸であった。人に被害はなかったが、破片が飛んできた集落で塀や戸障子が壊れた。この投下ではB29は上空から爆発を写真撮影することに成功した。もう一機は再び津上安宅製作所に向かったが、雲で目標が見えなかったため、茨城県の日立精銅所へ投下した。残りの一機は平市の工業地区に目視で投下した。

パンプキンが投下されたことは、当時、あまり注目されなかった。パンプキンは、目標地点に一度に一発しか投下されず、落下場所によっては被害が少なかった。また、原爆投下の訓練という目的も分からなかった。これらのことが現在も人々に知られていない原因であろう。新潟を原爆投下地に想定した、新潟県内の目標へのパンプキン投下は、天候不順のため投下の結果を観測できなかったり、目標を発見できなかったりした。しかし、アメリカ軍の投下したパンプキンは多くの人を犠牲にしたのである。

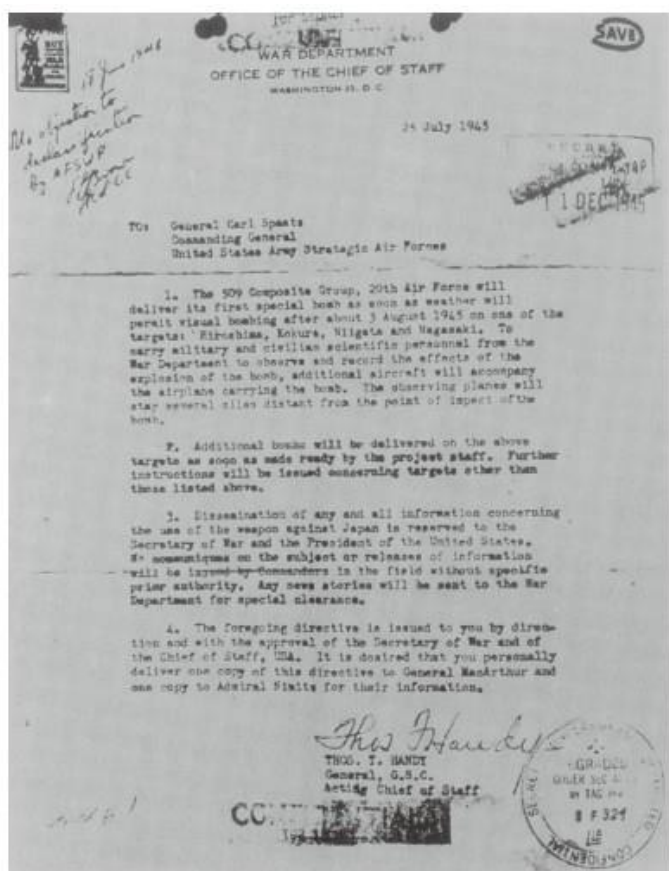


図33 原子爆弾投下命令 本文4行目に「Niigata」とある 『The Army Air Forces in World War II』 Vol.5から

原爆投下命令と作戦命令

二十(一九四五)年七月十六日、ニューメキシコ州アラモゴードの砂漠で原爆実験が成功した。そのことは、直ちにベルリン郊外のポツダムに滞在するトルーマン大統領に報告された。それは「ポツダム会談」の開始される前日のことであった。原爆の投下についてポツダムとワシントンで討議が重ねられ、「ポツダム宣言」が公表される前日の七月二十五日に原爆投下目標が確定した。

日本に原爆を投下せよという命令は、大統領に随行しポツダムに滞在していた陸軍参謀総長マーシャルの代理として、ワシントンにいるハンディが署名し、陸軍戦略航空軍司令官スパーツに手渡した。その命

令は次のようであった。

一九四五年七月二十五日

アメリカ陸軍戦略航空軍司令官カール・スパーツ将軍あて

一、第二〇航空軍第五〇九混成部隊は、一九四五年八月三日ごろ以降、目視による爆撃が可能な天候になり次第速やかに、次の目標、広島・小倉・新潟・長崎の一つに最初の特種爆弾を投下せよ。陸軍省より派遣された軍人及び民間科学者が爆発効果の観測及び記録に従事するために、爆弾投下機に観測機を随伴させよ。観測機は爆発地点から数マイルの距離をおいてとどまれ。

(中略)

参謀総長代理 トーマス・T・ハンディ

ここに、新潟市は、広島市・小倉市（現福岡県北九州市）・長崎市とともに、原爆投下目標の一つに確定した。

この「原爆投下命令」を受けたグアム島の陸軍第二〇航空軍司令部では、八月二日に次の作戦命令を出した。

作戦命令一三号

特殊爆撃任務一三

任務実行 一九四五年八月六日

攻撃目標 第一目標 広島市街地工業地域

第二目標 小倉造兵^{しょう}廠及び市街地

第三目標 長崎市街地

この作戦命令では新潟市は目標から除外された。その理由をアメリカ軍の資料は「原子爆弾攻撃のために取り分けてあった四都市の中で、新潟は工業が集中している地区と小さな工場を含んだ居住地域とが互いに遠く離れているため、この種の攻撃のためには不適當である」と記している。

この作戦命令よって、八月六日に広島に人類史上最初の前爆が投下された。

続いて、八月九日には長崎に原爆第二号が投下された。八月八日に出されたこのときの作戦命令でも、攻撃の第一目標は小倉造兵廠及び市街地、第二目標は長崎市街地になっていて、新潟市は除外されていた。

新潟市は、早い段階から原爆の投下目標候補地に上がっていた。そのため焼夷弾による空襲を受けなかった。七月二十五日の段階では原爆投下目標の一つに確定した。しかし、前線基地での検討の結果、原爆投下のねらいに照らして不適當と判断され、八月二日の作戦命令の目標からも、また、八月八日の作戦命令の目標からも除外されたのである。

八月八日、ソ連は日本に宣戦した。八月十日、日本政府は「ポツダム宣言」を条件付きで受諾する旨の電報を連合国へ発した。この日、新潟県では、県の幹部による緊急会議が開かれ、翌日、新潟市民に対し徹底的な緊急疎開を呼び掛ける「知事布告」が公表された。そして、十五日、天皇は日本国民に対して「ポツダム宣言」の受諾を告げた。

新潟市に駐屯していた軍隊は、ほとんどは八月末から九月にかけて去っていった。九・十月には連行されてきていた朝鮮人・中国人も俘虜収容所の俘虜も帰国した。しかし、問題は残った。戦争犯罪に問われた人がいた。未処理の機雷が経済の復興を妨げ、後々まで人命を奪った。そして、戦争中に新潟で起こったことを調査し、記録し、後世に伝えることは十分になされなかった。

参考文献

各章共通

- 建設省『戦災復興誌』第壱巻 都市計画協会 昭和三四
- 『新潟県警察史』 新潟県警察史編さん委員会 昭和三四
- 『郷土新潟』第六号 新潟郷土史研究会 昭和四〇
- 新潟市政進展史編さん部『新潟市政進展史』三 新潟市 昭和四三'
- 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 海上護衛戦』 朝雲新聞社 昭和四六
- 新潟県民生部援護課『新潟県終戦処理の記録』 新潟県 昭和四七
- 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 本土方面海軍作戦』 朝雲新聞社 昭和五〇
- 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 大本営海軍部・連合艦隊一戦争最終期一』 朝雲新聞社 昭和五一
- 日本の空襲編集委員会『日本の空襲』 三省堂 昭和五六
- 第一復員省資料課『日本都市戦災地図』 原書房 昭和五八
- 『新潟県史』資料編一六・通史編八 新潟県 昭和六〇・六三
- 新潟臨港海陸運送株式会社社史編纂委員会『創業八十年史』 新潟臨港海陸運送株式会社 昭和六二
- 『新潟市史』別編一・資料編七・通史編四 新潟市 平成元・六・九
- 百瀬孝『事典昭和戦前期の日本 制度と実態』 吉川弘文館 平成二
- 新潟県立新潟工業高等学校創立五十周年記念誌編集委員会『北方に睦く』 新潟県立新潟工業高等学校創立五十周年記念事業実行委員会 平成二
- 上林真弓『兄が残した日記』 近代文芸社 平成七
- 新潟地方航空機乗員養成所記念誌編集委員会『新潟地方航空機乗員養成所』（第二版） 長谷川印刷 平成七
- 近藤新治『近代日本戦争史』第四編 同台経済懇話会 平成七
- 社史編纂委員会『新潟鉄工所 一〇〇年史』 株式会社新潟鉄工所 平成八
- 『祖父母が伝える太平洋戦争』 新潟市郷土資料館 平成八

第一章

- 『創業六十年史』 新潟臨港海陸運送株式会社 昭和四一
- 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 本土防空作戦』 朝雲新聞社 昭和四三
- 新潟市立教育研究所『新潟市義務教育百年のあゆみ』編集資料第三集 新潟市教育委員会 昭和四三
- 鏡淵小学校百周年誌編集委員会『創立百周年記念誌かがみふち』 鏡淵小学校百周年記念事業実行委員会 昭和四七
- 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 本土決戦準備〈1〉』 朝雲新聞社 昭和四六
- 『沼垂校百年史』 新潟市立沼垂小学校・沼垂小学校百周年記念実行委員会 昭和四七
- 『松浜校百年誌』 新潟市立松浜小学校創立百周年記念実行委員会 昭和四七
- 『新潟市立曽野木小学校創立百周年記念誌』 新潟市立曽野木小学校創立百周年記念実行委員会 昭和四七
- 『百年のあゆみ』 新潟市立木戸小学校・木戸小学校創立百周年記念事業実行委員会 昭和四八

- 『創立四〇周年記念誌 稚松』 新潟市立浜浦小学校 昭和四九
- 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 大本営陸軍部 昭和二十年八月まで』 朝雲新聞社 昭和五〇
- 富永謙吾『現代史資料 39 太平洋戦争 (五)』 みすず書房 昭和五二
- 舞鶴市史編纂委員会『舞鶴市史』通史編下 舞鶴市役所 昭和五七
- 百十周年記念誌編集委員『百十周年記念誌』 新潟市立濁川小学校 昭和五八
- 『浜浦はいま (創立五十周年記念誌)』 新潟市立浜浦小学校創立五十周年実行委員会 昭和五九
- 『続不沈艦響の栄光』 ひびき会 昭和六一
- 『吉田郁生のことなど』 吉田ふじ 昭和六一
- 『宮浦校創設五〇周年記念誌』 宮浦校創設 50 周年記念事業実行委員会 昭和六二
- 米澤修『私の歩いた空の道』 イメージディアシバタ 昭和六三
- 校史編集委員会『江風五十年』 新潟県立新潟南高等学校 平成元
- 『創立八十周年記念誌 わが学びやは山の下』 新潟市立山の下小学校創立八十周年記念事業実行委員会 平成二
- 新潟県立新潟高等学校『青山百年史』 新潟高等学校創立百周年記念実行委員会 平成四
- 秦郁彦『日本陸海軍総合事典』 東京大学出版会 平成四
- 海軍歴史保存会『日本海軍史』七 第一法規 平成七
- 航路啓開史編纂会『日本の掃海—航路啓開五十年の歩み—』 第一法規 平成七
- 『世界の艦船増刊第四五集 日本海軍護衛戦艦史』 海人社 平成八
- 原剛・外『日本陸海軍事典』 新人物往来社 平成九

第二章

- 朴慶植『朝鮮人強制連行の記録』 未来社 昭和四七
- 朴慶植『在日朝鮮人関係資料集成』第一巻 三一書房 昭和五〇
- 『新潟近代史研究』三 新潟近代史研究会 昭和五七
- 田中宏・内海愛子・石飛仁『資料中国人強制連行』 明石書店 昭和六二
- 茶園義男『B C 級戦犯横浜裁判資料』 不二出版 昭和六三
- 東京裁判ハンドブック編集委員会『東京裁判ハンドブック』 青木書店 平成元
- 朴慶植『日本敗戦前後の在日朝鮮人の状況』 アジア問題研究所 平成二
- 田中宏・内海愛子・新美隆『資料中国人強制連行の記録』 明石書店 平成二
- 茶園義男『俘虜情報局・俘虜取扱の記録』 不二出版 平成四
- 梁泰昊『朝鮮人強制連行論文集成』 明石書店 平成五
- 茶園義男『大日本帝国内地俘虜収容所』 不二出版 平成五
- 佐藤杏子「中国人強制連行」『新潟史学』三五 新潟史学会 平成七
- ケネス・カンボン著 森正昭訳『ゲスト オブ ヒロヒト』 築地書館 平成七
- 加藤哲太郎『私は貝になりたい』 春秋社 平成七
- 石飛仁『中国人強制連行の記録』 三一書房 平成九

第三章

W.F.Craven & J.L.Cate『The Army Air Forces in World War II』Vol.5 The University of Chicago Press
1953

『日本商船隊戦時遭難史』 海上労働協会 昭和三七

新潟鉄工所社史編纂委員会『新潟鉄工所七十年史』 新潟鉄工所 昭和四三

『新潟開港百年史』 新潟市 昭和四四

『日本郵船戦時船史』下 日本郵船 昭和四六

新潟県教育百年史編さん委員会『新潟県教育百年史』大正・昭和前期編 新潟県教育委員会 昭和四八

E.A.Johnson & D.A.Katcher『Mines against Japan』 Naval Ordnance Laboratory 1973

「東京大空襲・戦災誌」編集委員会『東京大空襲・戦災誌』第三巻 東京空襲を記録する会 昭和四九

新潟鉄工所社史編纂委員会『新潟鉄工所八〇年史』 新潟鉄工所 昭和五一

横浜市・横浜の空襲を記録する会『横浜の空襲と戦災 四一外国資料編一』 横浜市 昭和五二

池田貞枝『太平洋戦争沈没艦船遺体調査大鑑』 戦没遺体収揚委員会 昭和五二

駒宮真七郎『船舶砲兵』 協同社 昭和五二

『葦原百年史』 新潟県立新潟商業高等学校内創立一〇〇周年記念事業実行委員会 昭和五八

Friedman『US Naval Weapons』 Conway Maritime Press 1983

『新潟県民の太平洋戦争』 新潟日報事業社出版部 昭和六〇

『百年のあゆみ』 運輸省第一港湾建設局 昭和六一

日本経営史研究所『日本郵船百年史資料』 日本郵船株式会社 昭和六三

『新潟港修築史』 運輸省第一港湾建設局新潟港工事事務所 平成二

日本海汽船株式会社社史編集委員会『日本海汽船株式会社五十年史』 日本海汽船株式会社 平成二

『戦時船舶史』 駒宮真七郎 平成三

駒宮真七郎『船舶砲兵部隊史』 船舶砲兵部隊慰霊碑を守る会 平成四

『はまなす』第三七号 新潟県立相川高等学校生徒会刊行委員会 平成六

雑誌「丸」編集部『神風特別攻撃隊・本土防衛作戦』 光人社 平成七

雑誌「丸」編集部『潜水艦作戦』 光人社 平成七

小川仁示訳『米軍資料 日本空襲の全容—マリアナ基地B29部隊—』 東方出版 平成七

戦没船を記録する会『知られざる戦没船の記録 下巻 断末魔の海上輸送』 柘植書房 平成七

第四章

佐渡汽船「六十年のあゆみ」編集委員会『六十年のあゆみ』 佐渡汽船株式会社 昭和四八

『昭和石油三十年史』 昭和石油株式会社 昭和四九

日本石油株式会社新潟製油所六十年所史編集委員会『新潟製油所六十年所史』 日本石油株式会社新潟製油所 昭和五四

「兵科物語「船舶兵物語」座談会（第一回）」『偕行』三八三 偕行社 昭和五七

大橋泰蔵「新潟空襲に思うこと」『郷土新潟』第二六号 新潟郷土史研究会 昭和六〇

石井勉『アメリカ海軍機動部隊』 成山堂書店 昭和六三

古川達郎『鉄道連絡船一〇〇年の航跡』 成山堂書店 昭和六三

酒田市史編さん委員会『酒田市史』 改訂版下巻 酒田市 平成七

松原茂生・遠藤昭『陸軍船舶戦争』 陸軍船舶戦争刊行会 平成八

第五章

F・ニーベル C・ベイリー二世著 笹川正博・杉渕玲子訳『もはや高地なし』 光文社 昭和三五

L・グローブス著 富永謙吾・実松譲訳『私が原爆計画を指揮した』 恒文社 昭和三九

L・ギョワニティ F・フリード著 堀江芳孝訳『原爆投下決定』 原書房 昭和四二

西島有厚『原爆はなぜ投下されたか』 青木書店 昭和四六

『広島原爆戦災誌』第一巻 広島市 昭和四六

『長崎原爆戦災誌』第一・五巻 長崎市 昭和五二・五六

山極晃「原爆投下目標の決定」『国際問題』No.二三四 国際問題研究所 昭和五四

伊藤鼎・外『沼垂定住三百年記念誌 んったり』 沼垂定住三百年祭実行委員会 昭和五九

『図説東蒲原郡史 阿賀の里』下巻 東蒲原郡史編さん委員会 昭和六〇

市史編さん委員会『柏崎市史』下巻 柏崎市 平成二

山極晃・立花誠逸訳『資料マンハッタン計画』 大月書店 平成五

奥住喜重・工藤洋三・桂哲男訳『米軍資料 原爆投下報告書』 東方出版 平成五

奥住喜重・工藤洋三訳『米軍資料 原爆投下の経緯』 東方出版 平成八

『長岡市史』通史編下 長岡市 平成八

新潟歴史叢書 2

戦場としての新潟

平成十年(一九九八年)十一月三十日発行

◎編集発行……新潟市

〒九五一 ー 八五五〇

新潟市学校町通一番町六〇二番地一

◎印刷……………(株)文久堂

〒九五一 ー 八〇五一

新潟市新島町通四ノ町二二四二ー乙